

# 松本市島立三の宮遺跡

——県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書——

1988・3

松本市教育委員会

# 松本市島立三の宮遺跡

——県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査報告書——

1988・3

松本市教育委員会



調査地 (東より) 第1検出面



仏像出土 (竪穴状遺構 1)



第15号 住居址 (南より)

## 序

島立三の宮地区は北栗・南栗地区と同様埋蔵文化財の集中する一帯として知られております。昭和58年以来行われてきたば場整備事業も徐々に整い当地における調査も4年目を迎え、前回までと同様緊急発掘調査を実施し記録保存を図る事となりました。

調査は松本地方事務所から松本市教育委員会に委託され、市教委職員を中心に地元考古学者、地区的皆様の協力により61年7月26日から10月17日にわたり行われ、多大な成果をおさめ無事終了することができました。その結果、古墳時代から近世にかけての住居跡など、多数の遺構が発見され、今までの調査結果もあわせてみると、三の宮を含む島立地区一帯にかけて広範囲に拡がる古代の村のようすの一端をうかがう事ができました。折しも周辺では中央自動車道長野線建設、これに伴う発掘調査も大規模に行われており、近い将来には地区の様相も一変してしまう時その歴史的記録をとどめておくことが私達に課せられた責務と考えております。又今回の成果と今後の周辺調査とにより一層の島立地区の歴史的解明がなされる事と信じております。

最後にこの調査にあたり多大なご理解とご協力をいただきました島立土地改良区をはじめ、島立公民館、地元のみなさまに心から感謝いたしまして序といたします。

昭和63年3月

松本市教育委員会 中島 俊彦  
教 育 長

## 例　　言

1. 本書は昭和61年7月26日より10月17日にわたり実施された松本市島立三の宮遺跡の緊急発掘に関する報告書である。
2. 本調査は松本市が長野県松本地方事務所より委託を受け、松本市教育委員会が行なったものである。
3. 本書の執筆は第1章事務局、第2章2節太田守夫、第3章2節－3竹原学 同2節－5西沢寿晃 同3節－1神沢昌二郎（陶磁器） 2直井雅尚（土器） 同2神沢昌二郎（鉄）その他の項目は高桑俊雄が行なった。
4. 本書作成に関する作業分担は次のとおりである。  
遺構図トレース：土橋久美子  
遺物・図整理：乾靖子  
遺物実測・トレース：岩野公子、竹原学、土橋久子、藤井尚子（土器）、神沢昌二郎（鉄器）、  
土橋久美子（石器等）  
写真撮影：宮嶋洋一  
一覧表作成：石合英子（遺構、土器以外遺物）、竹内忍（土器）
5. 本書の編集は事務局が行ない、滝沢智恵子の助力を得た。
6. 調査地周辺では、（財）長野県埋蔵文化財センターが発掘調査をしており御指導を得た。また、卷頭航空写真も同センターより提供を受けた。
7. 調査にあたり島立土地改良区事務長吉江利春氏、島立公民館長丸山光清氏他地区の方々の御理解と御協力を頂いた。
8. 遺物整理に関しては、（財）県埋文センター調査研究員、宇賀神誠司、原明芳氏らより助言を得た。記して感謝申し上げる。
9. 出土遺物及び図類は松本市立考古博物館が保管している。

# 目 次

## 第1章 調査経過

第1節 事業の経緯と文書記録	1
第2節 調査体制	1
第3節 作業日誌	3

## 第2章 遺跡の環境

第1節 調査地の位置	7
第2節 地形と地質	9
第3節 周辺遺跡	12

## 第3章 調査結果

第1節 調査の概要	13
第2節 遺構	
1 住居址	17
2 竪穴状遺構	33
3 建物址	37
4 土壙・ピット	60
5 三の宮遺跡出土の馬骨について	62
6 墓址・溝	86
第3節 遺物	
1 土器・陶磁器	88
2 金属器・錢	122
3 石器・石製品	123
第4章 調査のまとめ	134

# 表 目 次

表1 建物址分類表	38	表7 平安時代土器観察表	121
表2 建物址一覧表	52	表8 金属器(含鉄滓)一覧表	128
表3 土壙一覧表(1)	74	表9 錢一覧表	129
表4 土壙一覧表(2)	77	表10 石器・石製品一覧表	131
表5 陶磁器一覧表	113		
表6 弥生時代末~古墳時代土器観察表	115	付図 島立三の宮遺跡 遺構全体図	

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡範囲と調査地	2	第31図 建物址9, 10, 34	45
第2図 土層概略	7	第32図 建物址11~15	46
第3図 調査範囲	8	第33図 建物址19~23	47
第4図 周辺遺跡	11	第34図 建物址24~27	48
第5図 検出遺構	14	第35図 建物址28, 30~32	49
第6図 遺構配置(1)	15	第36図 建物址41, 43	50
第7図 遺構配置(2)	16	第37図 建物址42	51
第8図 第1号住居址	18	第38図 遺構配置(3)	59
第9図 第11号住居址	19	第39図 土壌(1)	63
第10図 第12号住居址	20	第40図 土壌(2)	64
第11図 第13号住居址	21	第41図 土壌(3)	65
第12図 第14号住居址	22	第42図 土壌(4)	66
第13図 第15号住居址	23	第43図 土壌(5)	67
第14図 第16号住居址	24	第44図 土壌(6)	68
第15図 第17号住居址	25	第45図 土壌(7)	69
第16図 第18号住居址	26	第46図 土壌(8)	70
第17図 第19号住居址	27	第47図 土壌(9)	71
第18図 第20号住居址	28	第48図 土壌(10)	72
第19図 第21号住居址	29	第49図 土壌(11)・ピット	73
第20図 第22号住居址	31	第50図 墓址・溝	87
第21図 第23号住居址	32	第51図 中近世の陶磁器(1)	97
第22図 竪穴状遺構1	34	第56図 中近世の陶磁器(6)	102
第23図 竪穴状遺構2	35	第57図 平安時代の土器	103
第24図 竪穴状遺構11・12	36	第58図 弥生時代末～古墳時代の土器(1)	104
第25図 建物址1, 2	39	第66図 弥生時代末～古墳時代の土器(9)	112
第26図 建物址3, 4, 33	40	第67図 出土金属器(1)	124
第27図 建物址5, 29	41	第70図 出土金属器(4)	127
第28図 建物址6	42	第71図 出土銭	130
第29図 建物址7, 16~18	43	第72図 出土石器(1)	132
第30図 建物址8, 35	44	第73図 出土石器(2)	133

# 第1章 調査経過

## 第1節 事業の経緯と文書記録

- 昭和60年10月9日 埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、中信土地改良事務所、松本市教育委員会。
- 昭和61年1月10日 昭和61年度補助事業計画書提出。
- 4月15日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 5月1日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 5月30日 昭和61年度県當は場整備事業島立地区三の宮遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を結ぶ。
- 6月9日 昭和61年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月23日 昭和61年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 7月27日 三の宮遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知提出。
- 8月4日 昭和61年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。
- 8月29日 昭和62年度埋蔵文化財保護協議を市役所及び現地にて実施。出席者は長野県教育委員会、松本地方事務所、松本市教育委員会。
- 10月28日 三の宮遺跡埋蔵文化財拾得品及び同保管証提出。
- 11月27日 三の宮遺跡埋蔵物の文化財認定通知。
- 12月23日 昭和62年度補助事業計画書提出。
- 昭和62年4月28日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金内定連絡。
- 5月16日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付申請書提出。
- 7月11日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付申請書提出。
- 7月20日 昭和62年度国宝・重要文化財等保存整備費補助金（国庫）交付決定通知。
- 8月5日 昭和62年度文化財保護事業補助金（県費）交付決定通知。

## 第2節 調査体制

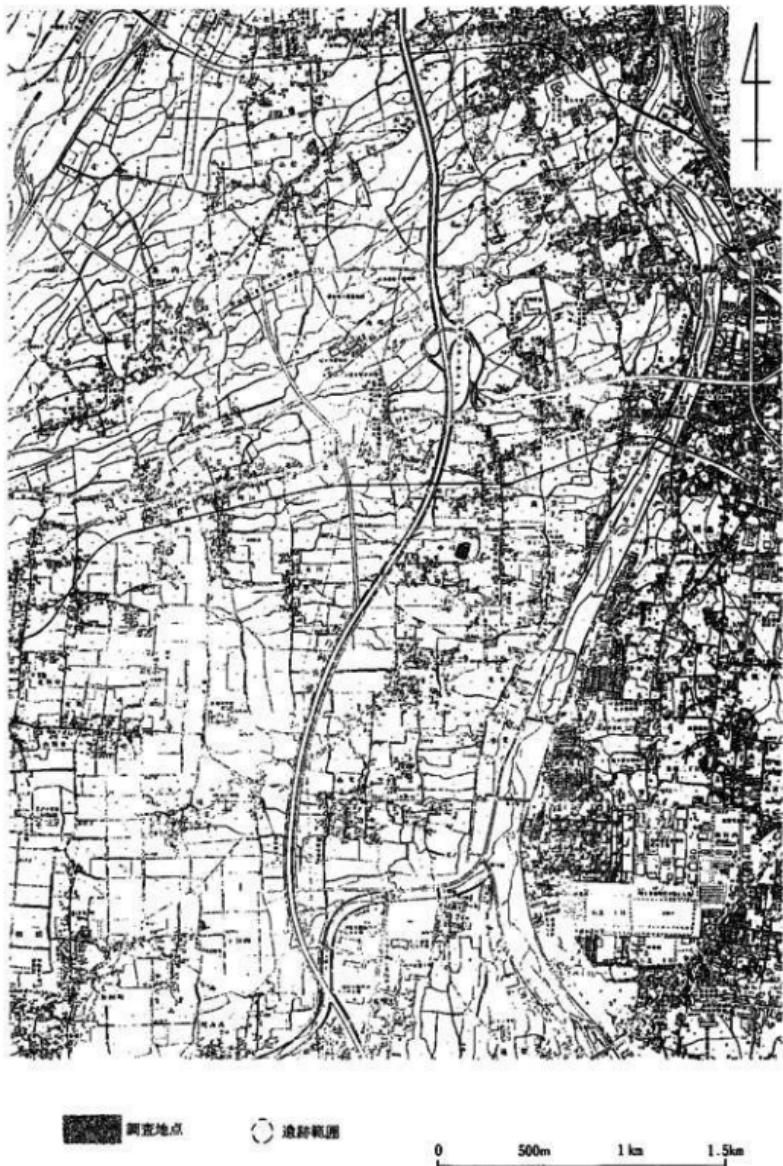
調査団長：中島俊彦（教育長） 調査担当者：神沢昌二郎（市立考古博物館長）

現場担当者：高桑俊雄（社会教育課）、木下 守（社会教育課）

調査員：太田守夫、土橋久子、西沢寿晃、三村 雄、横田作重

協力者：赤羽弓子、浅野房子、浅野恵美、石合英子、石合佐千子、一之瀬充美、乾靖子、上杉朋子、鶴飼千生子、大久保幸子、大沢重子、小沢渭人、小野勝近、小野いつ美、甲斐幸子、金子富人、小林熱、近藤秀夫、佐々木謙司、佐々木登毬美、塩原はま子、塩原久和、瀬黒節子、田口吉重、田多井うめ子、田多井宣、田淵光章、鶴川登、中村安雄、萩原愛子、原重治、原てるみ、平田美恵子、藤田英博、藤牧豊子、穂刈真己、松森幸子、丸山恵美、丸山恵子、丸山直之、百瀬敦、百瀬一子、百瀬義友、役田昭子、矢島利保、鰐三智恵、渡辺京子、深志高校地歴会考古班

事務局：浜憲幸（社会教育課長）、岩瀬世紀（文化係長）、柳沢忠博（主事）、熊谷康治（主事）、直井雅尚（主事）、岩野公子



第1図 遺跡範囲と調査地

### 第3節 作業日誌

- 昭和61年7月28日 (月) 晴 5ヶ所にて試掘する。 作業員：佐々木謙司他2名（以下作業員員数のみ記載） 市教委：高桑（途中より木下加わり以下同様）
- 7月29日 (火) 晴 重機による表土剥ぎ。発掘資材の運搬及テント設営。 作業員：3名
- 7月30日 (水) 晴 ブレハブ、トイレの組立て。焼土により墓址を確認。 作業員：3名
- 7月31日 (木) 晴 南より重機にて検出開始。 作業員：3名
- 8月1日 (金) 晴 南西部より検出開始。中世の土壤、ピットが多出。 作業員：10名
- 8月2日 (土) 晴 検出作業継続。 作業員：9名
- 8月4日 (月) 雨 雨のため作業中止。
- 8月5日 (火) 曇時晴 検出作業継続。重機本日に終了。 作業員：21名
- 8月6日 (水) 晴 南部・南部東・北部西検出作業。 作業員：20名
- 8月7日 (木) 晴 中央～北部検出作業。 作業員：28名
- 8月8日 (金) 晴 住居址1基検出。1号住居址（以下○住とする）、豎穴状遺構（以下豎とする）1掘り下げ開始。 作業員：28名
- 8月9日 (土) 晴 トランシットによる測量。1住、豎1掘り下げ継続。 作業員：27名
- 8月11日 (月) 晴 ベンチマーク設定。トランシットによる測量継続。土壤、ピット掘り下げ開始。 作業員：24名
- 8月12日 (火) 晴 トランシットによる測量終了。土壤、ピット掘り下げ継続。 作業員：15名
- 8月18日 (月) 曙 1住掘り下げ継続。豎1掘り下げ休止。墓址1掘り下げ、土層図作成。 作業員：20名
- 8月19日 (火) 曙 豊1掘り下げ再開、銅製仏像出土。墓址1写真撮影。土壤、ピット掘り下げ継続・土層図作成。 作業員：23名
- 8月20日 (水) 晴 1住土層図作成。土壤平面図作成開始。 作業員：20名
- 8月21日 (木) 曙 豊1より銭出土。墓址2掘り下げ開始。 作業員：23名
- 8月22日 (金) 晴 豊1、土壤、ピット掘り下げ継続。 作業員：25名
- 8月23日 (土) 晴 豊1土層図作成。1住平面図作成。土壤34より人齒、銭出土。 作業員：24名
- 8月25日 (月) 晴 1住床面精査。土壤73より馬骨出土。馬骨、墓址2の骨写真撮影。 作業員：31名
- 8月26日 (火) 晴 1住柱穴検出、半割。土壤74馬骨出土。馬骨写真撮影。長野県埋蔵文化財センター百瀬新治、青沼博之調査研究員訪問。 作業員：34名
- 8月27日 (水) 晴 1住柱穴土層図・平面図作成。土壤58～60再検出。 作業員：32名
- 8月28日 (木) 晴 墓址4掘り下げ開始。土壤73、74写真撮影。県埋文センター百瀬忠幸、望月映調査研究員見学。 作業員：34名
- 8月29日 (金) 晴 風強く午後作業中止。1住南東隅ピット掘り上げ。墓址3掘り下げ開始。 作業員：34名
- 8月30日 (土) 晴 不明地点の再検出。墓址3写真撮影。土壤125より骨出土。島立公民館長丸山輝清氏

		見学。 作業員：34名
9月1日	(月) 晴	不明地点の再検出継続。土壌73, 74の馬骨取上げ。墓址2平面図作成、写真撮影。 作業員：36名
9月2日	(火) 晴後曇	建物址、ピット、溝へのトレンチ、豊2掘り下げ開始。土壌、ピット平面図作成、写真撮影。 作業員：37名
9月3日	(水) 雨	雨のため作業中止。
9月4日	(木) 晴	検出作業。土壌多数検出。土壌、ピット掘り下げ、土層図・平面図継続。 作業員：34名
9月5日	(金) 晴	1時より航空写真撮影。建物址、ピット掘上げ、線引き。建物址1～9写真撮影。豊1平面図作成。土壌130内の石取上げ。 作業員：34名
9月6日	(土) 晴後雨	雨のため午後作業中止。豊1, 2, 建物址10～25写真撮影。 作業員：32名
9月8日	(月) 曇	豊2平面図作成。土壌、ピット掘り下げ。土層図・平面図作成、写真撮影。 作業員：33名
9月9日	(火) 晴後曇	1住カマド半割、土層図作成、写真撮影。 作業員：33名
9月10日	(水) 曇後雨	遺構すべてに手が入り、ほぼ全部掘り上がる。雨のため3時半にて作業中止。一般作業は本日にて終了。土壌99, 154内の石取り上げ。建物址26～31写真撮影。 作業員：34名
9月11日	(木) 晴	測量と一部掘り下げ作業継続。土壌、ピット写真撮影。 作業員：13名
9月12日	(金) 曇	測量と一部掘り下げ作業継続。全景、墓址3, 4、土壌、ピット写真撮影。 作業員：17名
9月13日	(土) 曇	重機にて北東部より第二面検出作業開始。住居址3、建物址等を検出。第一検出面の測量と一部掘り下げ作業継続。写真撮影。 作業員：15名
9月16日	(火) 曇	重機にて東部中央辺を削平。土壌、ピット写真撮影。第一検出面作業本日にて終了。 作業員：10名
9月17日	(水) 雨	雨のため作業中止。
9月18日	(木) 晴	重機にて削平継続。検出作業開始。中世ピット掘り下げ。 作業員：26名
9月19日	(金) 晴	重機3時にて終了。11, 12, 14, 15, 16住掘り下げ開始。 作業員：28名
9月20日	(土) 雨	雨のため作業中止。事務整理作業員：塩原久和（以下事務とし員数のみ記載）
9月22日	(月) 晴	11, 12, 14住掘り上げ。15, 16住掘り下げ継続。17住掘り下げ開始。トランシットにて測量開始。 作業員：22名
9月23日	(火) 晴	11, 12, 14住土層図作成。15, 16, 17住掘り下げ継続。トランシットにて測量継続。 作業員：15名
9月24日	(水) 晴	19, 20住、建物址41, 42掘り下げ開始。15, 16, 17, 19住土層図作成。14住写真撮影。土壌、ピット掘り下げ開始。トランシット測量終了。 作業員：26名
9月25日	(木) 晴	19, 20住、建物址41, 42土層図作成。21住掘り下げ開始。 作業員：25名
9月26日	(金) 晴	14住平面図作成。21住土層図作成。15住遺物出土状況図作成。15住内炭化材、21住写真撮影。15, 20住、建42、土壌、ピット掘り下げ継続。 作業員：22名

9月27日	(土) 晴	22, 23住掘り下げ開始。11, 12住平面図作成、写真撮影。11住床面精査。15住炭化材取上げ。 作業員：13名
9月29日	(月) 晴	18住、豎12掘り下げ開始。20, 22, 23住掘り下げ継続。15, 16, 17, 19, 21住、建物址41, 42平面図作成。同写真撮影。14住床面精査、炉址断面図作成。土壤、ピット土層図作成、掘り下げ継続。 作業員：24名
9月30日	(火) 晴	測量のため一般作業は休み。南部トランシットによる測量。15住床面精査。20住平面図作成。22住、土壤、ピット土層図作成。19住写真撮影。 作業員：5名
10月1日	(水) 雨	雨のため作業中止。
10月2日	(木) 晴	13住掘り下げ開始。18住土層図、平面図作成。16, 17, 19, 21, 22住床面精査。 作業員：20名 事務：1名
10月3日	(金) 晴	土壤212より人骨、骨、銭6枚出土。写真撮影。23, 13住掘り下げ継続。土壤、ピット掘り下げ、土層図、平面図作成。 作業員：25名 事務：2名
10月4日	(土) 晴	豎11掘り下げ開始。13住土層図、23住土層図、平面図作成。18住床面精査。土壤、ピット写真撮影。 作業員：23名 事務：2名
10月6日	(月) 曇	昼より航空写真撮影。22住平面図作成。15, 18, 19, 20, 23住ピット半剖。豎11, 12掘り下げ継続。 作業員：16名 事務：2名
10月7日	(火) 曇後雨	溝11トレチ掘り下げ、土層図作成。豎11, 12, 13住平面図作成。13住、土壤、ピット写真撮影。雨のため3時に作業中止。 作業員：15名 事務：3名
10月9日	(木) 曇後晴	23住床面精査。16, 17, 21住柱穴土層図作成、掘り上げ。15, 16, 17, 18, 22, 23住、土壤、ピット写真撮影。 作業員：21名 事務：2名
10月11日	(土) 曇後雨	南側土壤写真撮影。雨のため午後作業中止。 作業員：11名 事務：2名
10月12日	(日) 曇時晴	事務：1名
10月13日	(月) 晴	12住床面精査。22住精査。23住炉址、11住カマド断面図作成。豎11, 12, 15住炉址写真撮影。全体測量開始。 作業員：15名 事務：2名
10月14日	(火) 晴	13, 20住床面精査。15住炉址半剖。全体測量。 作業員：8名 事務：3名
10月15日	(水) 晴	23住炉址断面図修正。13住ピット土層図・平面図作成。写真撮影。17, 19住炉址断面図作成。17, 19, 21, 23住炉址写真撮影。遺物、用具、図面等整理・運搬。 作業員：8名 事務：1名
10月16日	(木) 晴	21, 23住炉址掘上げ写真撮影。図面点検。11時に現場作業終了。 作業員：2名 事務：1名
10月17日	(金) 曇	本日より報告書作成に向けて、次の作業を順次行なっている。遺物洗浄、注記、復元、整理、拓影、実測、トレース、図版整理、原稿執筆、校正等。



調査開始



検出中 1



同 2



遺構 掘り下げ



人骨出土



第1 検出面 調査終了

## 第2章 遺跡の環境

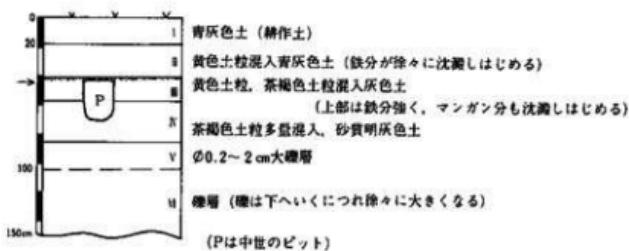
### 第1節 調査地の位置

松本市島立は奈良井川の左岸の河岸段丘上に展開している。先年迄は純農村地帯であり島立蔬菜として知られた所である。しかし昨今では長野自動車道の工事、通過などにより市内でも地区の様相の移り変わりが特に著しい場所である。

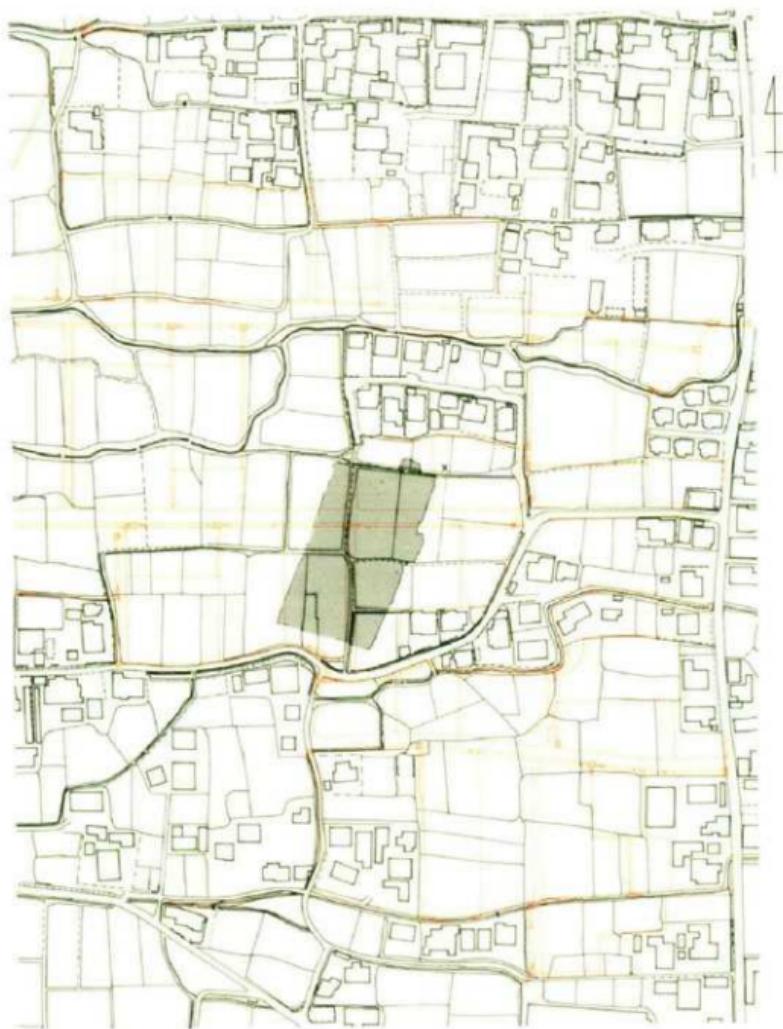
西方約200mに南西から北東へと長野自動車道が造られ、その際の調査で西から東へ巾広く砂利の高まりが存在し、その砂利の高まりにより分断された調査地区的南と北側とでは検出された遺構の種類、密度に違いがあることが示唆され(1)この高まりの東延長線上にある今回の調査地を決定したのである。

ここは三の宮遺跡として伝えている範囲の中央北寄りで、島立出張所の北側に位置する大庭、三の宮、中村の各地区にまたがった地籍である。又ここから南東200余mに御柱で知られる三の宮、沙田神社が鎮座する。土地利用状況は水田が主となっているが、このごろの減反政策もあってか畠地利用のビニールハウスもよく目につく。調査地の標高は591.4~591.7mを測り東北東に向かって緩やかに傾斜する。水利現状では北側に堂沢が、南側には宮沢がそれぞれ西から流れているが、本調査地へは宮沢からの導水が主なものとなっている。

注1 長野県埋蔵文化財センター三の宮調査現場にて実見。調査研究員より話をして聞く。



第2図 土層概略 (X印地点)



第3図 調査範囲

## 第2節 地形と地質

### 1. 位置と地形

本遺跡は、松本市島立中村集落の北東に位置している。標高 592m 前後、平均傾斜  $\frac{9}{1000}$  東ないし北東に緩く傾く平たん面で、土壤深度 60cm 以上と報告されている水田地帯にある。

地形上は梓川扇状地に属する。沖積扇状地性の堆積である。はん濫原の常として水田耕土の下は、後に述べるように同時異相の砂礫層と土層が介在する。表層では想像ができない堆積である。礫の大きさは扇状地末端の北栗遺跡群と比べ、中・大礫が普通となる。第一次発掘の遺跡面は表面から 50cm 前後、第二次発掘の遺跡面はそれよりさらに 20~25cm 下であるが、いずれも同時異相の礫層と土層の介在する堆積である。第二次の遺跡群は土層の部分に集中していた。

### 2. 堆積層と礫・遺跡の立地

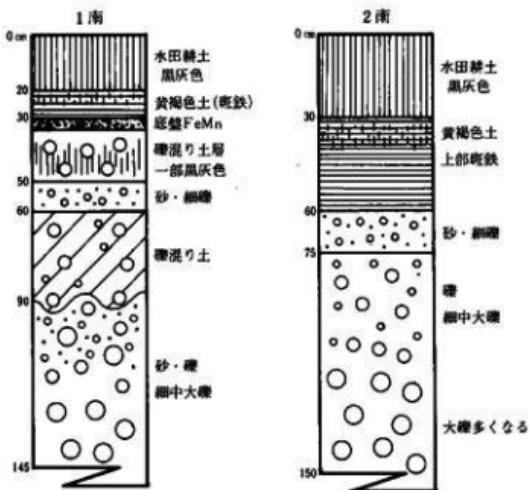
発掘地の堆積は複雑で一概にいえないが、北西部、南部、西部に砂礫の部分が多く、北東部、東部に深い土層が認められた。

挿図 1 は南部と北部の堆積層を示したものであるが、1 は砂礫部分、2 は土層部分にそれぞれ共通した堆積である。北東部では 60cm を越えて、なお土層が続いている。

発掘地内の堆積物から見られる乱流の方向は、同じ場所でも発掘面の第一次面と第二次面とで異なるものもあるが、一般に N 40°~60° E と考えられる。この中で北西部の堆積は方向性が明瞭な上、幅 4~7m の三条の砂・細礫層の間に 3m ほどの砂質の土層を介在している。これに対し南部の礫は中礫に大礫が混在し、発掘地外にかけてある時期には、相当な規模をもつ河床であったと推定される（挿図 1 の礫層）。

次に一次と二次の発掘面の堆積状態を比較してみる。

場 所	一 次	二 次
北部西(北西隅)	砂層・礫層 3 条、砂質土層 2 条 N 40°~50° E	砂層・礫層 3 条、砂質土層 2 条 N 40°~50° E
中 東(北東隅)	同 上 厚い土層	同 上 厚い土層、弥生終末期造構・遺物
中 央 部 西 中央	薄い土層 △南北性の浅い溝 1 条 土層、△南北性の浅い溝 2 条 土層、中世造構、平安後期造物	細礫・砂を含む土層 土層、△南北性の浅い溝 2 条（第 1 次と別） 土層、南北性の浅い溝 1 条
南 部 東 西 中央	礫混りの土層（中・大礫）、E-W △南北性の浅い溝 1 条 △南北性の土層（細礫）	礫層（中・大礫） △南北性の浅い溝 2 条（第 1 次と別） 礫層（細礫） △南北性の浅い溝 2 条 △東西性の浅い溝 1 条
(南東隅)	細礫 △中央(中)と南(中)の南北性の溝は連続	細礫、N 40° E △中央(中)、南(中)、南(東)の溝は連続し、 南隅を起点とし枝分れをしている。



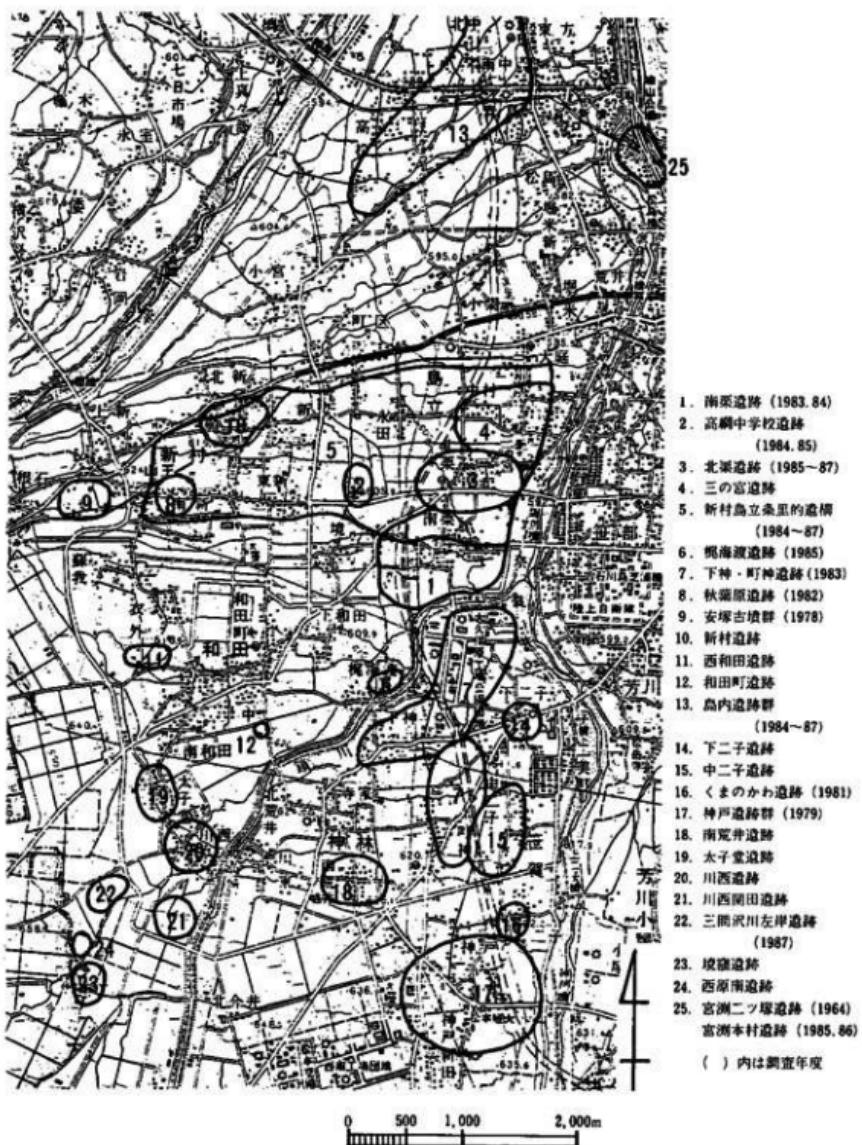
插図1 地層断面図

前述のように、二次面は一次面を20~25cmはぎとったものであるが、その堆積状況に違いが見られる。また一次面と二次面の遺跡群とは、切合いの状態になかったという。このようなことから、堆積上余り厚い被覆ではないが、弥生期以降に一度乱流か、氾濫による影響があったように思われる。この場合南隅と北西隅には継続的な流れが存在したと考えられる。南北性の溝は深さが浅く、堆積（流れ）の方向（南西→北東）と一致しない。この溝は恐らく用水としてつくられたもので、南隅の流れから導かれたように思われる。北西隅の砂礫層は鉄分による汚染が著しいが、ほ場整備に移るまでにあった、用水せぎの影響である。

発掘地内の岩石は、硬砂岩、砂岩、砂岩と粘板岩のホルンフェルス、礫岩、粘板岩、輝緑凝灰岩、チャート（灰黒色・赤色）花こう岩、ひん岩、安山岩でいずれも梓川系統のものである。

礫の大きさは細礫、小中礫のほか、径15×10cm・20×10cmの大礫、さらに花こう岩の径45×10cm、礫岩の径30×20cmのようなものも存在していた。

遺跡の立地と地形・地層の形成との関係をみると、まず基底礫層の上に、同時異相（土層と砂礫層）の堆積があった。弥生期の遺構はこの土中に営まれたものである。ついで平安後期や中世の遺構は、一度弥生期の表土が乱流か氾濫の影響を受けて、わずかの堆積であるが埋立てられ、その後立地したものと思われる。



第4図 周辺遺跡

### 第3節 周辺遺跡

本遺跡を中心として奈良井川以西部分を概観すると、まず北方には弥生中期～後期の住居址、後期古墳などを調査した宮洞遺跡、遺物は見られるがなかなか範囲のしづりきれない島内遺跡などがある。又南方には鎮川を越え下神、町神、下二子、中二子遺跡（いずれも奈良～平安時代）と続き、更に南にくまのかわ（縄文、奈良、平安時代）、神戸遺跡（縄文、平安時代）などが奈良井川の左岸上に展開する。これらはすでに当市教育委員会、長野県埋蔵文化財センターなどにより調査された遺跡である。又西方新村地区にはこれも過去に調査され末期古墳で知られる秋葉原遺跡、安塚古墳群がある。さらに遠くを望めば南西山形村境に弥生時代中期の遺物を出土する境窪遺跡などが知られている。この周辺では62年に三間沢川左岸遺跡の調査が実施され、平安時代を中心とする住居址130、建物址11、土壙40、溝3などを検出多数の縄釉陶器と印鑑などの出土をみた。又確認調査では住居址16などを確認し、さらに境窪遺跡とは三間沢川を隔てた地点（西原南遺跡）で縄文中期と平安時代の住居址が確認され三間沢川添いに長い間集落が存在していたことを示している。

島立地区で弥生、古墳時代の遺構を求めるべばまずこの調査の前年に埋文センターが堀川添いで弥生中期の住居址1基を調査している。ここからは1.5km南西である。古墳時代になると各所に見られ南栗公民館東側で奈良時代初頭迄の住居址10、建物址などを調査、ここも堀川添いであった。島立小学校東側では後期の住居址4、建物址5乃至6基など、又その東側部分の調査でも奈良、平安時代文化層下面から縄文時代遺物を含みながら複合口縁の破片を得ており、この奈良井川河岸段丘上は島立でもかなり古い時代のものを埋蔵させ、それはここから南方へ昭和59年に調査した1地区の東側（古墳時代住居址3軒検出）まで続くことを予想させる。尚この部分は新年度には場整備事業を予定している場所もある。

注1 62年度調査（未報刊）

## 第3章 調査結果

### 第1節 調査の概要

今回の調査地は南西～北東に約90mと長く、巾は50m程を予定した。北側から表土削平作業を開始し鉄分の沈澱した集積層直下にて多数の遺構を認め、まずこの面（第1検出面）を調査、終了後再び重機にて更に15～20cm程を削平し黄褐色土をとらえ、これを第2検出面として扱った。

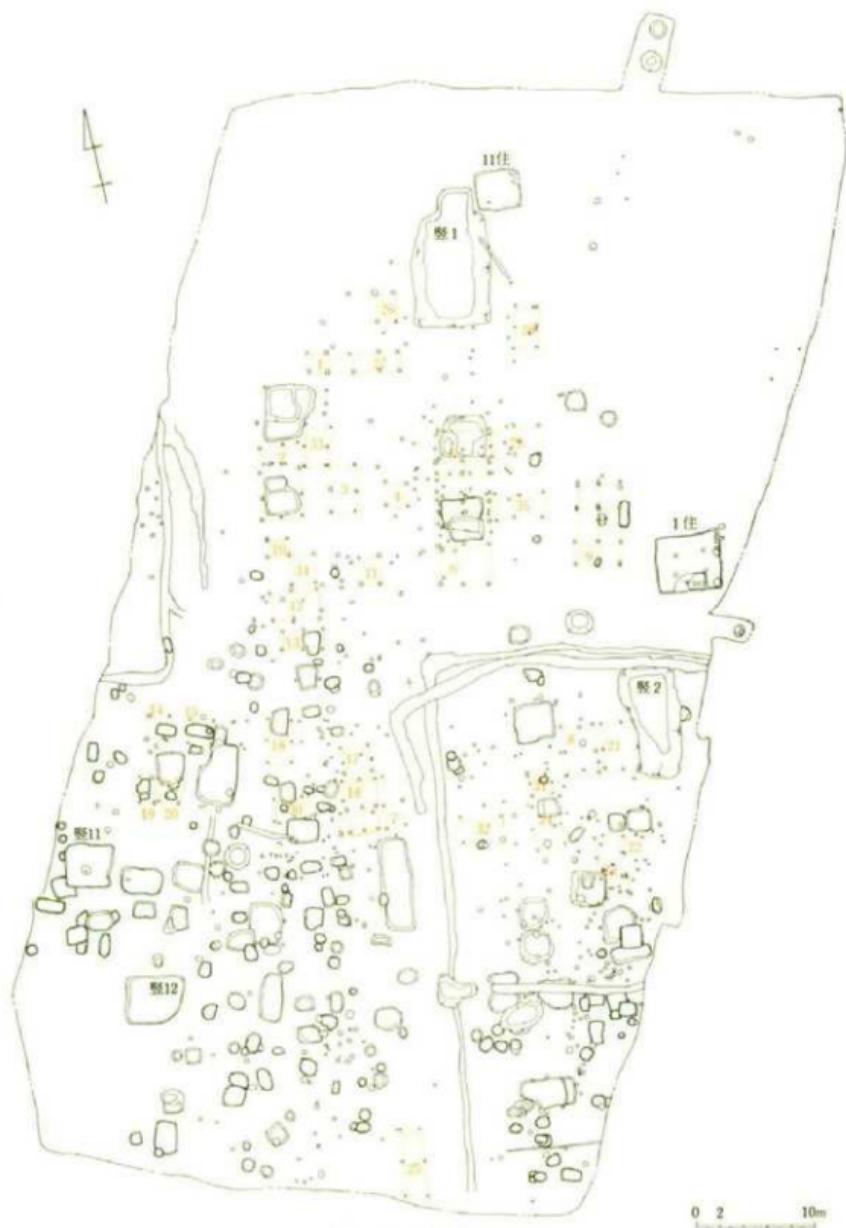
まず第1検出面では住居址1、竪穴状遺構2、建物址35、土壙197、ピット約300、他に火葬墓4、溝9などを調査した。時期的にみると住居址は平安時代後期で住居址以外のほとんどが中世～近世の遺構と考える。特に竪穴状遺構、土壙、ピットには土葬墓、馬の埋葬墓、ゴミ廐棄用穴などがある。遺物を見ても多種にわたり土師器、須恵器、各種陶器や磁器などの土器はもちろん、釘や刀子などの鉄器、煙管、針金などの銅製品などがあり、やや変ったものとして竪穴状遺構覆土中より小形の仏像が見られた。

第2検出面では第1検出面で見落した1住とほぼ同時期の住居址1、中世～近世の竪穴状遺構、土壙、ピットのはか11、弥生時代末期～古墳時代初頭の住居址を11、古墳時代後期の住居址1、それと同時期の建物址3基、土壙34、ピット50、溝などを調査した。これらは第1検出面よりある程度深く埋没していた為全体的に遺存状態が良く、又住居址間で切合ったものはない。遺物としては壺、大形壺、甕、高杯、鉢などの土器と鉄器がある。これらの遺構、遺物は島立では今まで報告もなく初見のものである。第1、第2検出面での遺構分布を比較してみると、前者では北側に古い自然流路がある為、砂と礫が露出し遺構は見当らない。又北東側は土質は良いが何故かピット以外検出できなかった。南西部も空白となるがここには耕作土が浅く砂利層となり遺構はあるようだが検出を止めた所である。第2検出面となると北側は前者同様に遺構を成立させていない。又南側にも拡大の礫が一面広がって続き、遺物、遺構も全く見当らない。

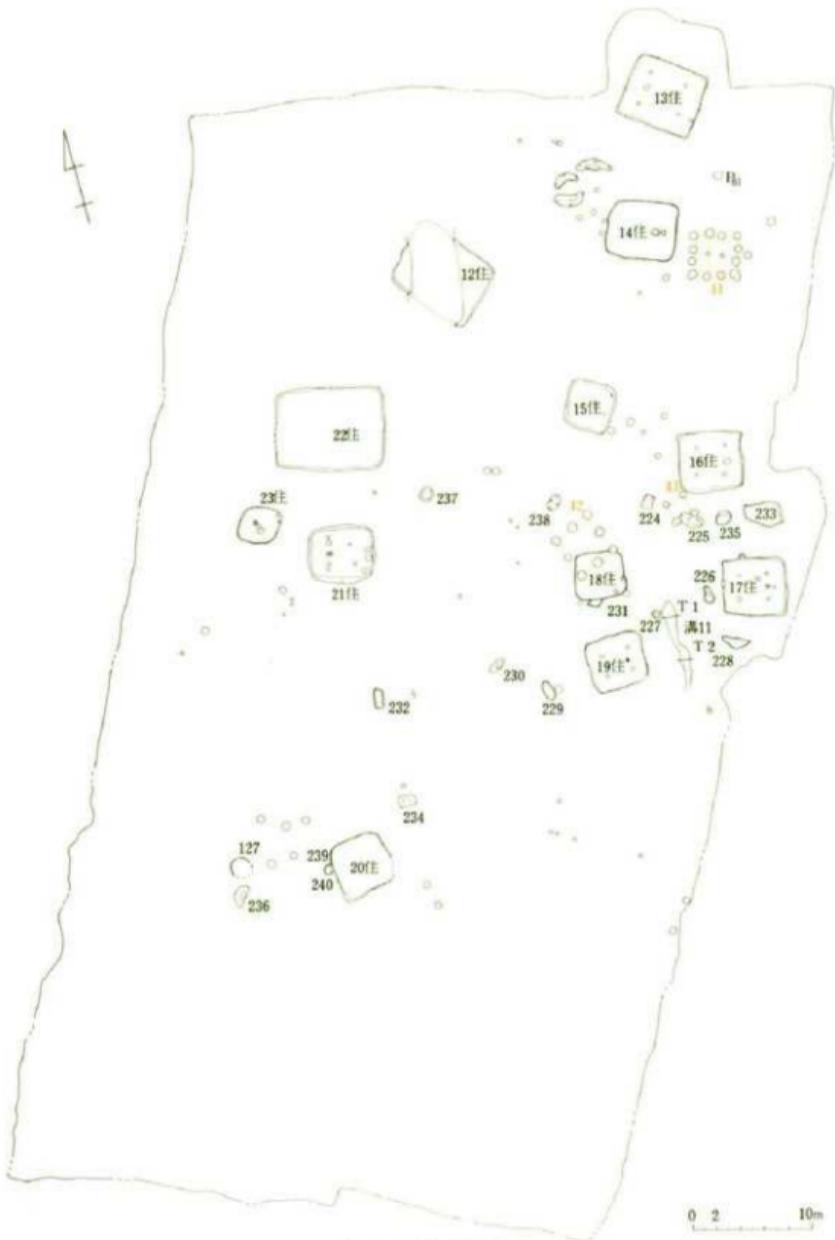
注1：11住、竪穴状遺構11、12、201以前の中空の土壙は第2検出面で調査して番号を付したが、切合などをみる為に図では第1検出面上に示している。



第5図 検出遺構



第6図 遺構配置(1)



第7図 遺構配置 (2)

## 第2節 遺構

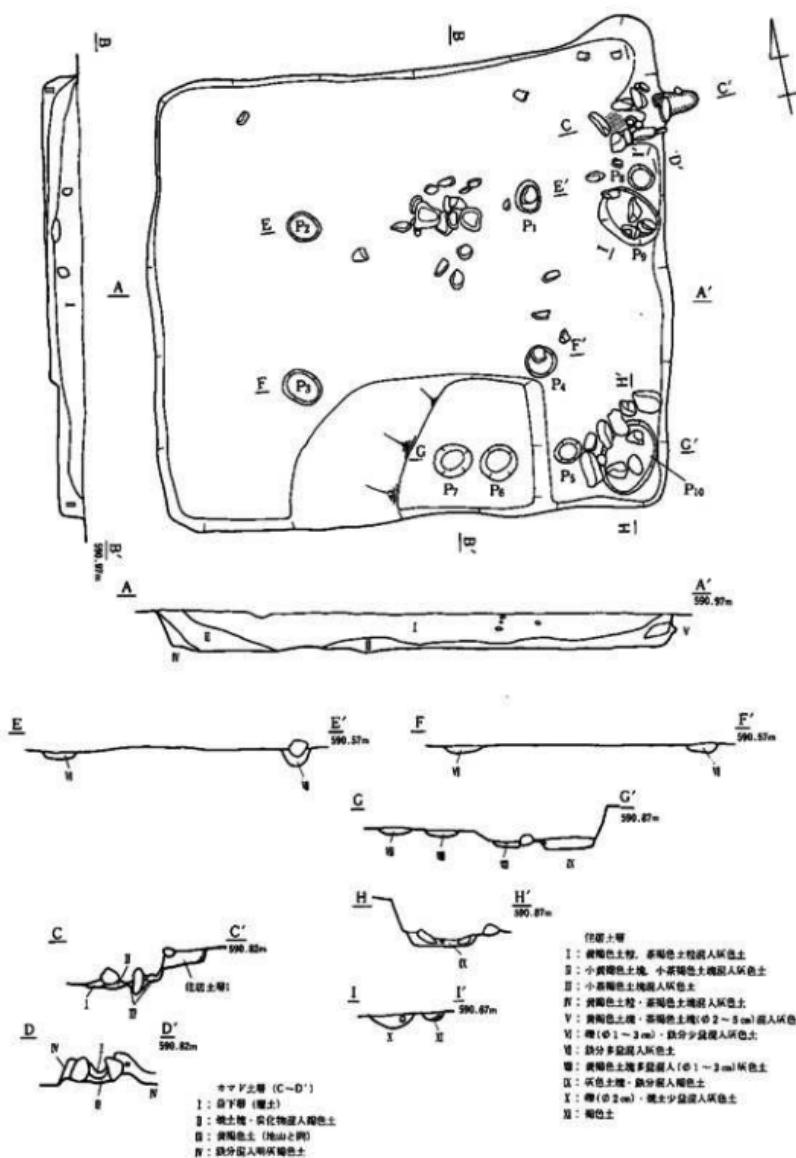
### 1. 住居址

#### 第1号住居址

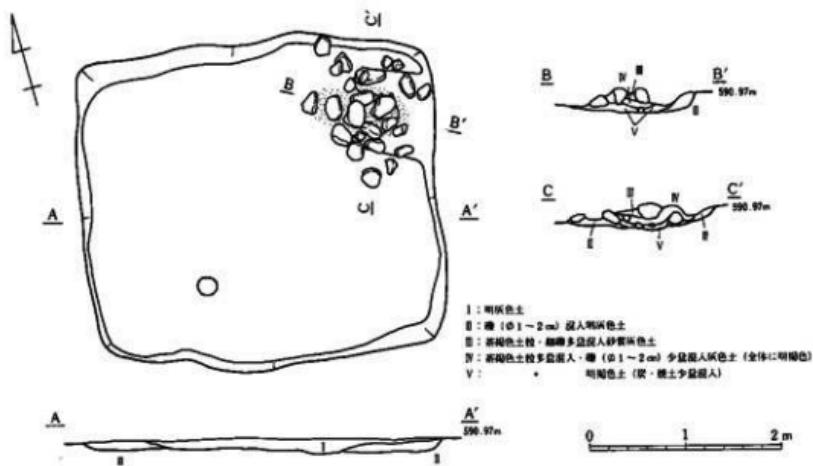
第1検出面東側中央部に位置する遺構である。検出面はマンガン分が集積する褐色土層中で付近の中世遺構と同じであるが、更に手作業で若干削平して比較的明瞭にプランをつかむことができた。覆土は灰色土で黄褐色の小さな粒子を含んでいることが付近の豊穴状遺構や土壙とは違っている。住居址中央部には小児頭大の自然石を残すが、これは土層Ⅰ層中に含まれるものである。規模は東西5.43m・南北4.65m。平面形は方形で北側が緩やかに内湾し、北東隅はやや外へ張り出す。主軸方向はN-96°-Eを示す。壁は上部が茶褐色土、下部は弱黄褐色土で直状をなし壁高は34~37cmを測る。床面は弱黄褐色を呈し中央部とその周辺が堅く良好であった。南壁際には付近の床面より5~8cm程掘り残し段差をもたせたベット状の高まりがあるがここは壁際同様堅さは見られない。遺物は覆土中にもあるが主たるものはカマド内より出土、次いで右袖の周囲から中央部にかけての床面上に見られた。

カマドは東壁北隅寄りにある石芯粘土カマドである。遺存状態が良く、袖石、支柱石は深く埋設され、天井石も1個は手前側に崩れてはいたが、1個は壁に残っていた。煙道は短かく煙出し部分で直状に立ち上がる。燃焼室はほんの僅か床面から凹められている。焼土は煙道の縁辺と焚き口に見られるのみでその量も少ない。

ピットは10基検出した。これらは住居址覆土とは異なり小礫を含む土が埋めていた。皆床面からかなり浅くその中でP<sub>1</sub>(35×27×18cm), P<sub>2</sub>(32×29×8cm), P<sub>3</sub>(42×33×8cm), P<sub>4</sub>(32×31×10cm)は配置場所から主柱穴と考える。カマド際のP<sub>5</sub>(67×49×14cm), 南東隅のP<sub>6</sub>(79×56×12cm)は貯蔵用ピットと思われる。特にP<sub>6</sub>は周囲に人頭大の石を7個配置し付近の床面からは6~12cm程上部を高くなるようにして埋められており、厨房的な施設がここに存在していたのであろうか。遺物は土師器壺・皿・碗・羽釜・鉢形土器、灰釉陶器碗があり、15点を図示した。これらの遺物より本址は南朝期に位置付けられよう。



第8図 第1号住居址



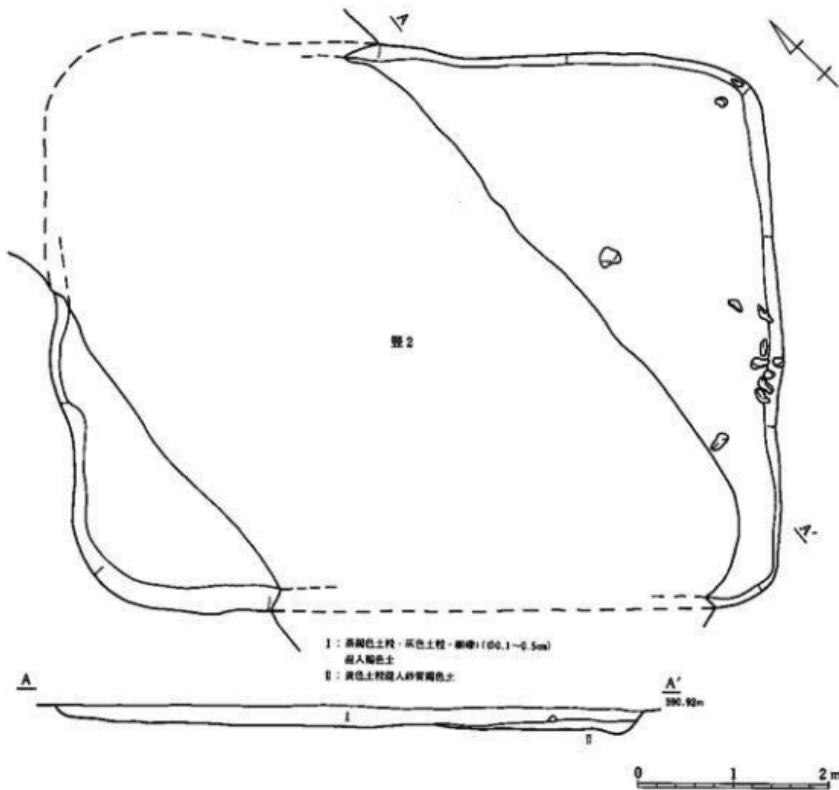
第9図 第11号住居址

### 第11号住居址

第2検出面北部中央に確認した遺構である。第1検出面ではレベルが高すぎてプランをつかむことができなかつたものである。ここにはかなり古い自然流路があったらしく一面砂利で本址も0.5~5cmの大の中礫層中に掘り込まれ、覆土は主として明るい灰色土、壁際には崩れ込んだ礫を多量に含んでいる。規模は東西3.70m・南北3.35mと小形で平面形は不整な方形を呈し、主軸方向はN-96°-Eと1号住居址と全く同じ数値である。壁は自然堆積の礫を露呈し緩やかに立ち上がる。検出面が本址にとってやや低すぎる為か壁高は15~20cm程度であった。床面には礫上に外部から持ち込んだと思われる黄褐色土が薄く敷かれているのが認められるが、それでもかなり礫が露出している。遺物は非常に少なくほとんどが床面から得られたものである。

カマドは東壁北隅寄りに位置する。低い両袖の上部に石が設置されており、石芯カマドと考える。この周囲には埋没時に投入されたと思われる石が混入し、これがカマドを破壊し原形を止めてはいない。燃焼部分は床面より7cm程掘り凹められ、焼土・炭化物はごく少量であるが、奥壁側から焚き口へ薄く広がっていた。ピットは検出したが本址に伴なうものではない。

遺物は少なく、土師器鉢形土器1点を図示できた。

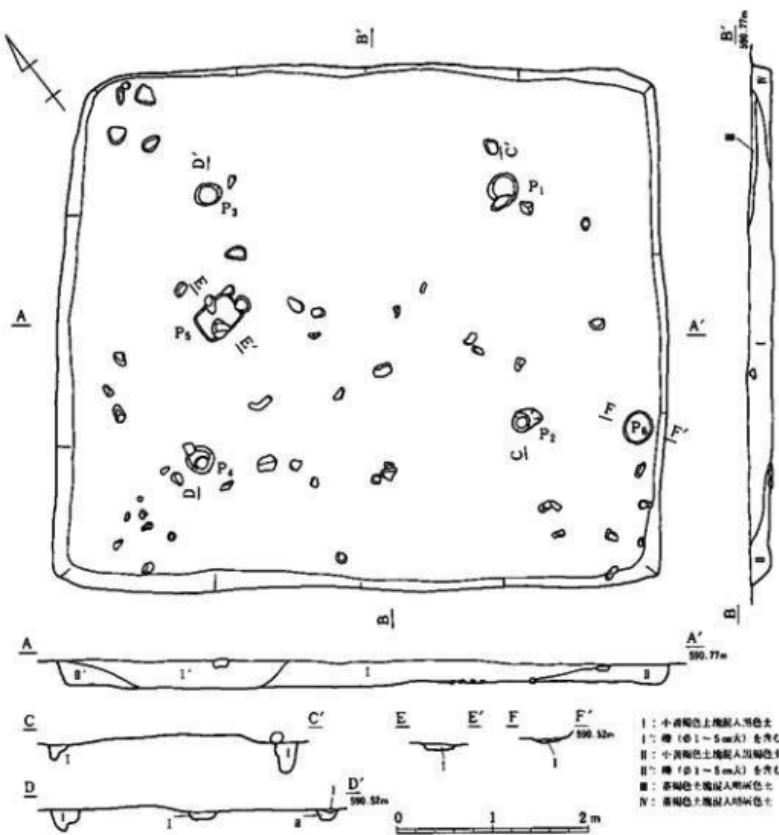


第10図 第12号住居址

#### 第12号住居址

北側に位置する。本址の中央部に竪穴状遺構があるため全体の四割程度を調査した遺構である。西側は砂利層中に東側は黄褐色土中に検出した。覆土は細かな礫を多く含む砂混じりの褐色土で13号以下の住居址とはかなり異なる隅丸長方形を呈するもので、長軸7.55m×短軸5.80m程の規模をもち、長軸方向はN S - 43°である。西側では壁、床面とも礫が露出し壁高は12~15cm、東側においては壁は黄褐色土で15~20cmを測り、緩やかな立ち上がりを呈する。床面は黄色土となり部分的に堅さを残している。又転入したと思われる拳大の礫が南壁際中央部にある。遺物は少なく東側から少量得たのみである。尚焼土・ピット等は全く検出できなかった。

図示し得た遺物は高壺・小形高壺・壺・甕があり、他に不明鉄製品が1点ある。



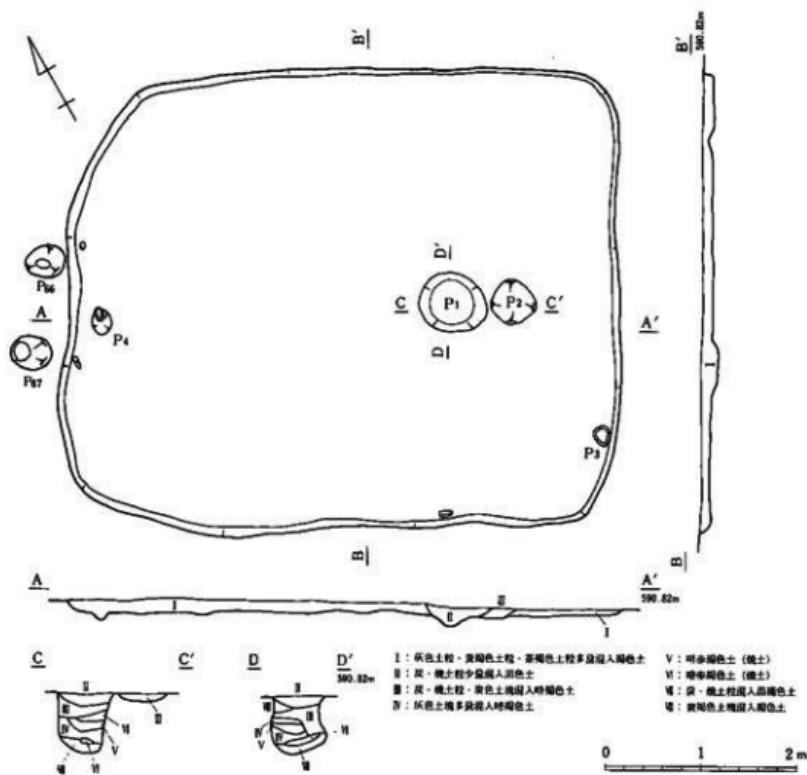
第11図 第13号住居址

### 第13号住居址

北東隅に位置する。検出面は黄褐色土で黄褐色の小塊を多量に含む黒色土を覆土とするが、北側部分は古い流路が存在していた為その礫が崩れ込んでいた。規模は東西6.38m・南北5.43mで方形を呈する。壁は北西～西で礫が露出するが他は黄褐色土で、20～25cm高さがある。床面は中央が広く黒い褐色土で周辺部は黄褐色土となり、堅さはない。遺物は上～下層まで一様に出土している。

ピットは6基ありP1(33×30×31cm), P2(30×22×15cm), P3(27×22×12cm), P4(28×28×22cm)を主柱穴と考える。Ps(47×36×7cm)は炉として良い位置にあるが焼土が全く見られない。

遺物は土器のみで、鉢・高杯・壺・甕・小形甕がある。



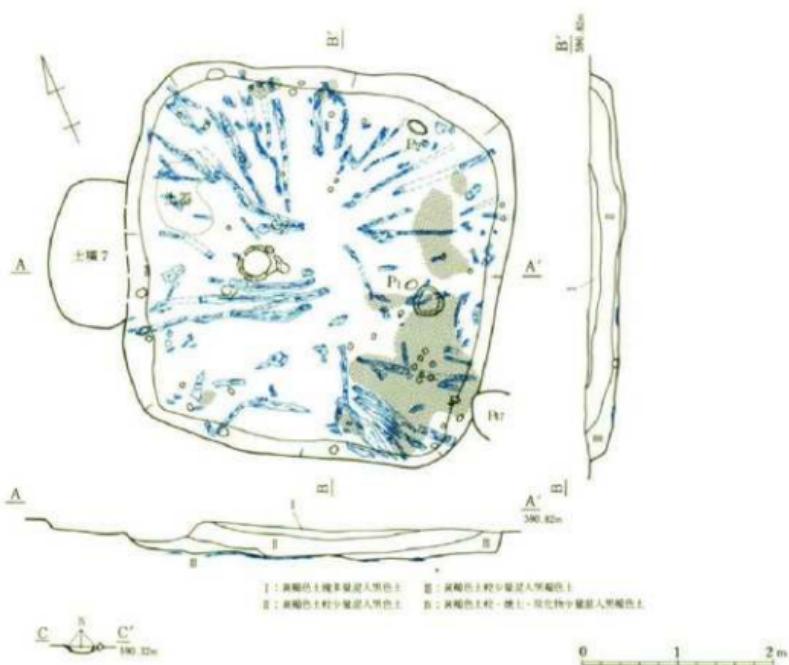
第12図 第14号住居址

#### 第14号住居址

北東部に位置する。ここは第1検出面ではほとんど遺構の見られない所である。本址の検出面は黄褐色土で覆土は茶褐色土粒が多量に含まれる為、全体として黒褐色を呈していた。東西5.75m・南北4.72mの規模をもち、西側がやや張る隅丸方形を呈する。壁は西側で12cm、東側で5cmと低い。床面は堅さなど全くなく、覆土が徐々に黄褐色土に変じていき全体が黄色っぽくなつた所を床面として捉えた。遺物は覆土の浅い為もあり極めて少なく西壁際から少量を得たにすぎない。

本址内にはピットを4基検出した。このうちP<sub>3</sub>, P<sub>4</sub>は小形であるが本址のものである。大きめのP<sub>1</sub>, P<sub>2</sub>は土層から見て別の遺構とした方がよかろう。ただ共に焼土・炭化物等を含み位置としては本址の炉に好ましい場所にある。

図示し得た遺物は少なく、鉢・高壺・壺・甕が見られる。



第13図 第15号住居址

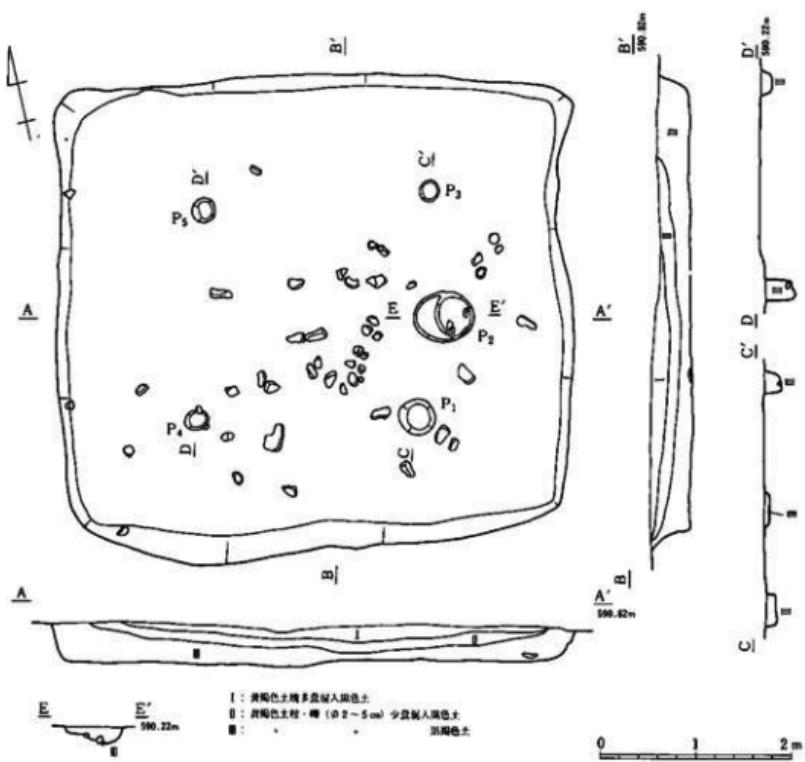
#### 第15号住居址

中央やや北東に位置する。検出面は黄褐色土で覆土は主として黒色土、下層に至り黒褐色土となり。多量の炭化材が焼土と混じり床面上に転じており今回唯一の焼失住居址である。隅丸方形を呈し規模は東西4.05m・南北4.00m、主軸方向はN-121°-Eを示す。壁高は東一南側が15-20cm、西一北側で20-25cmを測る。床面は黄褐色土で若干起伏はあるがやや堅く一部は被熱している。遺物は多くないが炉の西側床面上に見られ、ほとんどが炭化材の下になっている。炭化材は図のように住居址中央から放射状をなし、その量は隅に密度が濃いようである。東側に疎となるのは焼土が多い事より材木が完全燃焼した結果と考える。これらは遺物のない所では床面に密着するが壁側ではそれより高い位置にある。寄棟造りの住居が焼えながら内に崩れ落ちたものと観察した。

炉は中央やや西寄りにある。掌大前後の石2ヶを配し壺の胴～底部を浅く埋設する。

ピットはP1(33×31×11cm)、P2(22×12×6cm)の他、壁、床面などから直径5-10cm、深さ3-8cm程のものを45個検出した。屋内施設用のものであろう。

遺物は壺・大形壺・甕・小形高壺が挙げられ、6点を図示した。



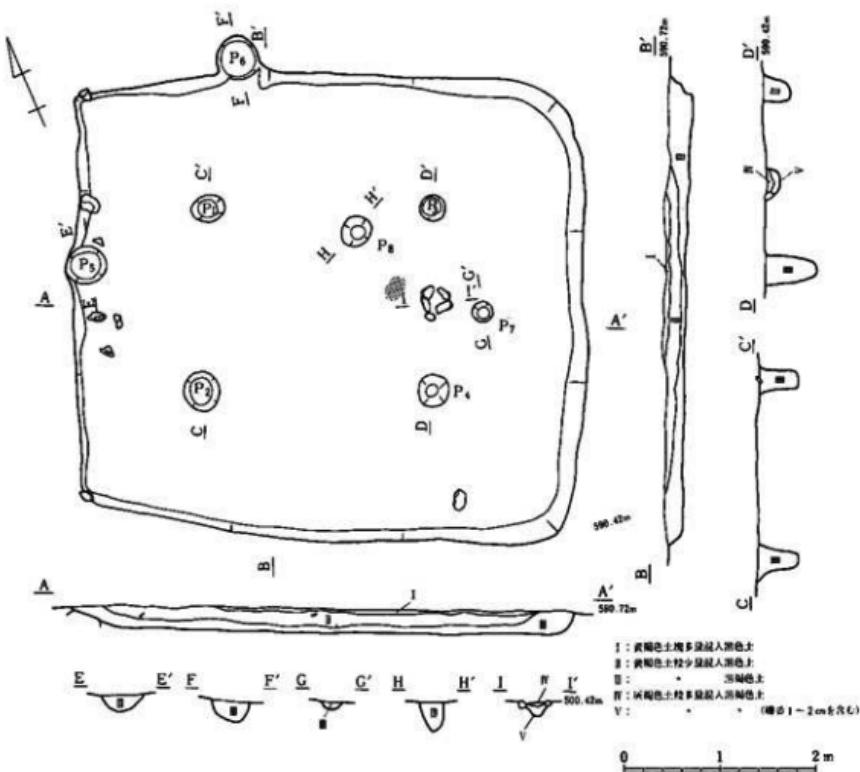
第14図 第16号住居址

#### 第16号住居址

東部北寄りに位置する。部分的な胴張り方形を呈し規模は東西5.40m・南北4.95mを測る。覆土は上層黒色土、中層以下は黒褐色土となり土層図では典型的な自然埋没を示している。壁は黄褐色土で東～北側で30cm、南～西側で40cmの壁高を測る。床面は自然礎直上にあり堅さは見られず黄褐色土が粒となり入っていることで分かる。遺物は住居址へ転入した拳大～小児頭大の礫と共に出土している。これらは覆土Ⅲ層中で住居址中央部では床面に密着した状態となり周囲ではやや高い。

ピットは5基ありこのうち中形のP<sub>1</sub> (39×36×12cm)、小形のP<sub>3</sub> (21×20×18cm)、P<sub>4</sub> (25×20×31cm)、P<sub>5</sub> (25×25×12cm) は深浅の差がかなりあるがその位置から主柱穴として考える事ができる。又大形のP<sub>2</sub> (63×52×7(13cm)) は2段底で他のピット同様住居址と同時埋没のものであり、焼土等は全く見られないが廃棄した炉の痕跡と考えると主軸方向はN-100°-Eとなる。

遺物は土器には鉢・高環・甕・小形甕・壺があり、他に棒状鉄器が出土している。



第15図 第17号住居址

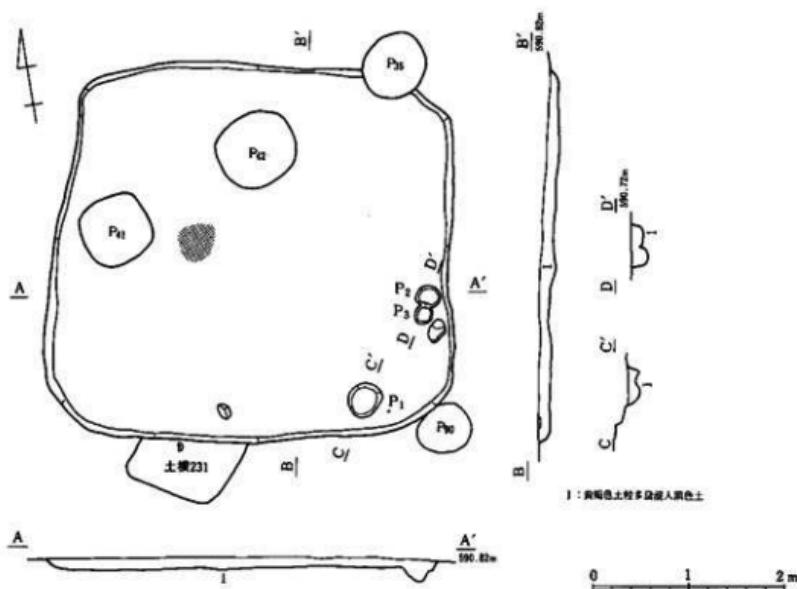
### 第17号住居址

発掘区東寄りに位置する。黄褐色土中に検出した。覆土は上層が黒色土下層は黒褐色土で自然埋没の状況を示す。規模は東西5.40m・南北4.82m、プランはやや胴張りの方形を呈し、北壁にピットが1基突出する。主軸方向はN-114°-Eを示す。壁、床面とも黄褐色土で壁高は15~25cmを測る。床面は他に比べて堅い状態だった。遺物は少なく南・北壁寄りにはほとんど見られず、住居址中央に東西に長く分布して出土した。それらはP<sub>1</sub>付近から西壁際にかけての床面上に多く見られた。

ピットは8基ある。このうちP<sub>1</sub>(35×29×41cm), P<sub>2</sub>(41×36×42cm), P<sub>3</sub>(28×27×30cm), P<sub>4</sub>(34×33×54cm)は共に深く主柱穴としてふさわしいものである。

炉は拳大よりやや大きめの石を5個配した小形の石圓炉である。真中は15cm程掘り凹められているが焼土は全く見当らず、この炉の北西外に狭い範囲で検出したのみである。

遺物は土器以外見られず、鉢・甕・壺を6点図示できた。



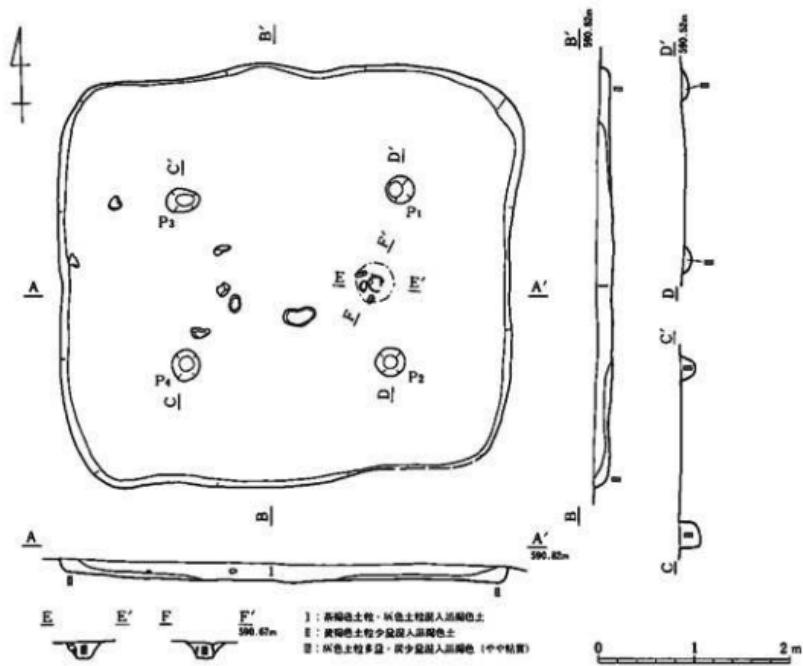
第16図 第18号住居址

#### 第18号住居址

東側中央寄りに位置する。黄褐色土中に検出。覆土は黒色土一層である。北側には本址より新しい建物址42があり、これらの深い柱穴3基が床面を一部破壊している。又南側の土壇231はその上部を本址が切っている。規模は東西4.25m・南北3.92mで隅丸方形を呈し、長軸方向はNS-80°を示している。壁は緩やかな立ち上がりを見せ、壁高は8-12cmと低い。床面も壁同様黄褐色土であるが堅さは見られない。遺物はまとまりながらほとんどが南壁際より出土した。図示する小形高壺、壺、甕、鉢などである。これらは検出面から覆土下層中にとどまり床面に達しているものは全くない。炉は中央やや西寄りに検出したが、床面より若干高いレベルにあり炉とは無関係なものと考える。

ピットはP<sub>1</sub>(38×22×14cm)の他に切り合ってP<sub>2</sub>(25×22×13cm), P<sub>3</sub>(22×18×17cm)の3基があるが主柱穴とは考えにくい。

遺物は図示したものは少なく、小形高壺・鉢・甕・壺が見られる。



第17図 第19号住居址

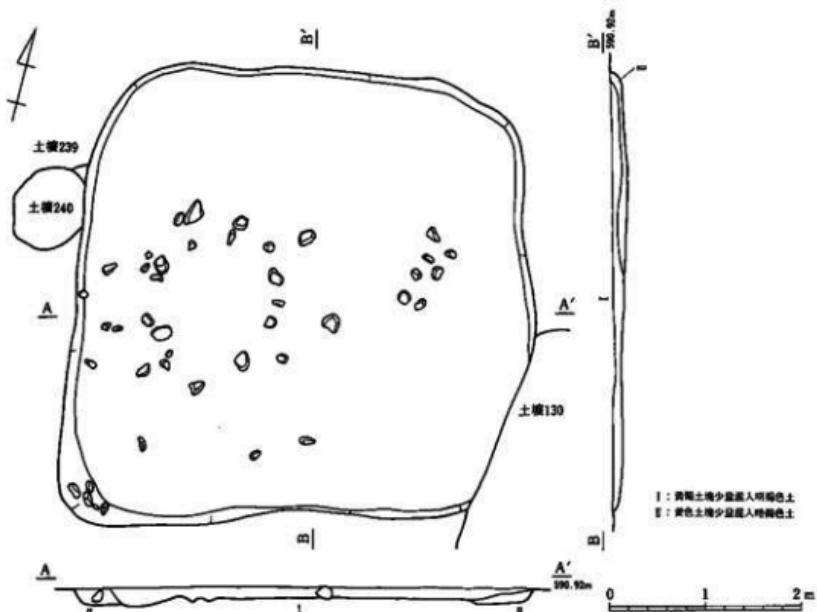
#### 第19号住居址

東側18号住居址南側に位置する。黒褐色土を覆土として黄褐色土中に検出する。規模は東西4.70m・南北4.40m、不整な隅丸方形を呈する。南東隅は第1検出面上の豊穴状遺構2の北端により小さく破壊される。主軸方向はN-89°-Eを示す。壁高は10~17cmを測り、床面は西側から中央へ向って緩やかな傾斜をなし黄褐色土塊が少量混入する程度で堅さは見られない。遺物は少なく4基のピット間に東西へ長く分布する。これは17号住居址と良く似た状況で覆土上~下層迄に含まれる。

炉は中央やや東寄りにあり土器を埋設している。拳大の石3個を床面から3~5cm程頭部を出しやや離して粗雑に配し枕石とし、口縁と底部を欠いた甕を埋めている。この中には焼土ではなく炭化物を少量認めたにすぎない。

ピットはP<sub>1</sub>(31×30×8cm), P<sub>2</sub>(33×28×8cm), P<sub>3</sub>(30×28×15cm), P<sub>4</sub>(35×25×21cm)の4基でやや浅いものもあるがこれらを主柱穴として考える。

遺物は炉に使用された甕の他、鉢・高環が挙げられる。

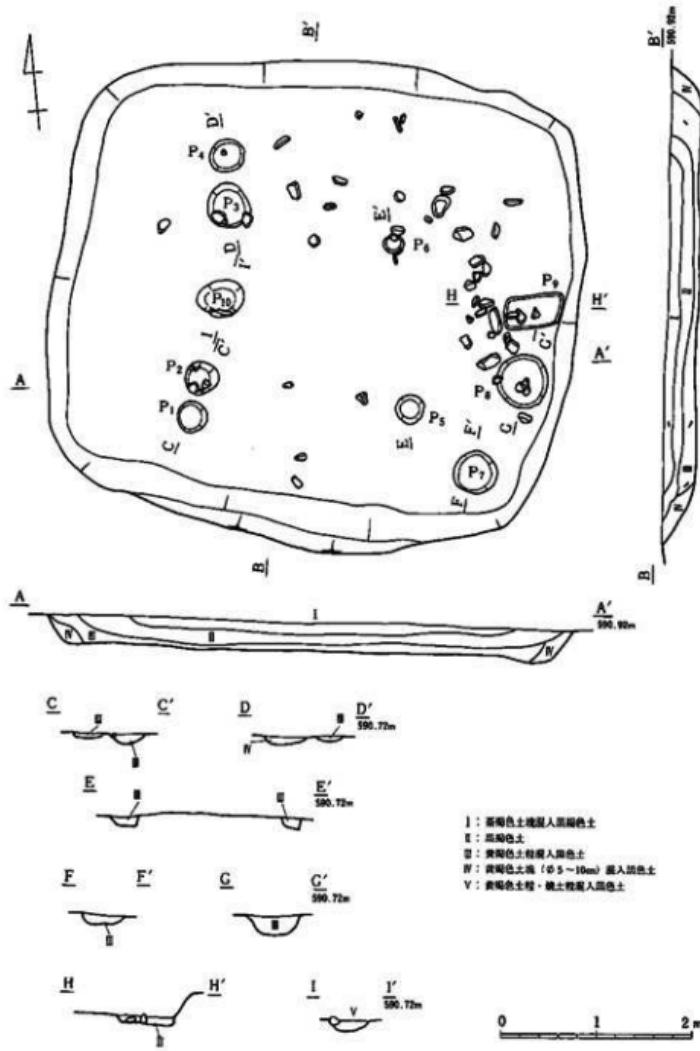


第18図 第20号住居址

#### 第20号住居址

調査地中央やや南部寄りに位置する。第2検出面では本址より南側は拳大より大きな礫が一面露出し、遺物、造構も見られなかった地区が広がる。本址の南壁もそのような状態に近く西から東は黄褐色土を検出面とする。覆土は他の住居址より明るい褐色土が入る。造構は西側に土壌239、240を切り南東隅は第1検出面で捉えた土壌130に破壊される。平面形は隅丸方形を呈すると思われるが南西隅は若干外へ膨らむ。規模は東西4.80m・南北4.60mで長軸方向はNS-76°を示す。壁、床面は南側が礫面で他は黄褐色を呈する。壁高は低い南側で7cm、高い西側で17cmを測る。床面の状況は検出の際不明瞭で、覆土に混入する礫と土器の間層を床としたものである。堅さは全くなく緩やかな起伏も生じている。遺物はごく少量であり出土の傾向もつかめない。又覆土上層から床面迄拳大～小兒頭大の礫が中央部を中心として混入する。

尚炉およびピットに関するものは全然検出することができなかった。また図示し得た遺物は壺の拓影1点のみである。



第19図 第21号住居址

## 第21号住居址

調査地中央やや北寄りに位置する。覆土は上層から中層が黒色土以下は黒褐色土となる。規模は東西5.48m・南北5.10mで主軸方向はN-76°-Wを示し、プランは胴の膨らむ隅丸方形を呈する。壁は黄褐色土で緩やかに傾斜し南側はそれが顯著である。壁高は四方共31cmを測り今回の発掘では16号住居址に次いで高いものである。床面は黄褐色土がブロック状に斑じてることで分かるが堅さは見られない。住居址中央部には拳大～小児頭大の礫が覆土上層から中層に含まれておりその東側では礫は床面に迄達している。遺物はほとんどがこれらの礫と共に出土するが出土量は多くはない。

ピットは計10基検出した。このうち中央西寄りにあるP<sub>10</sub>(49×35×11cm)はその覆土中に焼土を含んでいる。脇には細長い石が床面に埋められこれを枕石とした炉と考える。又この炉を挟むようにしてP<sub>2</sub>(35×33×10cm), P<sub>3</sub>(45×43×8cm)が位置しP<sub>5</sub>(31×30×10cm), P<sub>6</sub>(22×19×10cm)を含めて主柱穴と考える。他にP<sub>1</sub>(32×32×6cm), P<sub>4</sub>(36×33×6cm)は補助的な柱穴であろう。尚東壁際にある方形のP<sub>9</sub>(61×32×11cm)は入口施設の為のピットと推測する。

図示し得た遺物は大変少なく、甕・壺が見られた。

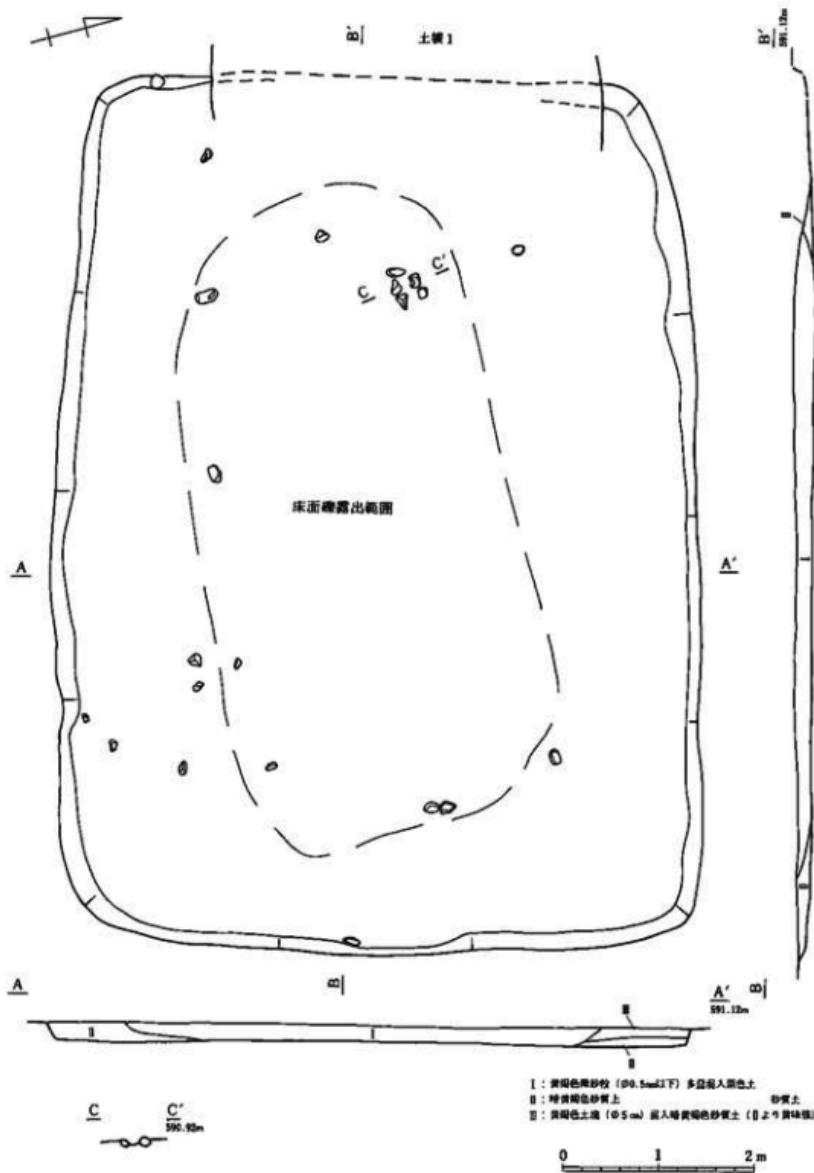
## 第22号住居址

中央北寄りに位置する。検出面は黄褐色土中で覆土は砂を含む黒色土を中心として周囲には砂質の暗褐色土がドーナツ状を呈して自然埋没の様相を表わしている。西壁上部は第1検出面上の土壤1により破壊されている。プランは隅丸方形を呈し東西9.05m・南北6.80mを測り今回で最大規模の住居址である。主軸方向はN-75°-Wを示す。壁は黄褐色土で壁高は南・北側は約18cm、東側は緩傾斜となり9cmを測る。床面は壁同様周囲が黄褐色土であるが中央部は黒色土となり堅さは全く見られない。この中央部の黒色土は礫を多量に含みその礫が密に露出した状態である。尚この中にトレンチを入れてみたがこの土中からは遺物は全く出土せず自然堆積の変相であると理解した。遺物は覆土中から床面迄得ているが総量でも非常に少ない。

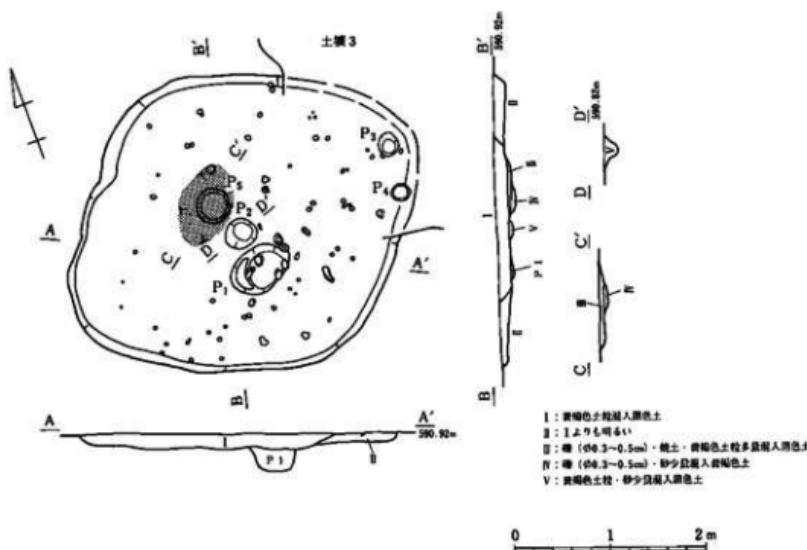
炉は石囲炉で中央西寄りに位置する。礫混入黒色土中に5個の石を配し北東部を開口する。尚この内側及び周辺にも焼土・炭化物は全く見られない。

ピットは北西隅寄りに台形のP<sub>1</sub>、中央北壁寄りに円形のP<sub>2</sub>を検出した。

遺物は図示したものは甕・壺で、他に砥石がある。これらの遺物は古墳時代後期の特徴を示しており、本址の時期もそこに求められよう。



第20図 第22号住居址



第21図 第23号住居址

### 第23号住居址

21号住居址西側に位置する最も小形の住居址である。覆土は黒色土で21号住居址同様にプランは容易に確認することができた。隅丸菱形を呈し、規模は東西3.98m・南北3.28mを測り、北東隅には後述の土壤3が位置し本址を切っている。主軸方向はN-62°-Wを示す。壁は緩やかに立ち上がり黄褐色土で北側が12cm、他は7~10cmと低い。床面も壁と同色土で起伏があり中央部分は周囲よりも若干凹む。尚堅さは見られない。遺物は覆土上層から床面まで一様に出土するが壁近くにやや多いようである。

炉は住居址中央やや北寄りに位置する。細長い石を脇に配したP<sub>5</sub>(36×34×6cm)がそれで、その上部を焼土が85×50cmの楕円状に覆っている。

この他にピットは4基検出した。P<sub>3</sub>(24×21×14cm), P<sub>4</sub>(20×17×9cm)は入口施設の為の柱穴と考える。又直径5cm前後の小ピットが床面中に59個見つかっている。配置状況は中央部と壁際に少ない。深さは2~11cmとまちまちで規則性は認められない。これらのうちには間仕切り用途のものも含まれよう。尚2段底のP<sub>1</sub>(63×45×162cm)は貼床を施していたものである。

遺物は土器があり、甕を図示し得た。

## 2. 穫穴状遺構

竪穴状遺構としたものは第1検出面上で1, 2の2基、第2検出面上で11, 12の2基であるが、当初住居址規模の土壌以上に付したつもりが土壌も無段階的にも小形から大形のものまで多類検出、その為分類区別を決め難くここでは特に大形の1, 2号について述べることとする。この2基は位置とその規模はやや異なるが、覆土、南北に長く不整な方形様を呈する点、壁高の立ち上がり方の様子等が共通しており、時期、用途は同じものと考える。尚11, 12号については上面で検出を見落としてしまったもので図、表などでは第1検出面上として土壌と共に整理した。

### (1) 穫穴状遺構1

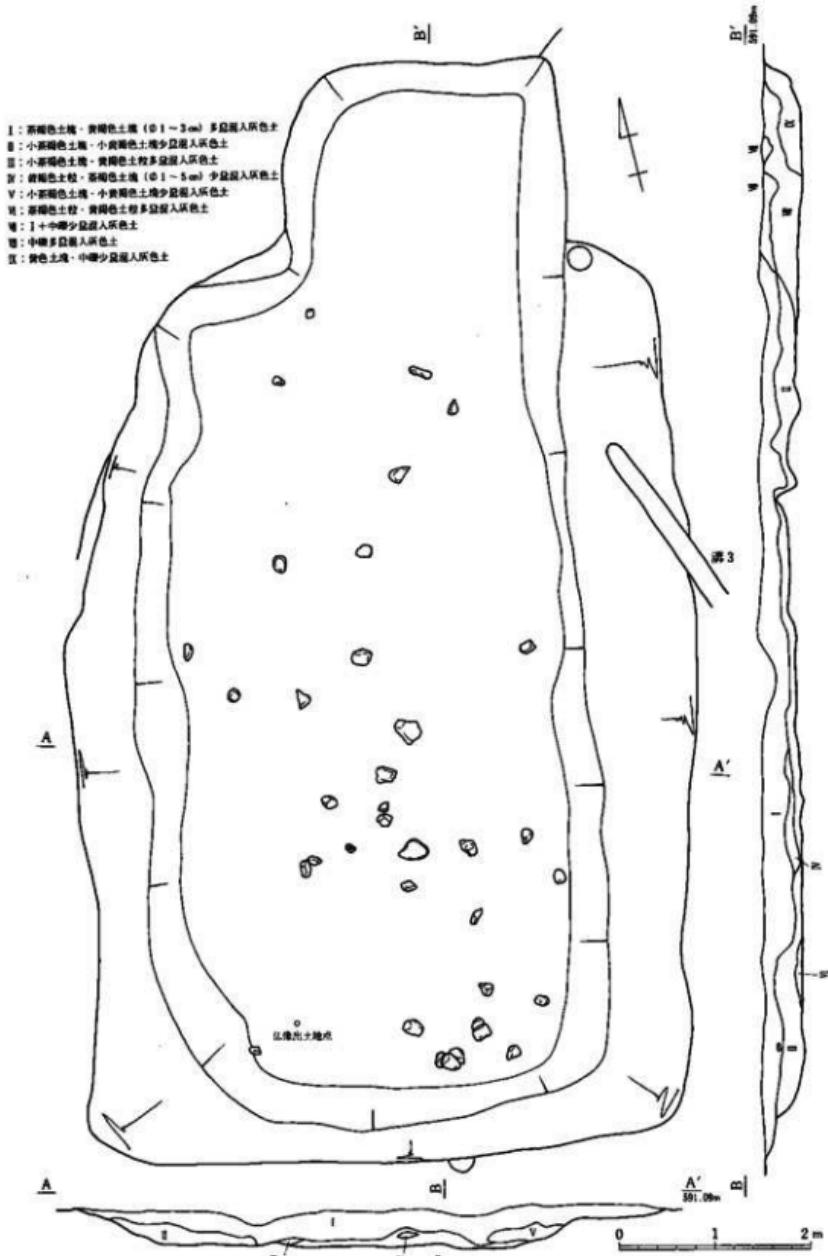
調査地北側に位置する。ここは検出面が茶褐色土塊混入褐色土であるが、北側には西から北西へ古い流路があり覆土はほとんどが灰色土系、北側では礫中への掘り込みの為埋没時に周囲の礫が多量に混入した様相であった。プランは北側に方形の張出部を持ち、規模は東西6.60m・南北11.30mと巨大な遺構である。東には狭い溝6が浅く本址を切って南東へ伸びている。床面は北側では壁同様礫面を呈するが、他は黄褐色土で小さな起伏があるが比較的明瞭に知れる。

遺物は覆土上層から床面迄出土する土師器、青磁器、鉄器、銭等であるが、総量でも特に少ない。他には特に変わるものとして覆土上層より得られた小形の銅製仏像がある。

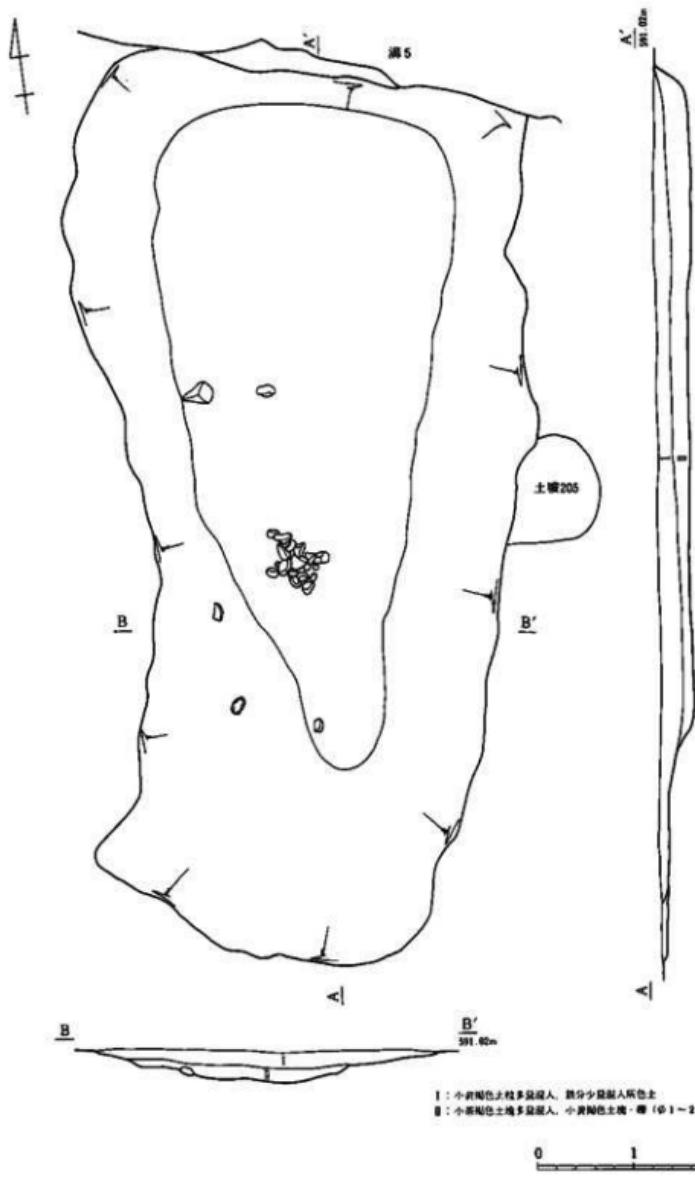
ピットは北東壁中に24×24×18cmの1基があるのみであった。

### (2) 穫穴状遺構2

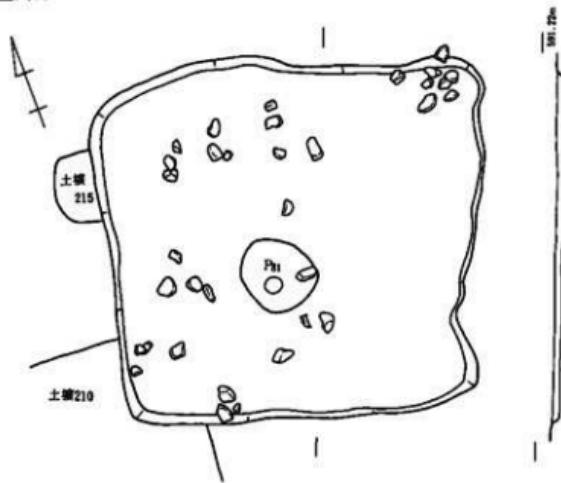
調査地東部に位置する。本址は北側を溝5に切られ、東には土壌205を切って存在する。検出面覆土などは前述の1号と良く似る。規模は東西4.70m・南北9.10mで南北に長く又不整な方形を呈する。壁は北半部を除きテラス状のものを周囲に廻らせてあり、ダラダラと外に向って長く続いている特に南部ではその幅2m以上にもなる。床面は拳大の自然礫が露出し堅さは全く見られない。又北側は中央以南より約5cm程低くなっている。南側には床面上に約20個の礫が存在する。遺物は少なく壁際より須恵器、土師器片を若干得たのみである。尚本址西側には連物址21がありそのうちの4基のピットが壁中に検出できた。本址との切合は分らずその位置から本址の付属施設と考えた方がよかろうか。



第22圖 穹穴状造構 1

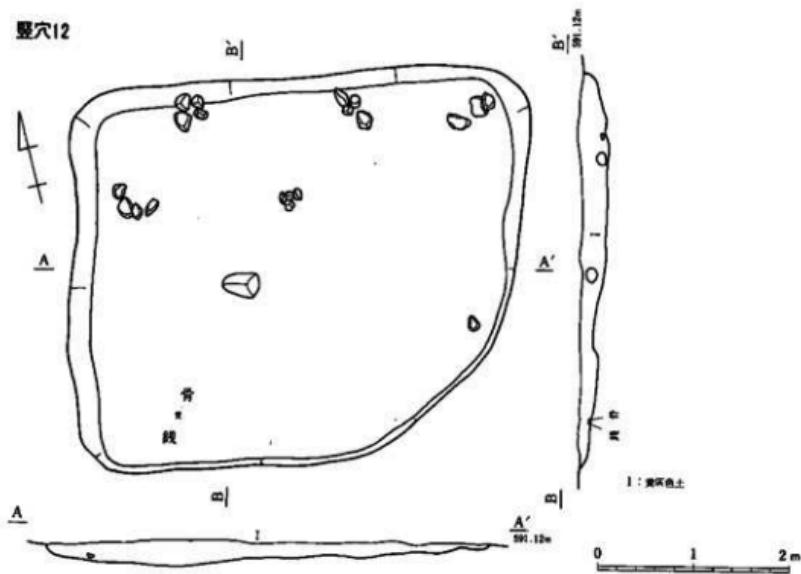


豎穴11



Ⅰ：黃褐色土粒多且，高褐色土粒少並混入物質灰褐色

豎穴12



第24図 豊穴状遺構 11・12

### 3. 建物址

今回の調査で検出された掘立柱建物址は、第1検出面35棟（中世と考えられる）、第2検出面3棟（古墳時代後期）の計35棟である。以下、時代（検出面）毎に述べるが、個々の建物址の所見・数値については一覧表に譲り、ここでは概略とまとめをしておきたい。

#### (1) 古墳時代後期の建物址

第2検出面北東部、弥生後期末の住居址が集中する地域に3棟が存在している。当初これらの住居址に伴うものと理解していたが、建物址41（以後建○○と略す）の柱穴内より古墳時代後期の遺物が出土していること、建物址に切られる弥生時代住居址がないこと、3棟は規模が違うものの構造が似ていることから22号住居址等古墳時代のものと判断した。

建物の平面形は方形ないしやや平行の長い長方形で、柱の配置は桁・梁同数で3間～1間の側柱式である。規模は建41・42が一辺3mを越えるが、建43（1間×1間）は1.7mで小さい。柱間寸法は建42・43が1.6～1.8mであるのに対し、建41は建42とさほど規模が変わらないが間数をふやして1～1.4mと短い。また建41には主軸線上に補助柱穴と考えられる小さいピットが2基、平行の柱に対応して存在する。更に同線上の建物外東側にも円形ピットがあり、これを梯子穴と考え高床式の倉庫と捉えることが妥当といえる。同規模の建42との柱数との比較からもうなづけよう。

#### (2) 中世の建物址

建物址の構造は側柱式が多く、総柱式は5・6・9・18のみ数える。平面形は長方形がほとんどで、規模は1×1間～4×2間まで見られ、ばらつきがあるもののおおむね柱数に比例して面積も大きくなる。量的には1×1間、2×2間が圧倒的に多く、全体の8割以上を占める。

柱間は等間のものではなく、2間×1間以上の建物の場合は梁方向の柱間寸法が大きい。また同じ建物内でもばらつきが見られ、平面形も歪むものがむしろ普通である。また同一建物内で意図的に柱間寸法をかえるものが建5・6に見られ、後述する建物内の土壙と関わるようである。柱穴は直径20～30cmで規模の大小にはあまり相関しない。

今回検出した建物址の中には、方形の土壙と接していたり、また土壙を覆っているものが総数の3分の1（12棟）に認められた。これらの土壙の建物に占める位置にはいくつかの類型があり、以下のように分類することができる。なお土壙の詳細は次項で述べるが方形で浅いものが多い。

A類 建物址の一辺に接して大形の竪穴状遺構が存在するもの。

B類 建物址の一角を方形ないし長方形の土壙が占めるもの。土壙は建物内に完全に収まるか、またはその半分以上が建物内に存在している。

C類 方形か長方形の建物址のほとんどの空間を占めているもの。

D類 建物址内に小規模な円形土壙を有しているもの。

E類 土壙を伴わないもの。

表1 建物址分類表

規模(間)	A類	B類	C類	D類	E類	計				
1×1	0	2	14, 30	2	15, 19	2	20, 31	12	1, 4, 10, 11, 17, 22 ~24, 26, 32, 34, 35	18
2×1	0	2	13, 16	0	0	10	3, 7, 8, 12, 18, 25, 27~29, 33	12		
2×2	1	21	0	0	0	0			1	
3×2	0	2	2, 5	0	0	1	9		3	
4×2	0	1	6	0	0	0			1	
計		1	7	2	2	23		35		

各類のうちD類は建物と無関係の可能性もあるが、ここでは積極的に取り上げてみた。建物址の分布は上表によれば、2×2間以上の大形の建物は建9を除き土壙を有している。その有り方はB類に属し、大形の土壙が建物の北半を占めている。B類は2間以下の建物にも認められ、各大きさのものが存在する。しかしC・D類は1×1間の建物にのみ見られ、大形の建物には見られない。

次に調査区内での分布を見ると、建物址は以下の3群に分けられそうである。

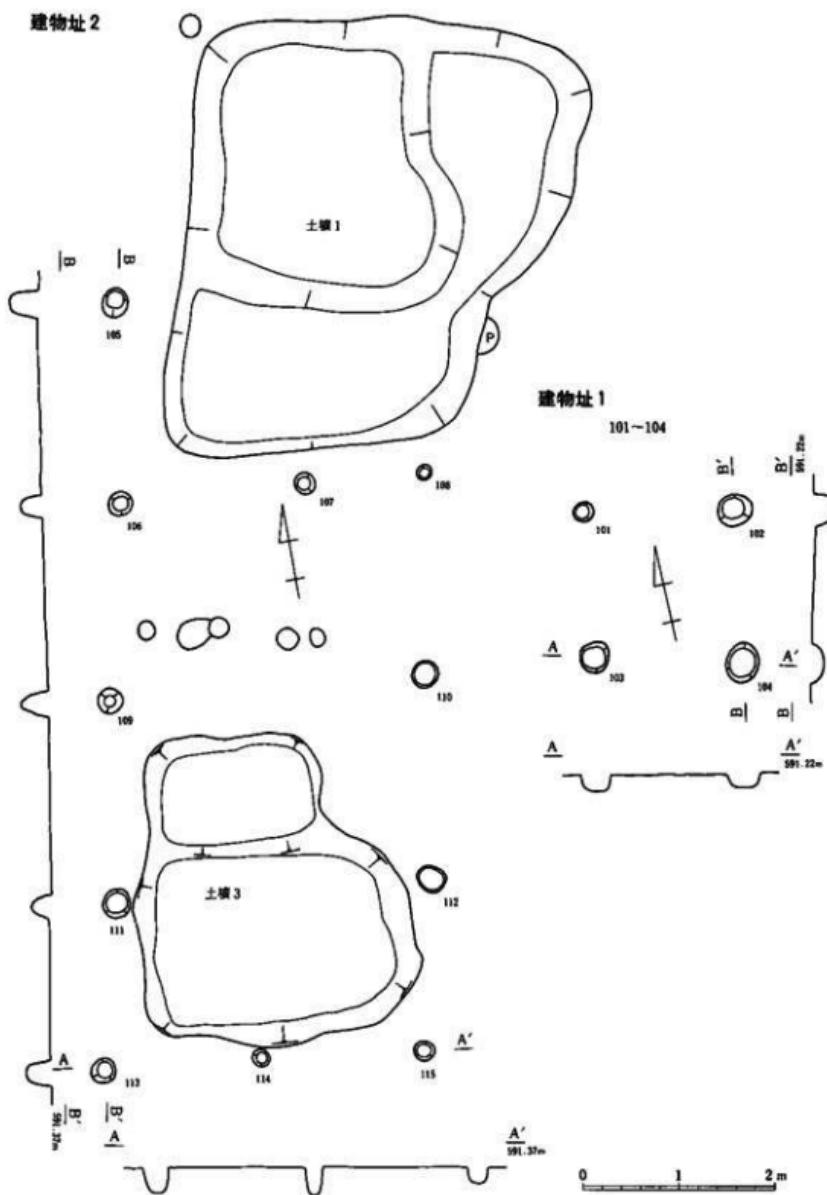
1群 溝1と溝4に区切られた北部の地域

2群 溝4の西側、1群の南隣の地域

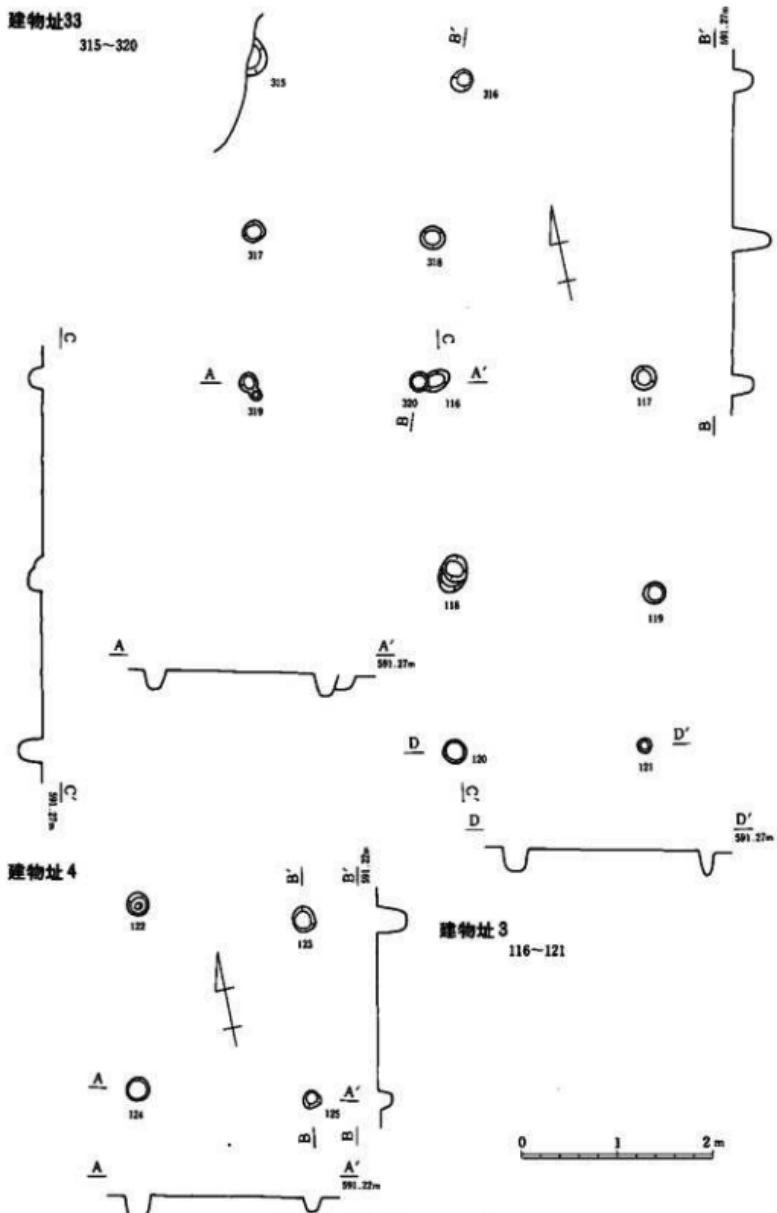
3群 溝4に囲まれた地域

1群はほとんど建物址のみで構成される地域で、各建物は主軸を南北に描えている。さらに建2・10・34・12・13、建5・6・29・35は南北または東西に直線的に連なっており、多分に計画性を窺わせる。建物のみでなく、豎1・土壙1、さらに溝1・4の方向も建物址と軸を描えていることも観察され、より広い範囲で造構の計画性を感じさせる。建物の構成は、3×2間以上の大形建物は全て本群に存在し、これらと建13を除き土壙を有するものは見られない。土壙の有り方は全てB類である。次に2群の存在する溝4西側の地域は、墓址およびその可能性の高い土壙が集中している。それら墓址群の北端、1群に近いがやや間隔をおいて2群が位置している。建物址は9棟あり、内6棟は1×1間の建物である。5棟が土壙を伴い、小形のB～D類が主体となっている。ここでもやはり計画的な配置状況が認められ、主軸は南北である。3群は溝4に囲まれた区域のうち北半に建物址が存在する。建物は北端にやや大きい長方形の建8・21が軸、列を揃えて並び、南に1×1間の建物群が東西に軸を振って位置している。

以上、中世の建物址の構造、分布を概観してきたが、これらの建物ないし建物群の性格・機能は直接それを決定付ける資料がなく、また現在調査例が蓄積されつつある段階にあり、今後寄古学及び文献史学双方から解明されていかなくてはならない問題と考えられる。1点のみ土壙を伴う建物址について触れると、これを廐舎と考える説が見られるが、本遺跡では前述の如く4種の有り方を示し、遺跡内の分布も微妙に異なる様である。従って一律的な解釈は不可能で、廐舎も含め中世集落全体のなかでその性格を明らかにしていく必要があろう。

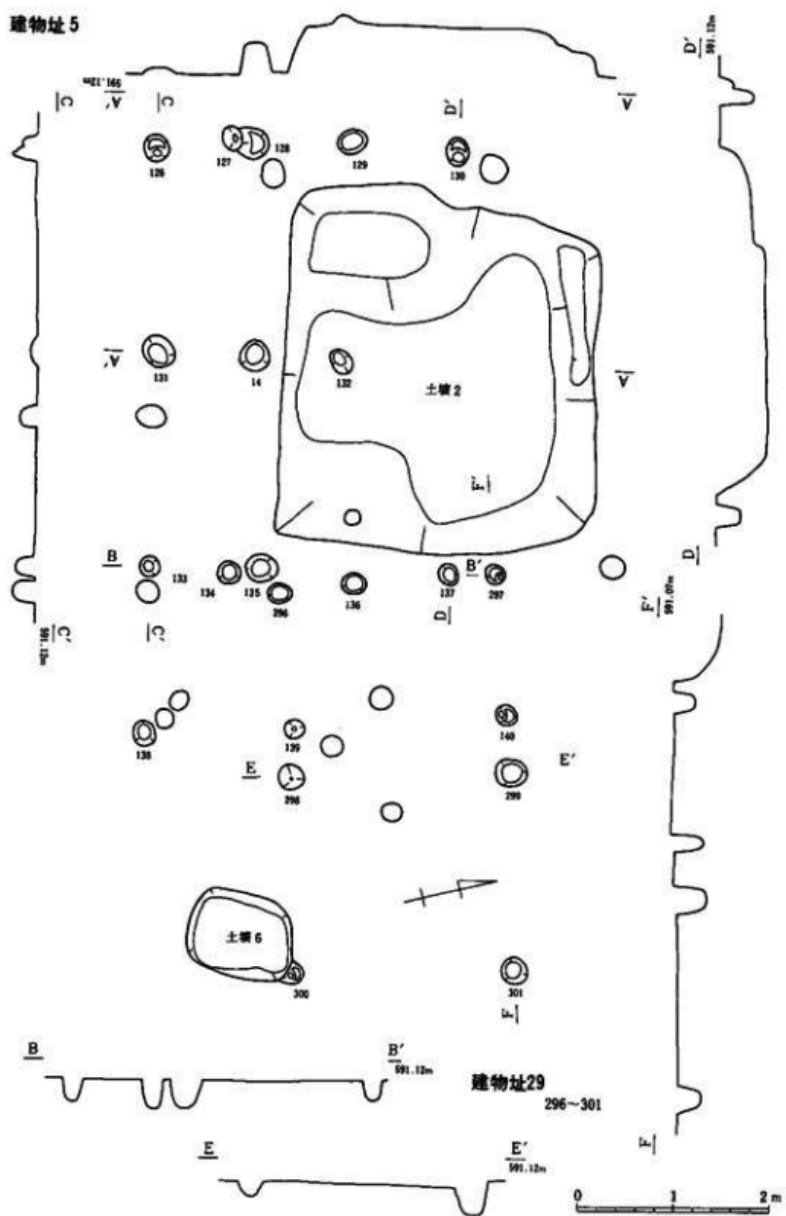


第25図 建物址 1, 2

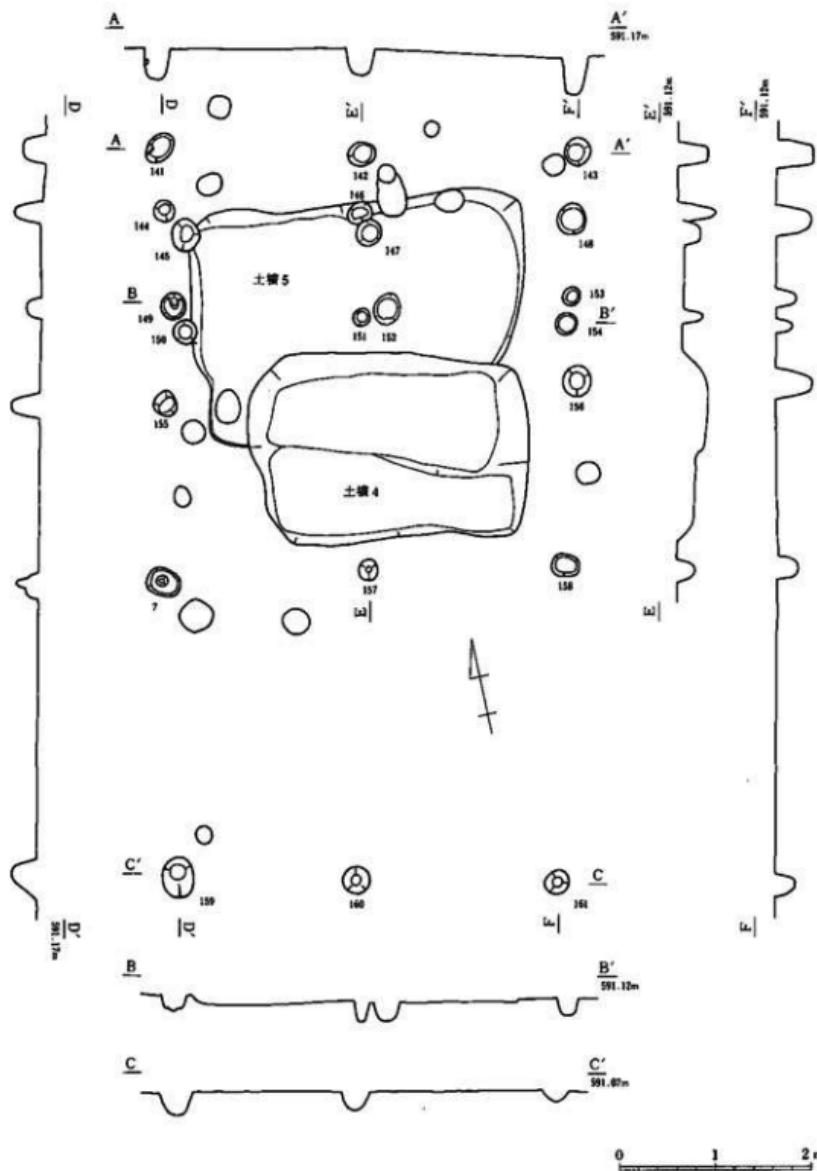


第26図 建物址3, 4, 33

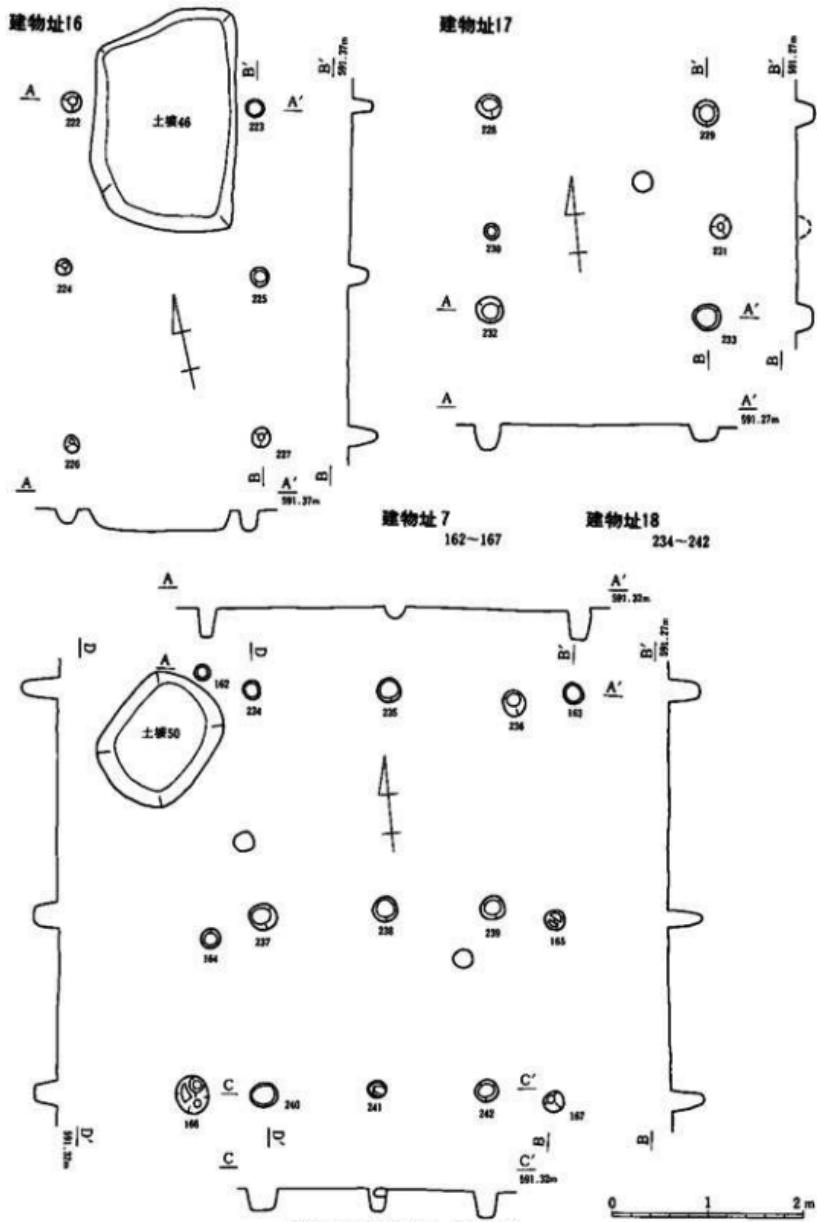
建物址 5



第27図 建物址 5, 29

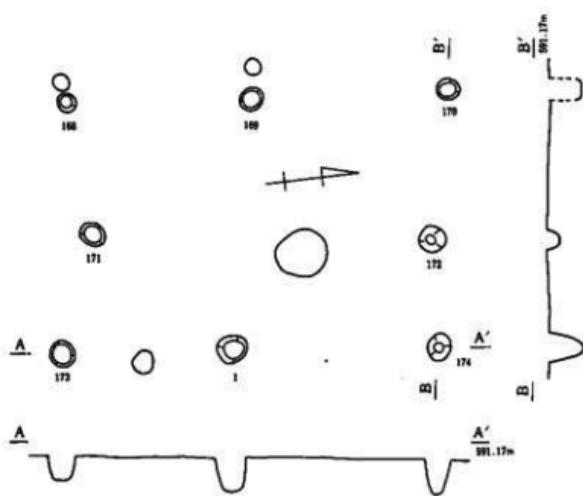


第28図 建物址 6

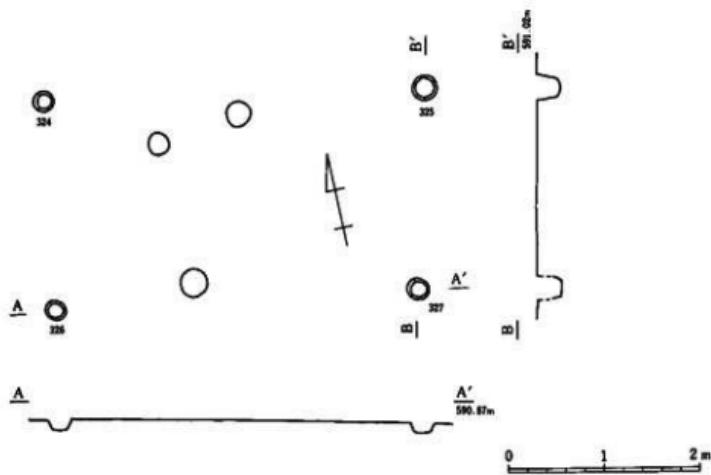


第29図 建物址7, 16~18

建物址 8

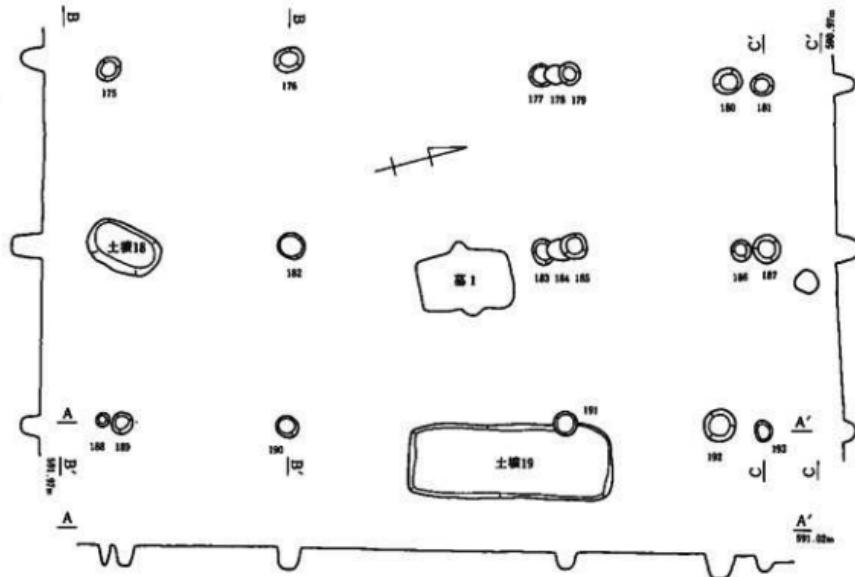


建物址 35

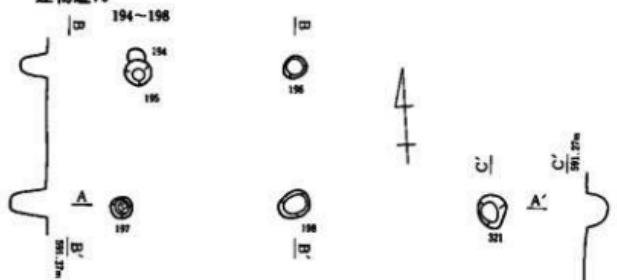


第30図 建物址 8, 35

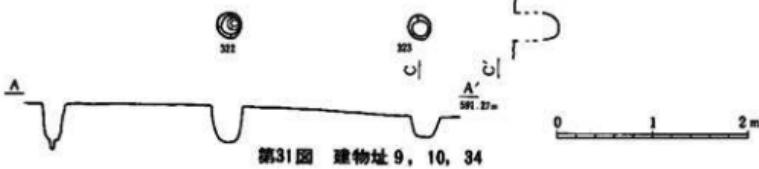
建物址 9



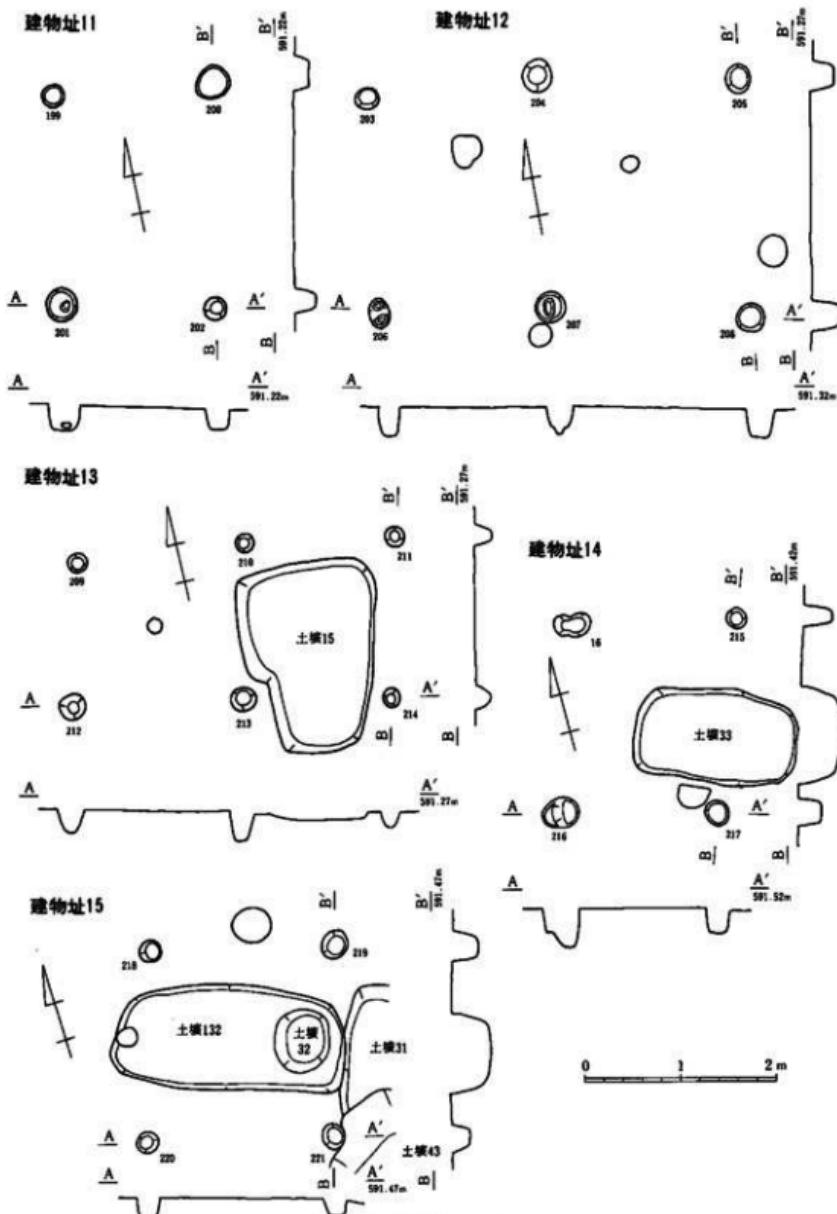
建物址 10



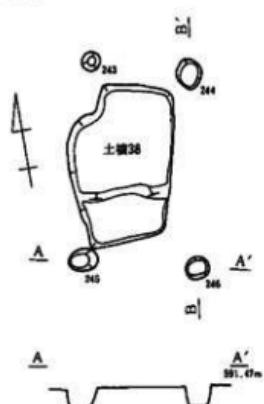
建物址 34  
198, 321-323



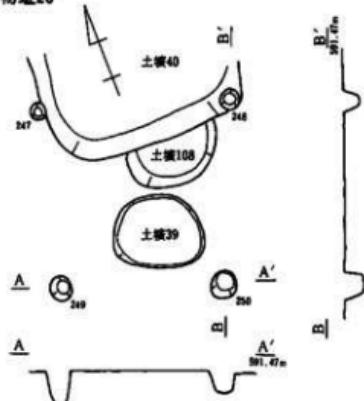
第31図 建物址 9, 10, 34



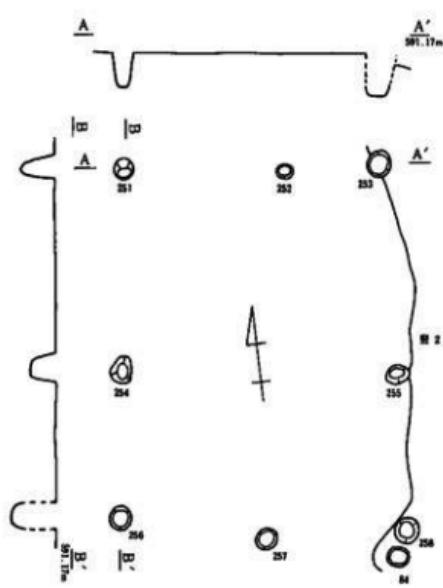
建物址19



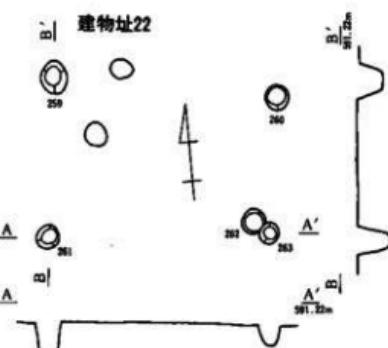
建物址20



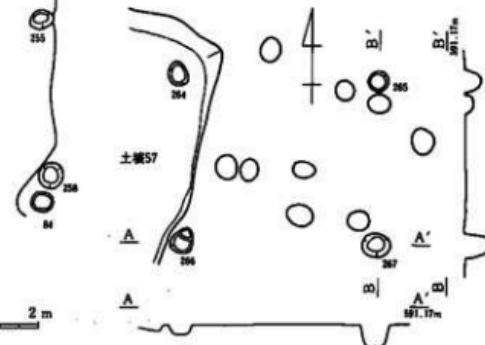
建物址21



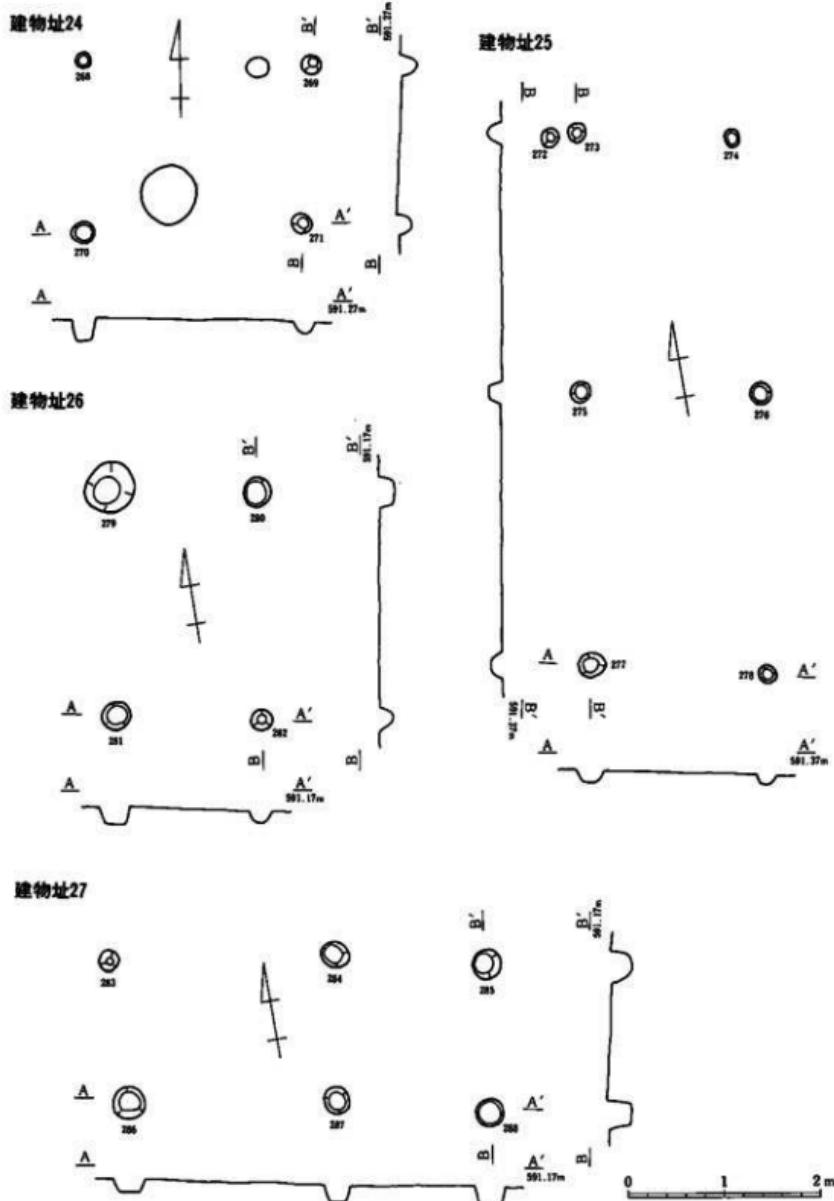
建物址22



建物址23

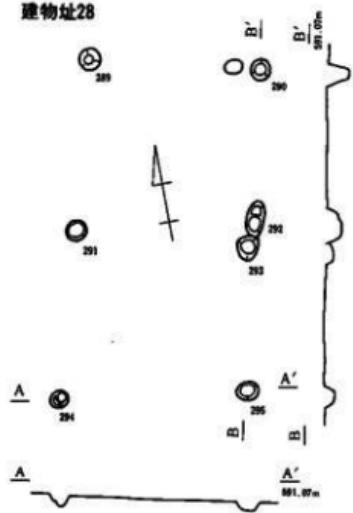


第33図 建物址19~23

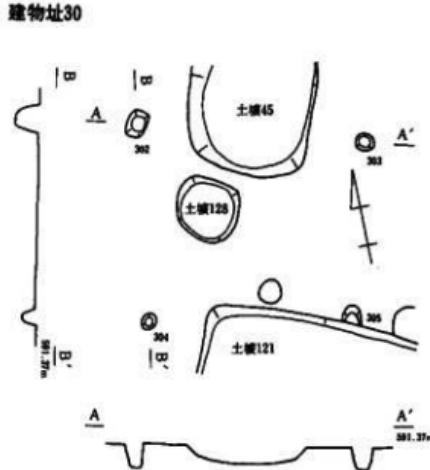


第34図 建物址24~27

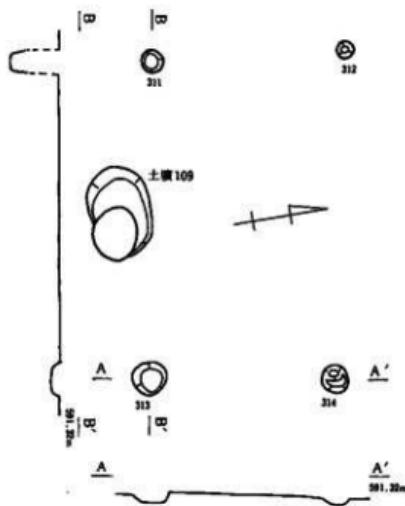
建物址28



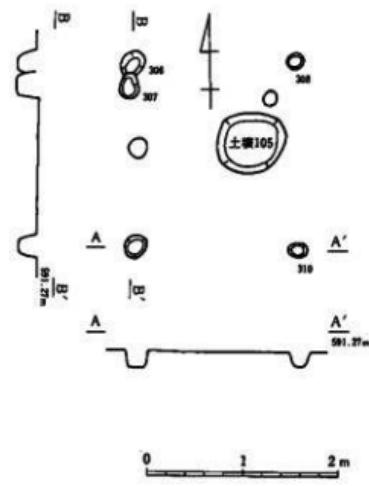
建物址30



建物址32

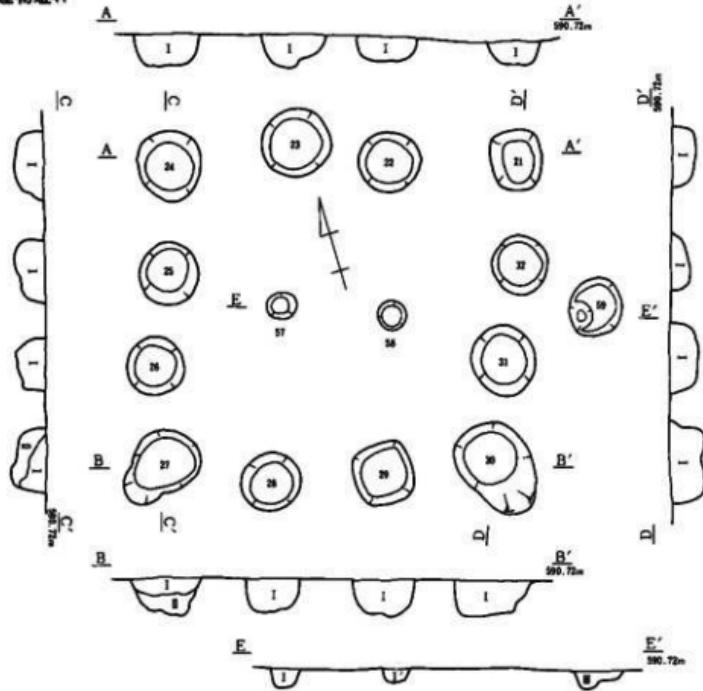


建物址31



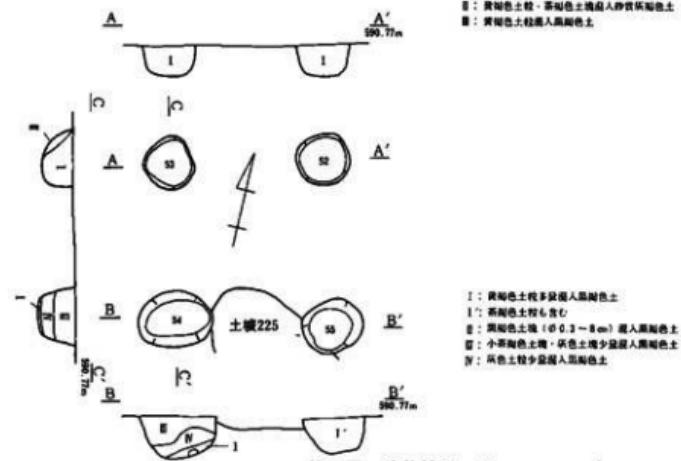
第35図 建物址28, 30~32

建物址41



■：青褐色土塊（0.2～5cm）混入黒褐色土  
■：緑（0.0.5～1cm）混入1号  
■：黄褐色土粒・茶褐色土塊混入青褐色土  
■：黄褐色土粒混入黒褐色土

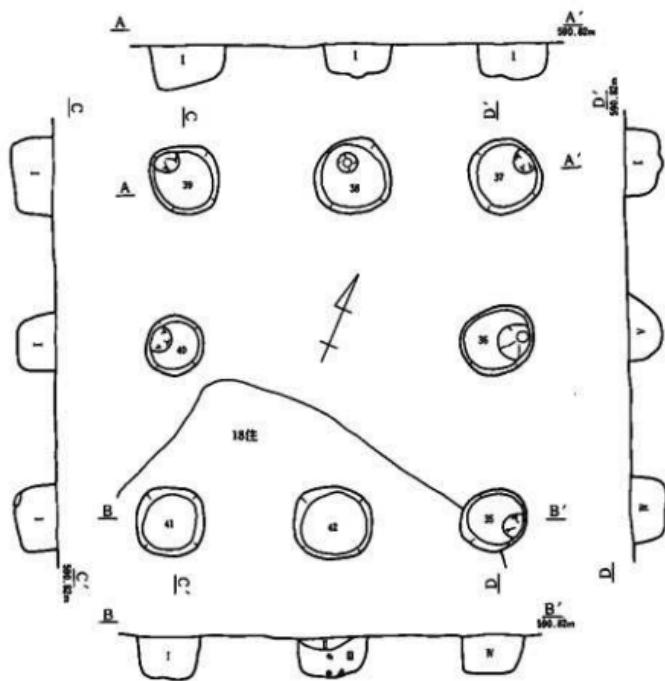
建物址43



■：黄褐色土塊多量混入黒褐色土  
■：茶褐色土粒も見む  
■：黒褐色土塊（0.2～5cm）混入黒褐色土  
■：小茶褐色土塊・茶褐色土塊少量混入黒褐色土  
■：所生土粒少量混入黒褐色土

第36図 建物址41, 43





I : 小黄褐色土塊人頭面色土  
 II : 小黃褐色土塊多量混入。小黃褐色土塊少量混入。  
 III : (d 0.5 ~ 1 cm) 混入紅色土  
 IV : 黑褐色土塊 (d 2 ~ 3 m) 混入黑褐色土  
 V : 黑褐色土塊 (d 3 ~ 10 m) 混入黑褐色土  
 VI : 黑褐色土塊 (d 3 ~ 4 cm) 混入黑褐色土

0 1 2 m

第37図 建物址42

表2 建物址一覧表

No.	平面形 柱配り	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	柱 六 规 横 (cm)				柱 六 平 面 形	柱穴謹考	建 物 址 所 見
					No.	長径	短径	深さ			
1	方形 側柱式	N-8-E	1間×1間 1.6×1.6	桁 1.6 梁 1.6	101	20	20	15	円 形	柱底については、ピット底面よりの深さを表わす。	南半部で土壇 3 を囲む
					102	36	32	12	円 形		
					103	30	30	14	不整円形		
					104	40	36	14	梢 円 形		
2	長方形 側柱式	N-11-E	3(4)間×2間 6(8)×3.4(3.2)	桁 1.7~2.1 梁 1.2~1.6	105	30	26	31	梢 円 形	南半部で土壇 3 を囲む	建33に切られる。ピット 118は二度使用。
					106	26	20	23	円 形		
					107	22	22	35	円 形		
					108	16	16	28	円 形		
					109	28	26	31	円 形		
					110	28	26	31	円 形		
					111	32	30	20	円 形		
					112	32	26	39	円 形		
					113	26	24	28	円 形		
					114	18	18	31	円 形		
					115	22	20	16	円 形		
3	長方形 側柱式	N-9-E	2間×1間 3.8×2.1	桁 1.6~2.2 梁 2.1	116	30	20	15	梢 円 形	建33に切られる。ピット 118は二度使用。	北側に土壇 2 を半分囲む。周辺に組合せ可能なピットが多く土地のみでは組合せがつかない。2段底の3基のピットは3階である。
					117	24	24	13	円 形		
					118	28	26	9	不整円形		
					119	26	24	29	円 形		
					120	26	24	25	円 形		
					121	16	14	18	円 形		
4	長方形 側柱式	N-10-E	1間×1間 1.9×1.8	桁 1.9 梁 1.8	122	24	22	13	円 形		
					123	25	24	13	不整円形		
					124	24	24	23	円 形		
					125	20	16	16	不整円形		
5	長方形 総柱式	N-78-W	3(2)間×2(3)間 6.0×3.8(3.1)	桁 1.4~4.5 梁 0.8~2.2	14	32	32	32	不整円形		北側に土壇 2 を半分囲む。周辺に組合せ可能なピットが多く土地のみでは組合せがつかない。2段底の3基のピットは3階である。
					126	28	26	26	円 形		
					127	26	20	35	梢 円 形		
					128	38	34	19	梢 円 形		
					129	34	26	17	梢 円 形		
					130	30	26	22	梢 円 形		
					131	36	30	8	梢 円 形		
					132	28	18	10	梢 円 形		
					133	22	22	20	円 形		
					134	26	24	28	円 形		
					135	36	30	29	梢 円 形		
					136	28	22	7	梢 円 形		
					137	24	20	24	不整円形		
					138	30	22	19	不整円形		

No	平面形 柱配り	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規格(cm)			柱穴 平面形	柱穴備考	造物址所見
					No	長径	短径	深さ		
6	長方形 側柱式	N-13-E	5間×2間 7.6×4.3 梁 1.8~2.2	桁 0.6~3.3	139	20	20	21	円 形	塗面狭広あり且及出来ない。北側に土被りあるいは5を付隨させたか。
					140	24	22	31	円 形	
					7	36	28	26	不整方形	
					141	36	24	33	椭 圆 形	
					142	30	26	34	不整圓形	
					143	28	28	38	圓 形	
					144	22	22	30	圓 形	
					145	34	30	17	不整圓形	
					146	28	22	35	不整圓形	
					147	28	24	27	圓 形	
					148	30	22	36	不整圓形	
					149	28	26	15	圓 形	
					150	30	24	25	圓 形	
					151	28	18	25	圓 形	
					152	26	28	21	不整圓形	
					153	18	20	21	圓 形	
					154	32	22	17	圓 形	
					155	18	24	31	不整圓形	
					156	24	28	38	圓 形	
					157	26	20	21	椭 圆 形	
					158	32	24	20	不整方形	
					159	22	32	25	椭 圆 形	
					160	30	28	21	圓 形	
					161	42	24	22	不整圓形	
7	長方形 側柱式	N-7-E	2間×1間 4.3×3.9 梁 3.9	桁 1.9~2.4	162	28	18	30	圓 形	塗18を済むようにしてある。土色により塗18とは前後関係あり。
					163	28	22	32	圓 形	
					164	18	20	30	圓 形	
					165	22	22	37	圓 形	
					166	22	36	33	椭 圆 形	
					167	22	20	36	不整圓形	
8	長方形 側柱式	N-7-E	2間×2間 4.0×2.7 梁 1.1~1.6	桁 1.8~2.2	1	32	26	34	不整圓形	塗側の中央ピットは南北共内に寄り残い。塗21が北にあり併存したか?
					168	20	20	13	圓 形	
					169	24	22	(9)	圓 形	
					170	24	22	(8)	圓 形	
					171	28	22	13	不整圓形	
					172	28	28	17	不整圓形	
					173	28	26	26	圓 形	
					174	28	24	36	不整圓形	
9	長方形	N-14-E	3間×2間 6.9(6.7)×3.6 梁 1.5~1.9	桁 1.6~2.9	175	28	22	20	椭 圆 形	塗18は本塗より新。塗19を切る。北列と南東隅はピットの
					176	32	24	25	不整圓形	

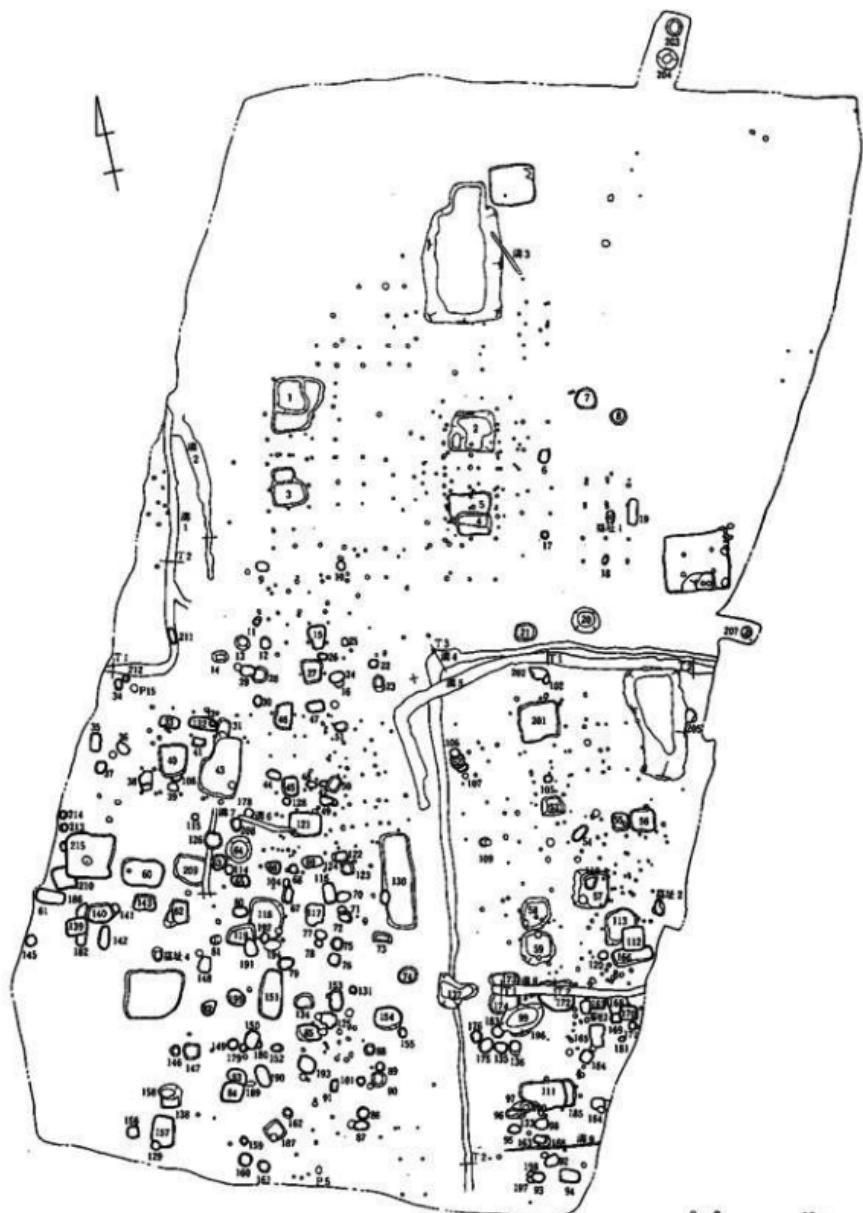
No	平面形 柱配り	主軸方向	規 築 (m)	柱間寸法 (m)	柱 六 规 構 (m)				柱 六 平 面 形	柱穴鑿考	建 物 坂 所 見
					No	長径	短径	深さ			
9	範柱式				177	24	24	13	円 形		使用に前後関係があろう。
					178	20					
					179	22	22	23	円 形		
					180	30	28	41	円 形		
					181	24	22	23	円 形		
					182	28	26	34	円 形		
					183	28		20	円 形		
					184		24				
					185	28	28	23	円 形		
					186	22	20	18	円 形		
					187	30	30	24	円 形		
					188	16	14	22	円 形		
					189	24	22	21	円 形		
					190	24	22	21	円 形		
					191	24	24	18	円 形		
					192	34	34	25	円 形		
					193	22	18	11	不整円形		
10	長方形 側柱式	N-6°-E	1間×1間 1.6(1.6)×1.4 梁 1.4	桁 1.6~1.8	194	28	28	30	円 形		建34とビット198を共用するが、 前後関係は不明。
					195	24	24	32	不整円形	194より新	
					196	24	22	49	円 形		
					197	24	22	39	円 形	2段底	
					198	34	30	39	楕 圓 形		
11	長方形 側柱式	N-10°-E	1間×1間 2.3×1.7	桁 2.3 梁 1.7	199	24	24	24	円 形		
					200	38	36	16	不整円形		
					201	34	32	26	円 形		
					202	26	24	23	円 形		
12	長方形 側柱式	N-80°-W	2間×1間 3.8×2.5(2.3)	桁 1.7~2.1 梁 2.3~2.5	203	24	24	20	楕 圓 形		建34が北に接続する。建13が南に並ぶ。
					204	34	30	36	円 形		
					205	28	26	27	楕 圓 形		
					206	32	22	31	楕 圓 形	下場 2コ	
					207	34	32	30	円 形	2段底	
					208	32	30	27	円 形		
13	長方形 側柱式	N-79°-W	2間×1間 3.3×1.7(1.5)	桁 1.6~1.8 梁 1.5~1.7	209	20	20	9	円 形		東半部に土被15を覆う。
					210	20	18	16	円 形		
					211	20	20	19	円 形		
					212	28	26	24	不整円形		
					213	28	24	31	楕 圓 形		
					214	22	18	17	楕 圓 形		
14	長方形	N-20°-E	1間×1間 2.0×1.7	桁 2.0 梁 1.7	16	38	18	20	不整円形	ビット 2コ	東半部に土被33を覆う。
					215	22	20	29	円 形		

No	平面形 柱配り	主軸方向	規 模 (m)	柱 間寸法 (m)	柱 穴 規 模 (cm)			柱 穴 平 面 形	柱穴偏寄	建 物 基 所 見
					No	長径	短径	深き		
14	側柱式				216	40	32	42	楕 円 形	2段底
					217	26	24	25	円 形	
15	方 形 側柱式	N-19°-E	1間×1間 2.0×1.9 梁 1.9	桁 2.0 梁 1.9	218	22	22	26	円 形	土壤132をすっぽりと覆う。 建14とは隣接する。
					219	30	28	28	楕 円 形	
					220	24	24	23	楕 円 形	
					221	26	22	18	円 形	
16	長方形 側柱式	N-13°-E	2間×1間 3.5×2.0 梁 2.0	桁 1.7 梁 2.0	222	20	20	17	円 形	北側に土壤45と一部重な 6.6 基のビットは小形。
					223	20	18	23	円 形	
					224	16	16	18	不整円形	
					225	20	18	22	円 形	
					226	18	14	23	楕 円 形	
					227	20	20	31	楕 円 形	
					228	26	24	28	不整円形	
17	長方形 側柱式	N-83°-W	1間×2間 2.3×2.1 梁 0.6~1.2	桁 2.3 梁 2.1	229	28	24	20	円 形	建7、あるいは18と併存したか。
					230	18	16	22	円 形	
					231	26	20	18	楕 円 形	
					232	30	28	29	円 形	
					233	30	28	16	不整円形	
					234	20	18	40	円 形	
18	長方形 楕柱式	N-7°-E	2間×2間 4.2×2.7(2.3) 梁 1.1~1.4	桁 1.8~2.3 梁 1.1~1.4	235	26	24	35	円 形	建7との切り合いあり。 図示してないがすべてのビット に最大以上の値が入る。
					236	26	24	34	楕 円 形	
					237	30	28	31	円 形	
					238	28	26	37	円 形	
					239	26	26	36	円 形	
					240	30	26	24	楕 円 形	
					241	20	20	8	円 形	
					242	24	24	28	円 形	
					243	20	20	16	円 形	土壤38をすっぽり覆う。
					244	32	26	21	不整円形	
19	長方形 側柱式	N-10°-E	1間×1間 2.0(1.7)×1.9 梁 1.9	桁 1.7~2.0 梁 1.9	245	30	22	24	楕 円 形	
					246	24	22	22	円 形	
20	方 形 (ゆがむ) 側柱式	N-24°-W	1間×1間 2.0(1.7)×1.9 梁 1.9	桁 1.7~2.0 梁 1.9	247	18	16	11	円 形	土壤40を切る。
					248	22	20	18	円 形	
					249	26	24	36	楕 円 形	
					250	28	28	20	不整円形	
					251	22	22	37	楕 円 形	
21	長方形 側柱式	N-5°-E	2間×2間 4.1(3.8)×3.9(3.7) 梁 1.0~1.7	桁 1.5~2.2 梁 1.0~1.7	252	18	14	14	不整円形	建2と切り合う。位置的に建2 の付属施設か。西に施設あり。
					253	28	26	(9)	円 形	
					254	28	22	29	不整円形	
					84	24	22	(11)	不整円形 ビット深く 良好	
					255	22	22	37	楕 円 形	

No	平面形 柱配り	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	柱 六 规 模 (cm)			柱 六 平 面 形	柱六面考	建 物 址 所 見
					No	長径	短径	深さ		
21					255	26	22	32	不整円形	
					256	24	22	(15)	円 形	
					257	24	22	22	円 形	
					258	28	22	(12)	不整円形	
22	長方形 側柱式	N-83°-W	1間×1間 2.3×1.6(1.4)	桁 2.3 梁 1.4~1.6	259	36	26	27	不整円形	
					260	26	24	14	円 形	
					261	24	24	38	不整円形	
					262	26	26	9	円 形	
					263	24	22	14	円 形	
23	長方形 側柱式	N-88°-W	1間×1間 2.1×1.8	桁 2.1 梁 1.8	264	26	20	20	不整円形	土壤57を切る。
					265	26	22	18	円 形	
					266	28	22	17	不整円形	
					267	30	26	25	梢 円 形	
24	長方形 側柱式	N-90°-W	1間×1間 2.4×1.9	桁 2.4 梁 1.9	268	16	16	23	円 形	
					269	20	18	17	円 形	
					270	26	24	23	不整円形	
					271	22	20	13	不整円形	
25	長方形 側柱式	N-71°-E	2間×1間 5.5×1.9(1.6)	桁 2.6~2.9 梁 1.6~1.9	272	22	20	17	円 形	壤土砂質土(明瞭)。
					273	20	20	14	円 形	
					274	18	16	14	梢 円 形	
					275	22	20	15	円 形	
					276	24	22	15	円 形	
					277	30	24	13	不整円形	
					278	20	18	9	円 形	
26	長方形 側柱式	N-91°-E	1間×1間 2.3×1.6	桁 2.3 梁 1.6	279	52	50	10	不整円形	
					280	32	28	19	円 形	
					281	30	28	14	円 形	
					282	24	22	17	円 形	
27	長方形 側柱式	N-78°-W	2間×1間 3.8×1.5	桁 1.6 ~ 2.3 梁 1.5	283	22	20	20	不整円形	
					284	30	26	16	不整円形	
					285	30	30	22	円 形	
					286	34	34	13	円 形	
					287	30	24	18	梢 円 形	
					288	30	28	24	円 形	
28	長方形 側柱式	N-15°-E	2間×1間 3.5(3.9)×2.0(1.8)	桁 1.5~1.8 梁 1.8~2.0	289	22	22	13	円 形	
					290	22	22	21	円 形	
					291	22	20	17	円 形	
					292	36	18	13	梢 円 形	
					293	26	24	8	不整円形	
					294	20	18	13	梢 円 形	

No.	平面形 柱配置	主軸方向	規 模 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規格(cm)			柱穴 平面形	柱穴参考	建物址所見
					No.	直径	喧長	深さ		
28					295	22	20	10	楕円形	
29	長方形 側柱式	N-78°-W	2間×1間 4.1×2.3	桁 2.0 梁 2.3	296	24	20	32	楕円形	迹5とは、おそらく時間差別にするであろう。土橋6に切られる。 2段底の2基のピットは2箇である。
					297	22	18	30	不整円形	2段底
					298	26	26	19	円形	
					299	34	28	34	楕円形	
					300		24	28		2段底
					301	28	24	26	円形	
30	方形 (角柱) 側柱式	N-76°-W	1間×1間 2.3×1.9	桁 2.3 梁 1.9	302	28	20	27	長方形	土橋121に切られる。北に土壁45の一部を残す。
					303	20	18	26	椭円形	
					304	18	14	15	椭円形	
					305		20	16		
31	長方形 側柱式	N-2°-E	1間×1間 2.0×1.7	桁 2.0 梁 1.7	306	30	24	20	不整円形	
					307	26	20	24	不整円形	
					308	18	18	15	円形	
					309	24	22	18	不整円形	
					310	20	14	16	椭円形	
32	長方形 側柱式	N-81°-W	1間×1間 3.5(3.3)×2.0	桁 3.3~3.5 梁 2.0	311	24	24	(17)	円形	ピット横深 最大
					312	20	18	(7)	円形	
					313	38	36	10	不整円形	
					314	32	28	10	不整円形	
33	長方形 側柱式	N-17°-E	2間×1間 3.4(3.2)×2.2(1.8)	桁 1.5~1.8 梁 1.8~2.2	315	40		10		迹3を切る。土橋1に切られる
					316	24	22	19	椭円形	
					317	24	22	30	不整円形	
					318	26	24	40	円形	
					319	30	20	21	不整円形	
					320	21	20	23	円形	
34	長方形 側柱式	N-5°-E	1間×1間 2.5×2.0	桁 2.5 梁 2.0	198	34	30	39	椭円形	重複使用か
					321	38	30	29	不整円形	
					322	26	24	46	不整円形	
					323	26	22	(18)	円形	
35	長方形 側柱式	N-81°-W	1間×1間 4.0(3.4)×2.1	桁 3.7~4.0 梁 2.1	324	22	22	21	円形	桁側柱間寸法がかなり長い。迹6が西側にある。
					325	24	24	25	円形	
					326	22	20	(11)	円形	
					327	22	20	(11)	円形	
41	長方形 側柱式	N-74°-W	3間×3間 3.7(3.4)×3.1	桁 1.0~1.4 梁 1.1	21	60	52	27	長方形	中央に後く小さい(57, 58)補助用ピットあり。柱の並び方、掘り方は複雑。ピット59は桶子用か。
					22	64	60	26	円形	
					23	72	70	33	円形	
					24	72	68	34	円形	
					25	66	62	32	円形	
					26	60	60	32	円形	

No	平面形 柱配り	主軸方向	規 格 (m)	柱間寸法 (m)	柱穴規模(cm)			柱穴 平面形	柱穴番号	建物址所見
					No	長径	短径	深さ		
41					27	88	66	35	不整円形	18往き切る
					28	64	58	43	円形	
					29	64	60	39	方形	
					30	108	74	36	不整円形	
					31	72	66	30	円形	
					32	60	60	20	円形	
					37	32	28	21	円形	
					58	30	28	14	円形	
					59	56	56	20	不整円形	
42	方 形 側柱式	N-22L-W	2間×2間 3.5×3.4	桁 1.8 梁 1.7	35	70	66	36	不整円形	18往き切る
					36	78	68	31	不整円形	
					37	78	76	37	不整円形	
					38	80	76	29	不整円形	
					39	70	70	44	不整円形	
					40	62	62	39	円形	
					41	70	68	40	方形	
					42	82	74	37	方形	
					52	58	58	36	円形	
43	方 形 側柱式	N-15L-W	1間×1間 1.7×1.6	桁 1.7 梁 1.6	53	56	54	41	不整円形	土壁225を切る。
					54	78	58	49	不整円形	
					55	64	58	37	不整円形	



第38図 遺構配置 (3)

#### 4. 土壙・ピット

堅穴状遺構、土壙、ピットはその規模により現場で隨時分類した。これらは第1検出面上においてその南半部に圧倒的に多く、第2検出面では住居址が分布する範囲内にやや疎らな状態で検出された。

まず前者の土壙から見てゆく。これらの総数は230基、ピット708基<sup>山</sup>である。検出状況から1号住居址、つまり平安時代中期を上限とし、今日までの遺構、遺物を見せていく。従って各時代の多用途のものを包括している為一概にとらえられない要素をもつ。覆土はすべて灰色土系の土で1号住居址よりも白色が強い。しかしこれは60年度南東遺跡と良く似るがその時よりもまだ土壙間の切り合いが容易につかめた。つまり時間差があるように思われる。

北半部に検出したものは比較的大形のもので2・3・4・5などは周囲にピットが並び(建物址)2・5等は床面にもピットがある。両者の位置と発掘時の所見からは相互が同時に存在したと考える。1をも含めこれらは平面形不定形で、周壁はグラグラと落ち込み床面は浅い所と深い所があるが深い所では堅い状態を示す。遺物は余り多くなく、須恵・土師器、陶・磁器、他に釘などがあり1は銭を出土、これから中世に属しようが用途を示すようなものは何もない。

用途の明らかなものとしては墓址がある。人骨、人歯、六文銭等をもち、堅穴状遺構12、土壙34・142・212・P<sub>1</sub>等がこれである。火葬墓も3基あり両者併行して行なっていたようである。これらが少なくとも南北に長い土壙であるのに対して、東西に長い土壙がある。33・61・69・132等である。これらは深くて壁が急状に立ち上がる。このうち33と132は隣接し1間×1間の建物址を付属させているようであり、遺物は皆無であるが墓壙が近くにあり葬送儀礼に関する施設なのであろうか。

円形の土壙には特徴的なものが多い。20と64は規模、深さとも良く似ている。覆土中には非常に多量の礫を含み、特に64は11世紀代の灰釉陶器を出土しこの遺物からすると土壙のうちでも時期の古いものと予想する。21は直徑0.5~2cmの小円礫が一面に敷かれていたものである。このような状態の土壙は今回この1基だけであった。遺物も無く時期も全く分からない。北端には203・204がある。この2基は覆土も他より一層白く深いが、床から壁の立ち上がりが丸みを帯び他のものとは全く異なる。同時期のものであろうがやはり遺物もなく分らない。

ほかに遺物の出土した土壙をみると溝4・5で区画された内部には58・59・113・172などがある。いずれも覆土中に礫を含むが113・172は特に多い。これらは平面形きわめて不整形で土師器、陶器、或いは磁器などは59の外來の青磁碗片を除くと14~17世紀の建物である。江戸時代初期にこのような不定形な落ち込みを何に使用したものであろうか。

これらの南側には19世紀代の遺物を出土する土壙群がある。94・135・174等であるが、墓址3としたものと95・99は破損した種々雑多なものを無造作に放り込んでおり、使用済のものを投棄したゴミ穴的なものと理解する。大形の99から小形の95までありその規模も形状も一概に言えない。用済の穴を便宜的に使用したものであろう。

尚73・74からは1体づつ馬の骨が検出された。両者共その位置、規模等他の土壙と変化なく副葬品にも見るべきものはない。このほかやや大形で長方形の151から馬の歯が出土した。頭部全体或いは体部までの骨は見当らない。

次にピットについてであるが恐らく前述の土壙と時期は変わるものではない。ただ土壙に比べ規模が小さく埋没に時間を要しない為か土壙覆土より青味を帯びている。土壙が西、東にまだ続くと思われるのに対し、ピットは西にはほとんど見られなくなる。又土壙の疎となる南半部に建物址として組み合わせられるピットが多出するがこれも今回調査地の中央付近に止まる。5からは前述した如く人歯が覆土中より出土、15からも銭が1点出土した。少し規模の大きなピットは墓址として充分その可能性が考えられる。

次に第2検出面で225以下の土壙について見ることとする。総数は18基で住居址12軒に対しては少ない数字である。これらの覆土は12号以下の住居址と全く同様で黒色土及至黒褐色を呈し平面形は楕円形、方形、或いは不整形を見せる。遺物は大勢を占めた住居址の弥生時代末期～古墳時代初頭の遺物がほとんどである。14住の西側に不整形の落ち込みを認めた。当初221～223と番号を付したが落ち込みは上部の黄褐色土をとり囲んで楔状に深くなる。遺物は割合多くこれらは風倒木による遺物混入と理解した。

ピットは小形のものと建物址となる大形のものがあり、小形のものは丁度住居址の柱穴と同規模を呈す。これらのものは住居址同様に発掘区中央部～北部にかけ未だ東方へ広がって続くものと思われる。

追1) 積11・12は土壙に含む。ピットは建物址分をも含める。

表の記述については、○号住居址一〇住、建物址一建、竪穴状造構一竪、土壙一壙、ピット一P、遺物では土器を土師器-H、須恵器-S、灰釉陶器-K、中・近世陶器-陶、磁器-磁、弥生式土器-赤とし。その点数は1点でもあれば上の略号を、5点まで少量、9点まで若干、10点以上を多量とつけ加えた。他の遺物は鉄器などは鉄、銅製品は銅、石器等は石と略す。なお備考欄に砾とあるのは覆土中に多量の石を含む状況をいう。

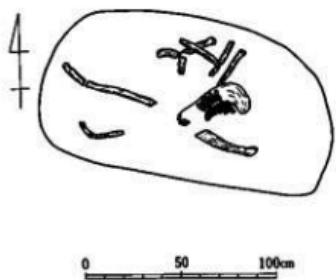
### 5. 三の宮遺跡出土の馬骨について

馬骨は2箇所の土壌から出土した2頭分である。2頭とも保存状態は同程度で、検出時の観察では骨の部位や方向から、やや自然位を保つ横位とみられたが、骨質は極めて脆く、各骨の形状はほとんど残らなかった。わずかに頭骨の一部や歯列が原型を止める程度である。そのため馬の体形や年齢などは不詳であるが、土壌の床面中央からほぼ全面に残存する骨は、馬の体形に合わせて造出された埋葬墓としての性格を窺わせるものである。

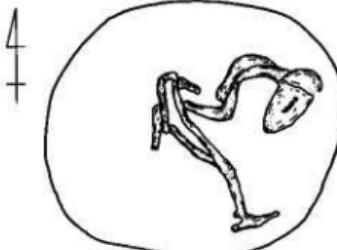
1号馬：土壌は長径約150cm、幅約80cm、深さ約30cmの長円形をなす。ほぼ中央に下顎骨を中心とする頭骨が右を上方にして残る。下顎骨の下縁と下顎枝はやや形状を保ち、脊椎骨の骨片も付着している。切歯、臼歯は歯列として多少の形状を保つが、エナメル質は破損、咬合面の形質も明瞭ではない。切歯咬合部の摩耗はやや進行しているが老齧馬ではない。四肢骨はそれぞれがやや遊離した位置で、骨体部分がわずかに残るのみである。

2号馬：約130径のほぼ円形の土壌。側壁に近く頭骨が後方を向き、胸・胸部はまったく欠失するが、頭骨の下部に肋骨の骨体が数本、並列状に密着している。これは頸部が屈曲されて頭部が後方を向いた形である。上顎・下顎の歯列は残り、齒は頭骨に植立する状態であるが、骨は下顎骨の骨体や下顎枝の一部が残るのみである。土圧により頭骨の両側が接着している。切歯の摩耗は中程度で、1号馬よりやや進行し、臼歯の咬頭も軽度に咬耗するが老齧馬ではない。前肢、後肢は下端が一個所に捕えられた姿勢で、各肢の近位関節端に肩甲骨、寛骨の一部がそれぞれ認められる。

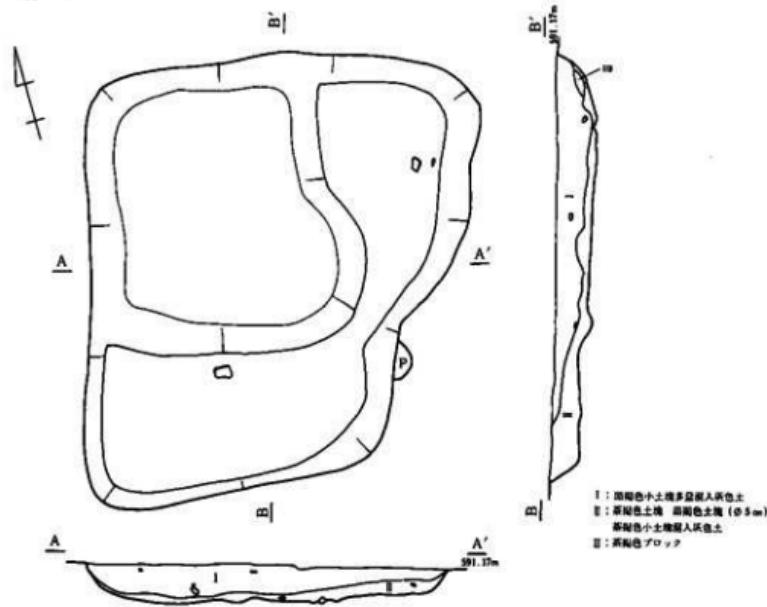
土壌73（1号馬）



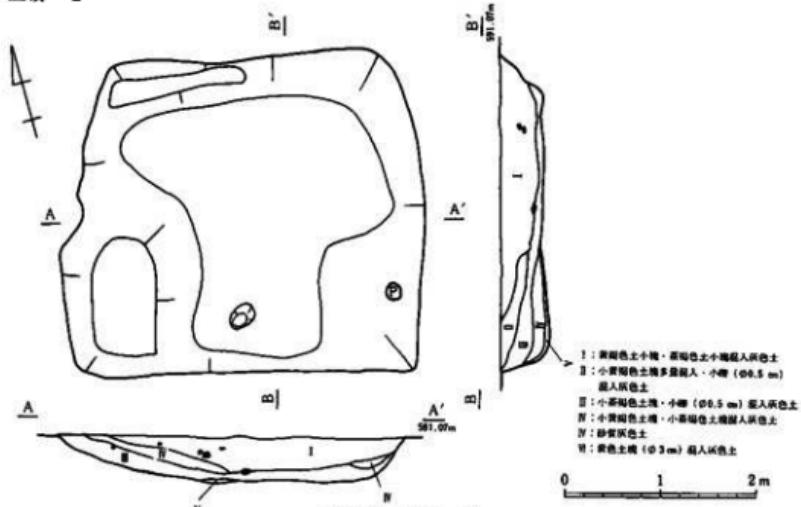
土壌74（2号馬）



土壤 1

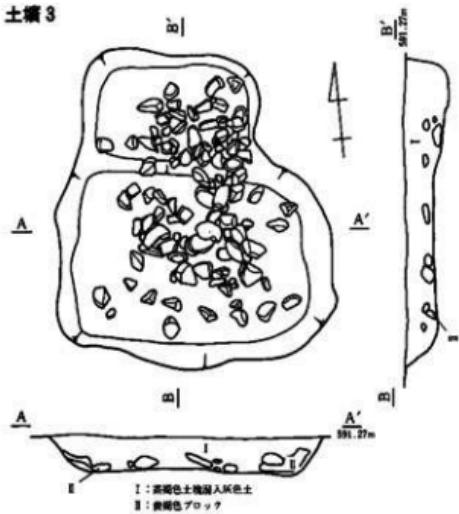


土壤 2



第39図 土壤 (1)

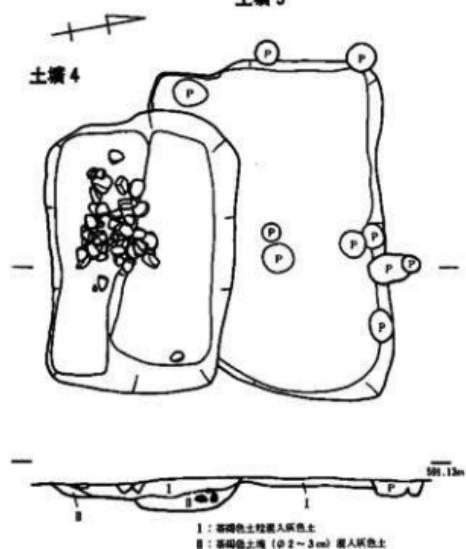
土壤3



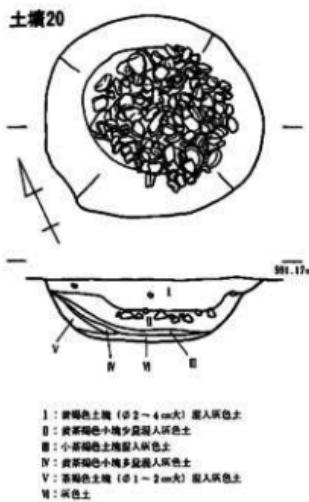
土壤13



土壤5

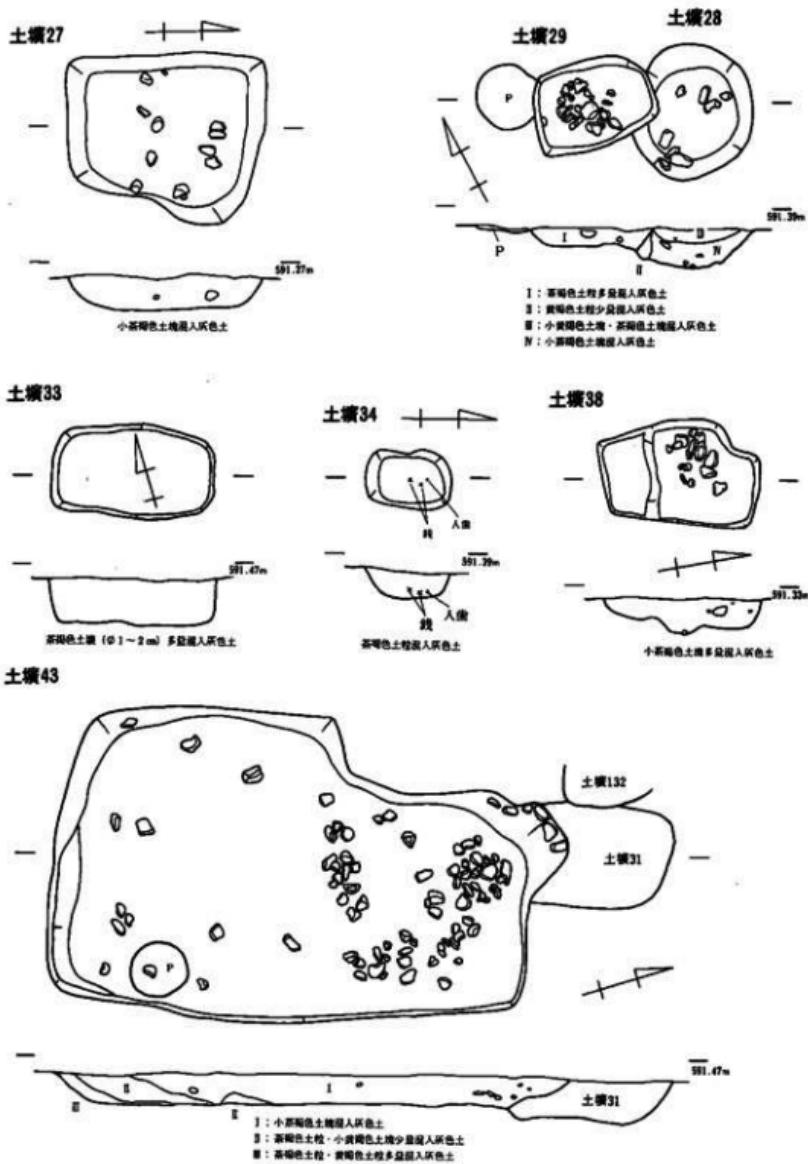


土壤20



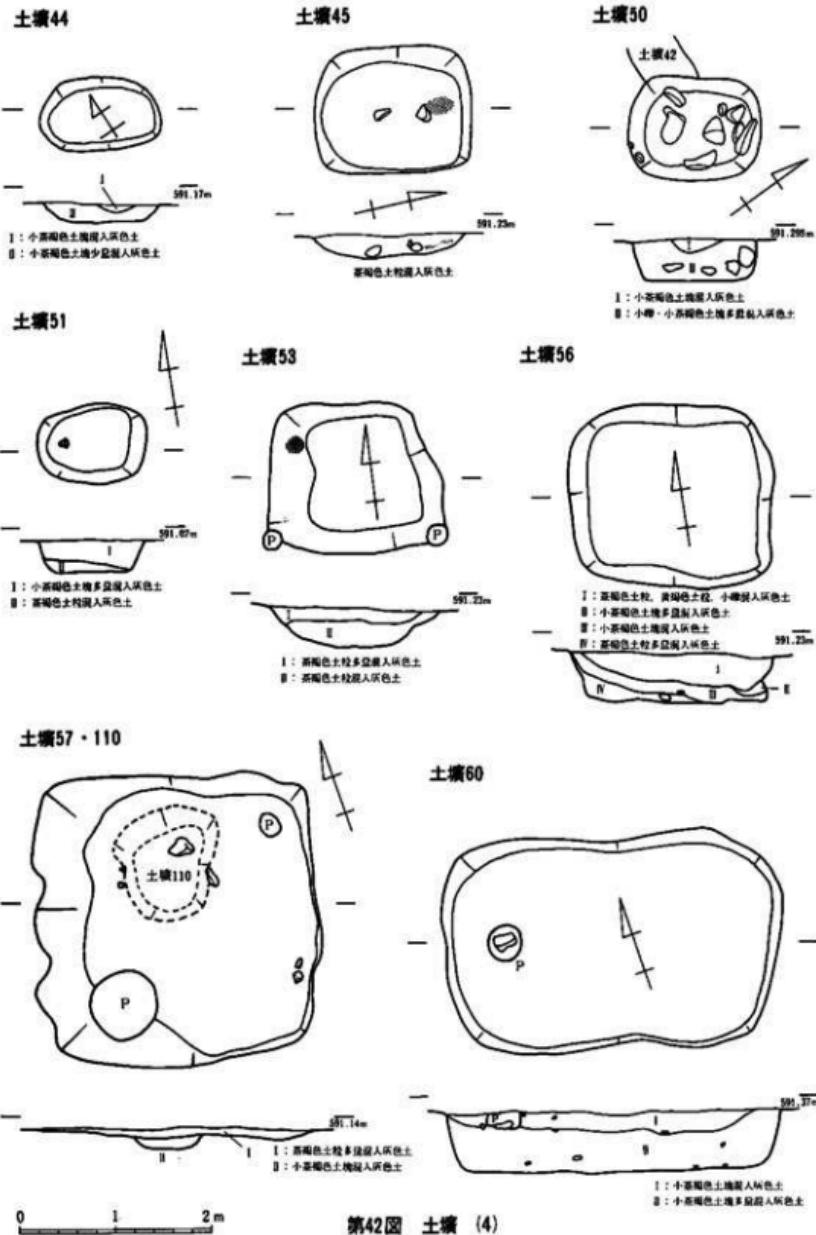
第40図 土壌 (2)





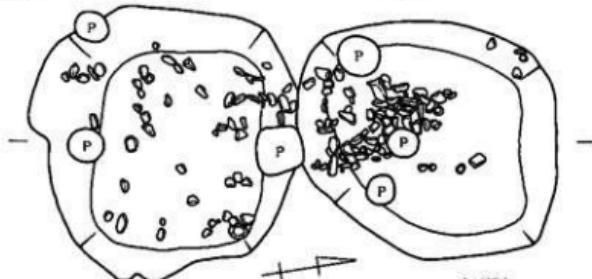
第41図 土壤 (3)





第42圖 土壤 (4)

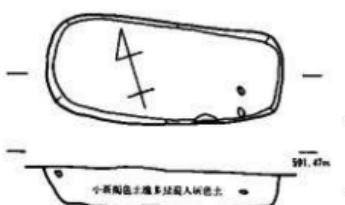
土壤59



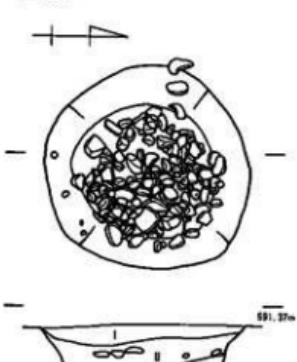
土壤58



土壤61



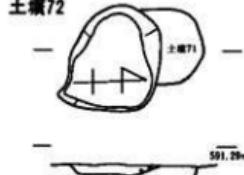
土壤64



土壤69



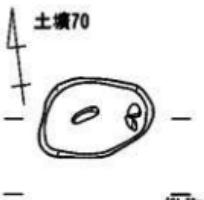
土壤72



土壤73



土壤70



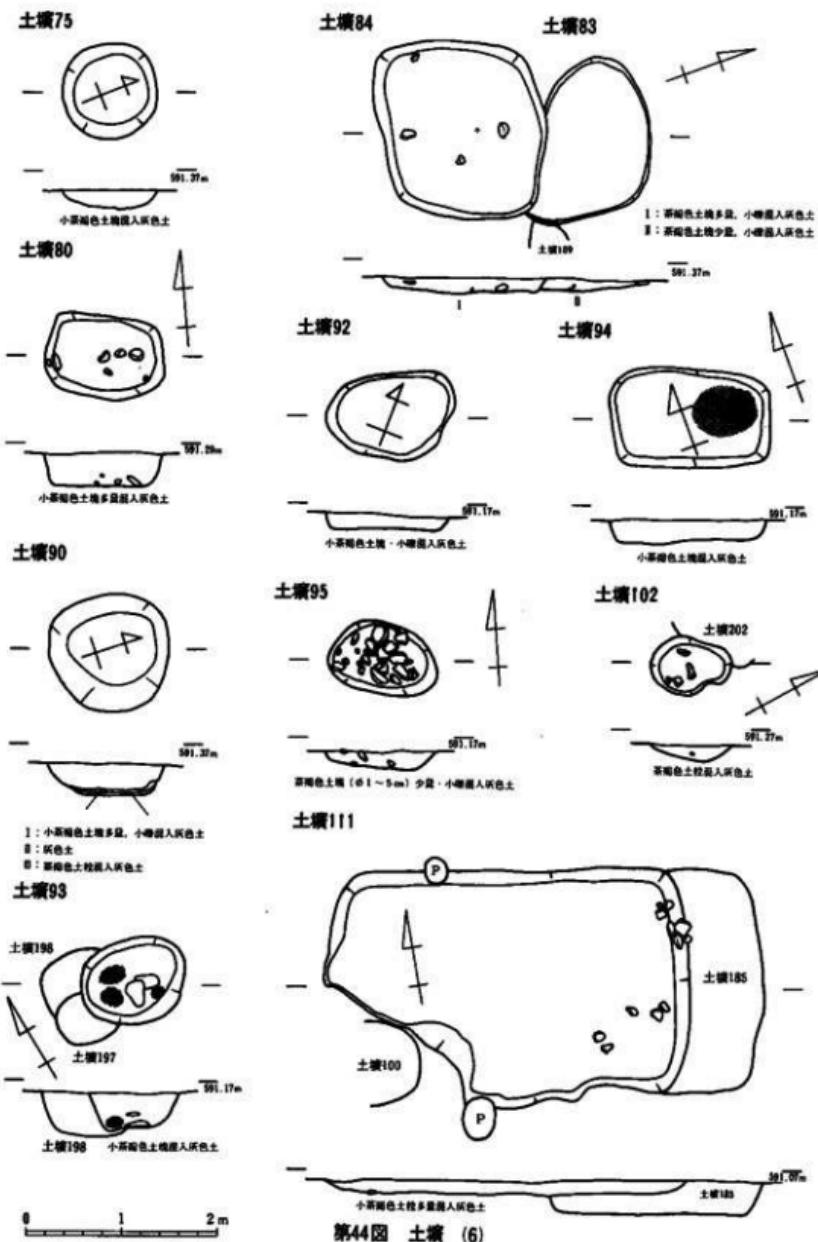
土壤74

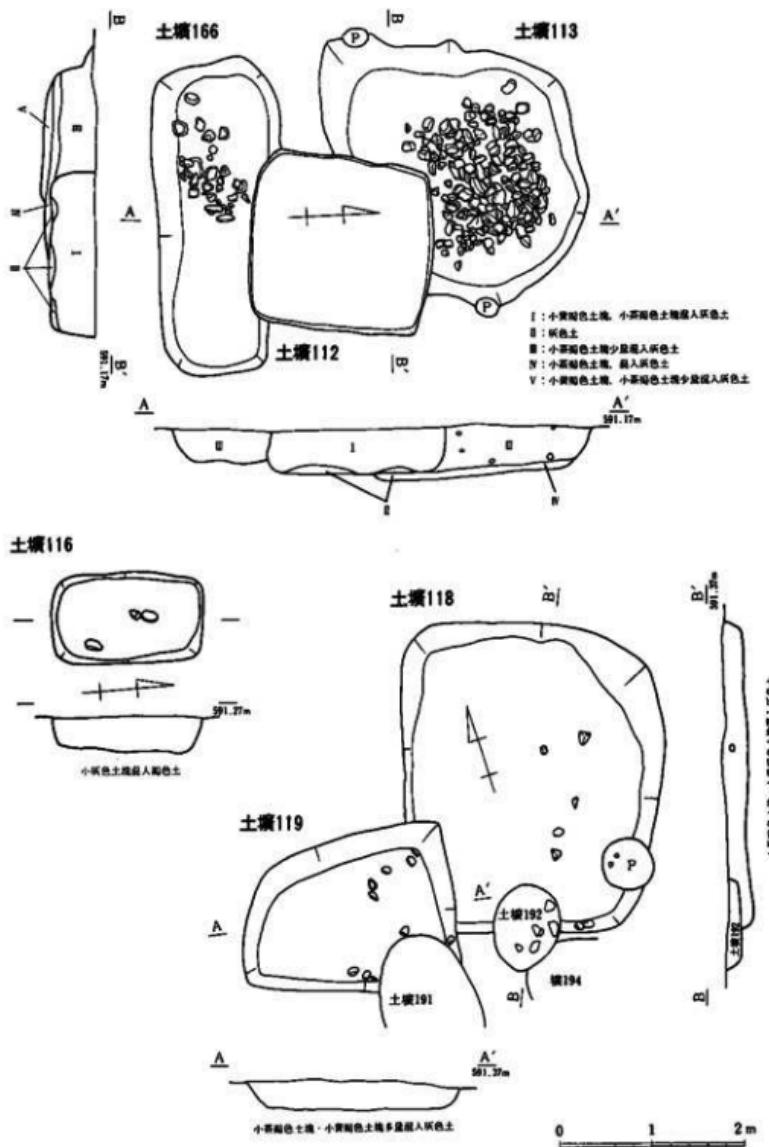


I：小黃褐色土塊混入黃色土

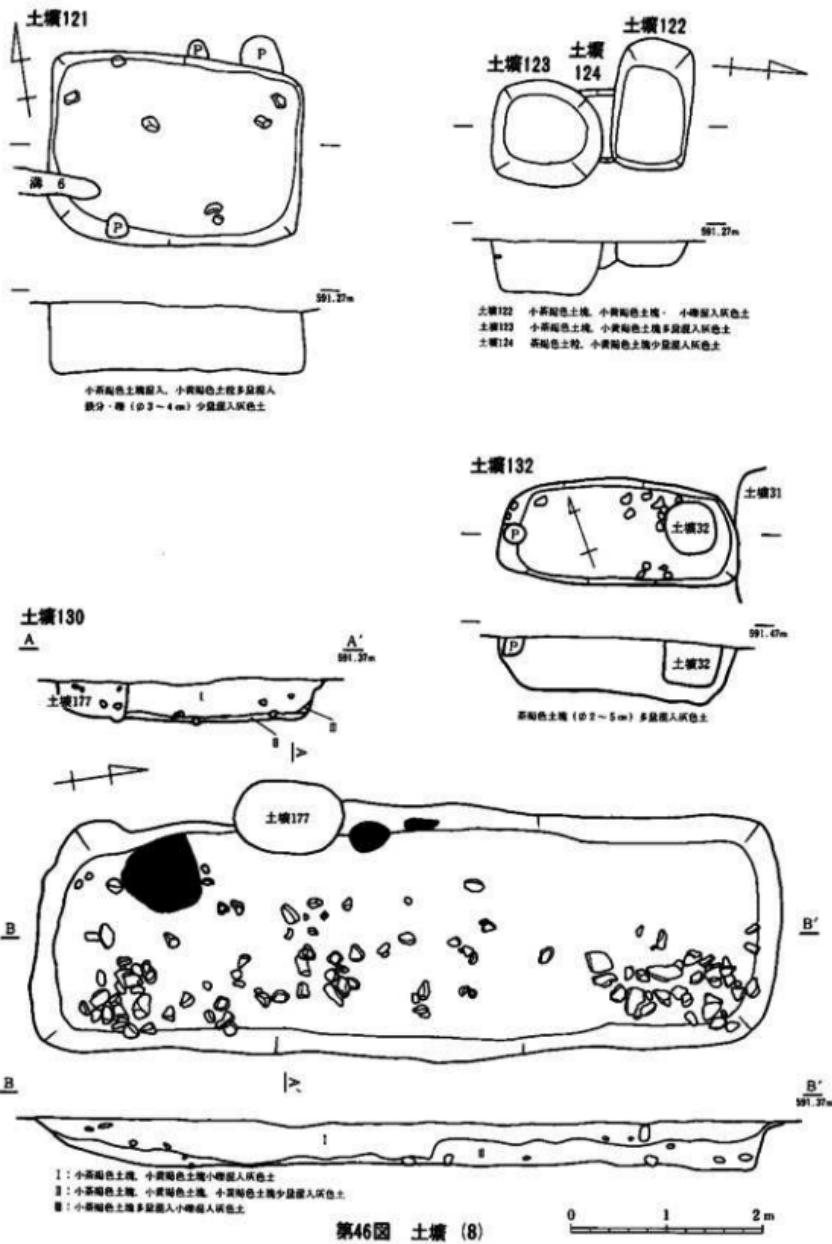
II：小黃褐色土塊·小黃褐色土塊少見混入黃色土  
III：黃色土

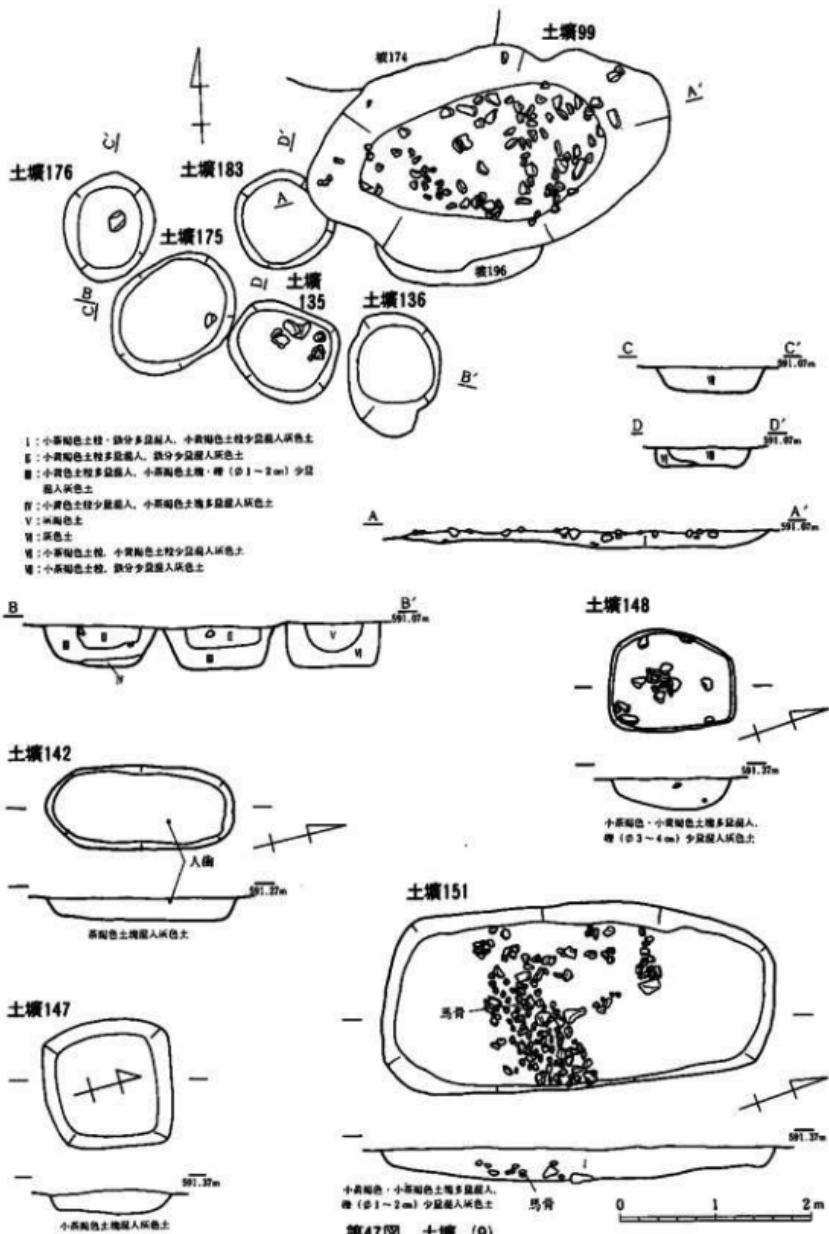
第43圖 土壤 (5)





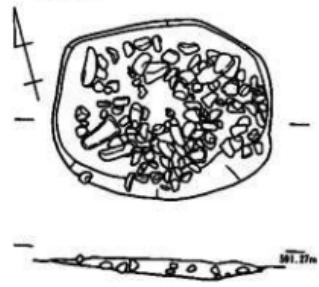
第45図 土壌 (7)





第47図 土壌 (9)

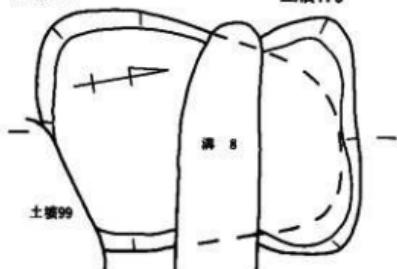
土壤154



土壤172

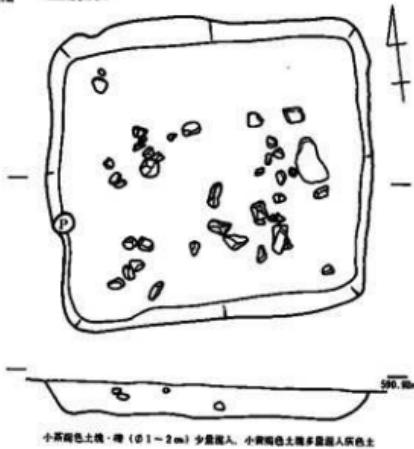


土壤174

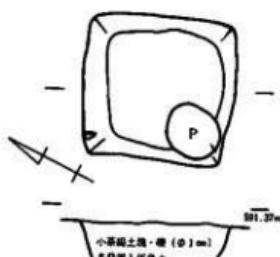


I : 小黄褐色土地多量混入、小黄褐色土地・地少量混入灰色土  
 II : 小黄褐色土地・地少量混入灰色土  
 III : 小黄褐色土地少量混入、地多量混入灰色土  
 IV : 小黄褐色土地多量混入、小黄褐色土地少量混入灰色土

土壤201

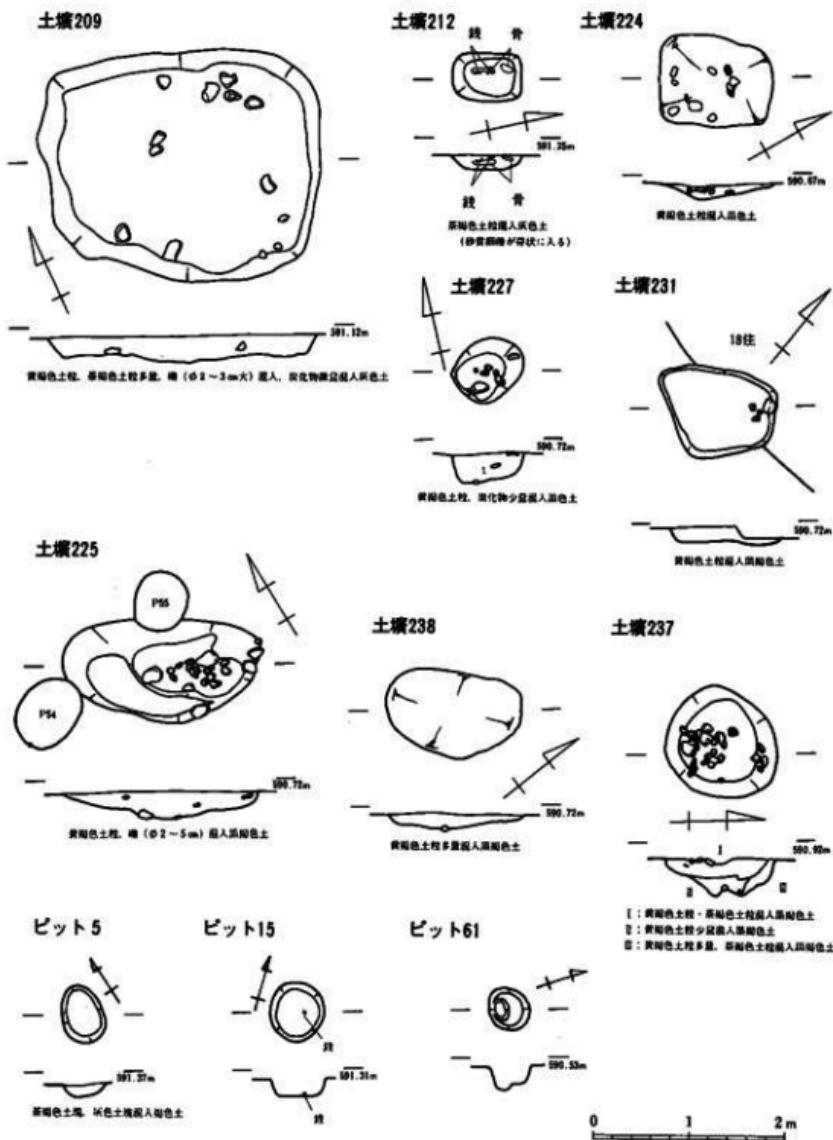


土壤187



第48図 土壤 (10)

0 1 2 m



第49図 土壌 (1)・ピット

表3 土壌一覧表(1)

## 堅穴状遺構

土 壤						考
番号	平面 形	規 長径×幅径×深さ	長軸 方向	遺 物	備 考	
11	方 形	410 × 374 × 14	N-22-E		土壤220, 215を切り、ピット81に切られる。	
12	不整方形	481 × 400 × 33	N-75.5-W	陶-少量、焼、石	床面起伏、人骨。	
堅穴状遺構						
番号	平面 形	規 長径×幅径×深さ	長軸 方向	遺 物	備 考	
1	不整方形	454 × 412 × 43	N-75.5-W	S, K, 陶, 磁-若干	床面陥没あり。低い腰が堅い。	
2	不整方形	380 × 328 × 48	N-75-W	H-多量、焼	床面陥没あり。床面非常に堅い。ピット1基。周圍に堆積あり。	
3	不整方形	323 × 290 × 41	N-89-W	H, 磁, 鉄	床面陥没あり。床面堅い。焼を多量に混入する。周圍に堆積あり。	
4	方 形	294 × 200 × 33	N- 9-E		焼土、焼化物。焼5を切る。二段底。焼するほどく露れて出土。周圍に堆積あり。	
5	不正方形	353 × (248) × 11	N- 9-E		堆6のピットとの切り合い不明。	
13	円 形	120 × 117 × 39	N-75-W		炭化物。	
14	横 円 形	134 × 88 × 11	N-82.5-W		層土中へ下層に埋非常に多し。床面平坦。深い。	
20	円 形	232 × 206 × 63	N-66.5-W	陶-少量、鉄	鐵多量に含む。	
27	不整方形	212 × 179 × 33	N- 2-E	石	層土中へ下層に埋非常に多し。床面平坦。	
28	円 形	144 × (128) × 41	N-57.5-W	陶	層29に切られる。	
29	方 形	130 × 93 × 21	N-57.5-W		焼28とピットを切る。層土中焼多し。	
33	方 形	174 × 101 × 50	N-71.5-W		焼14と関係か? 床面平坦。深い。	
34	横 円 形	92 × 63 × 28	N- 1.5-E	鉄	木片、鉄塊、人骨。	
38	不整方形	170 × 110 × 37	N- 9-E		後19に埋まる。床面と伏陥差あり。層土中焼多り。	
43	不整方形	541 × 311 × 44	N-18-E	鉄	北側層土中焼多い。床面平坦。	
44	横 円 形	128 × 75 × 10	N-58.5-W	H-少量	床面平坦。	
45	方 形	175 × 129 × 10	N-16-E		焼30と接する。層土中焼土(少量)あり。床面地土。	
50	隅丸方形	140 × 109 × 41	N-19-E		焼42を切る。人骨大骨層土中にあり、深い。床面平坦。	
51	横 円 形	113 × 81 × 33	N-32-W	H, K-若干	床面平坦。	
53	不整方形	187 × 158 × 40	N-33-W	H, 磁-若干	二段ピットに切られる。層土中に焼土少量。堅硬やか。床面焼土。	
56	方 形	220 × 186 × 50	N-81.5-W	H-若干	深い。	
57	不整方形	302 × 286 × 11	N-20.5-E	H-少量、石	焼110を切る。ピット2基は断。浅い。第23のピットに切られる。	
58	不整円形	265 × 242 × 31	N-10-E	H-若干、陶、磁-少量	焼59を若干きる。層土中焼多し。ピット3基は断。	
59	不整円形	283 × 265 × 43	N-10.5-E	H, 陶、磁-少量	ピット3基は断。	
60	不整方形	355 × 227 × 60	N-70.5-W		深い。床面平坦。豊富。	

番号	平面形	規 模(cm)	長 軸 方 向	通 物	備 考
61	長 方 形	248 × 109 × 40	N-72°-W		堅底状。床面平坦。
64	円 形	214 × 211 × 55	N-1°-E	S, 間-少量	礫層土上に中等多量。第20と良く似る。深い。
69	不 壇 方 形	172 × 107 × 60	N-82°-E		堅土上に礫。床面平坦。堅怠。
70	不 壇 極円形	120 × 84 × 25	N-82°-W		
72	不 壇 形	110 × 100 × 10	N-25°-W		
73	不 壇 極円形	163 × 83 × 21	N-73.5°-W		
74	円 形	162 × 133 × 27	N-86.5°-W		
75	円 形	102 × 100 × 18	N-24°-E	陶, 磁-少量	
80	梢 円 形	124 × 86 × 33	N-86°-W	H	堅底状。下面小焼土塊あり。
83	不 壇 極円形	165 × (132) × 10	N-21°-E	磁	標189を切る。土塊34に切られる。深い。
84	不 壇 方 形	180 × 160 × 18	N-22°-E	陶-少量	床面平坦。焼土。
90	円 形	125 × 120 × 33	N-17°-E	陶, 磁-少量	床面被覆層あり。
92	不 壇 極円形	136 × 88 × 16	N-69°-E	H,	標197, 198を切る。堅土中一下層焼土, 烧土塊, 残化物。
93	円 形	107 × 88 × 42	N-63°-W	H,	堅底状。下面上層焼土, 烧土塊, 残化物。
94	梢 円 形	170 × 105 × 23	N-71°-W	H,	堅-少量, 磁-若干, 鉄, 線
95	梢 円 形	115 × 74 × 19	N-86.5°-W	陶-多量, 鉄, 石	堅土中層多し。
99	梢 円 形	385 × 211 × 15	N-78.5°-E	S-少量, 陶-多量, 鉄, 石	標174, 183, 196を切る。堅土中層多し。
102	不 壇 極円形	85 × 62 × 18	N-31°-E		標202を切る。床面ナリばら状。
110	不 壇 形	117 × 115 × 13	N-90°-E	H-少量	標185に切られる。南北のピットに切られる。床面平坦。
111	不 壇 方 形	395 × 232 × 15	N-84°-W	H, 陶-少量, 石	標113, 166を切る。堅底上。
112	正 方 形	198 × 185 × 50	N-4°-W	H, 陶-少量, 石	堅土中層多し, 残化物あり。深い。
113	不 壇 形	283 × (268) × 53	N- 3.5°-W	磁	堅底状。
116	万 形	166 × 99 × 37	N-4°-E		標119, 192, ピットに切られる。
118	不 壇 方 形	338 × 281 × 28	N-18°-E	陶-少量, 鉄	標191に切られる。
119	不 壇 方 形	234 × (180) × 26	N-79°-W		標6に切られる。縫300のピットを切る。堅直状, 床面平坦。特に深い。
121	方 形	267 × 195 × 71	N-82°-W	H, 陶-少量	標24を切る。
122	方 形	137 × 78 × 25	N- 1.5°-E		標24を切る。深い。
123	円 形	116 × 109 × 55	N- 1.5°-E	H	
124	不明	(78) × 不明 × (27)	N- 1.5°-E		
130	大形長方形	792 × 270 × 50	N- 7°-E	H, 陶-少量	標177に切られる。堅土中層あり。西側膠化物広がる。床面平坦。
132	梢 円 形	250 × 110 × 61	N-70.5°-W		標32, 西側ピットに切られる。堅31を切る。堅底状, 深い。
135	円 形	117 × 100 × 49	N-77°-W	H, 陶-少量, 鉄	深い。床面平坦。落ち込み急。
136	不 壇 円 形	126 × 100 × 47	N-15.5°-E	H, 陶-少量	深い。床面平坦。

番号	平面形	規 格(cm)	長軸方向 規 格(cm)	通 物	備 考
142	楕円形	200×89×25 長径×短径×深さ	N-15.5-E H, 間一少量	床面平坦。人骨(腐土上層)。	高瀬
147	方 形	133×131×20	N-15-E	床面中央凹む。	
148	不整方形	133×103×31	N-18-E	発土中に塊。馬骨若干出土。	
151	長 方 形	414×190×34	N-17.5-E	発土中に塊多量。床面削鉄。	
154	不整椭円形	226×182×19	N-74-W	発土中に塊。	
166	長 方 形	337×134×32	N-1.5-W	溝8に切られる。腐土下層に塊多し。	
172	不整方形	294×263×34	N-14.5-E	発土若干	
173	不整椭円形	248×不明×20	N-13-E	溝8、溝99に切られる。深い。床面起伏あり。	
174	不整椭円形	250×不明×61	N-13-E	発土・塊とも複数。底面起伏あり。	
175	不整円形	130×125×41	N-75-W	底面起伏。	
176	不整円形	115×89×27	N-9-E	溝99に切られる。	
183	正 方 形	106×102×20	N-0*	ピットに切られる。	
187	正 方 形	163×160×60	N-26-W	ピットに切られる。腐土中塊あり。床面起伏。	
201	方 形	340×315×34	N-81.5-W	床面起伏。	
209	不整円形	296×237×29	N-63-W	石	
212	方 形	74×48×15	N-11.5-E	発土中に塊多量。	
224	椭 圆 形	119×92×15	N-29-E	溝13のピット2基に切られる。床面起伏。腐土中に塊多量。	
225	椭 圆 形	208×106×27	N-59-W	発土若干	
227	不整円形	76×64×30	N-79-W	発土中に塊多量。	
231	不整台形	(97)×不明×14	N-47.5-E	発土中に塊多量。	
237	円 形	118×114×37	N-0*	18往を切る。	
238	椭 圆 形	141×90×14	N-37.5-E	床面起伏あり。腐土中に塊多量。	

## 墓址

番号	平面形	規 格(cm)	長軸方向 規 格(cm)	通 物	備 考
1	不整方形	100×80×20	N-5-E	人骨、炭化物多量。	
2	椭 圆 形	130×80×30	N-8-E	ピットを切る。第6壁面に置かれている。炭化物多い。人骨若干。	
3	台 形	120×84×24	N-14-E	土壌67を切る。発土は土上一中層、焼土外に遺物あり。炭化物、灰(下層)、基盤ではない。	
4	不整円形	110×84×24	N-3.5-E	炭化物多し。人骨若干。	

表4 土壌一覧表(2)

土壌番号	平面形	断面形	規格 (cm) 長径×短径×深さ	長軸方向	備考
6	-	U	116 × 92 × 21	N-22°-E	達29のピットを切る 床面平坦
7	-	U	172 × 164 × 29	N-18°-E	床面平坦
8	-	U	140 × 136 × 18	N-70.5°-W	床面平坦
9	-	U	120 × 88 × 15	N-77.5°-W	
10	-	U	92 × 76 × 15	N-11°-E	床面平坦
11	-	U	96 × 64 × 20	N-44°-E	床面中央凹む
12	-	U	100 × 84 × 11	N-3°-E	床面傾斜 浅い
15	-	U	180 × 140 × 9	N-10°-E	達13に囲まれる 非常に浅い H-若干 困
16	-	U	不明 52	不明	土被24に切られる 非常に浅い
17	-	U	72 × 60 × 23	N-16.5°-E	中央凹む
18	-	U	80 × 52 × 28	N-35.5°-E	達9のピットを切る?
19	-	U	216 × 80 × 17	N-13°-E	達9のピットに切られる 基址1に東側する H-少量
21	-	U	184 × 152 × 11	N-80°-W	浅い 床面 (φ 0.5~2cm) 丸石散かれる 床面平坦
22	-	U	80 × 72 × 14	N-87°-W	
23	-	U	140 × 92 × 17	N-5.5°-E	床面傾斜 困
24	-	U	134 × 92 × 30	N-84°-E	土被16を切る 断面やや袋状
25	-	U	72 × 58 × 8	N-2.5°-E	床面起伏
26	-	U	86 × 58 × 15	N-76.5°-W	
30	-	U	96 × 74 × 43	N-8°-E	深い H



土壌 番号	平 面 形	断 面 形	規 模(cm) 長径×短径×深さ		長軸方向	備 考
			長 軸	短 軸		
31			不明	47	不明	土壤43に切られる 深い
32			64	56	N-19° E	土壤132を切る
35			160	92	N-15° E	壁急
36			128	88	N-37° W	浅い
37			96	86	N-37° E	
39			100	76	N-68° W	達20に囲まれる
40			263	235	N-8° E	土壤108を切り、達20に切られる 床面平坦 H
41			114	74	N-72° W	深い 断面袋状
42			不明	13	不明	土壤50に切られる H
46			232	150	N-16° E	達16内にあり 床面平坦
47			150	92	N-87° W	床面平坦 鉄
48			92	56	N-70.5° W	
49			125	83	N-75° W	東のピットを切る やや深い 床面すり鉢状 鉄
52			(122×120)	13	(N-73° E)	土壤107を切り、土壤106に切られる
54			160	80	N-54° E	
55			150	142	N-7.5° E	ピットに切られる
62			226	200	N-13° E	床面断崖あり 石

0 2 m

土壠番号	平面形	断面形	規模(cm) 長径×短径×深さ	長軸方向	備考
63	-○-	—	(139×138) × 26	N-26°-E	溝7に切られる
65	-○-	—	160 × 94 × 20	N-73.5°-W	
66	-○-	—	128 × 114 × 7	N-89°-E	浅い
67	-○-	—	124 × 82 × 33	N-22°-E	床面平坦
68	-○-	—	85 × 73 × 25	N-1.5°-W	土壠103を切る
71	-○-	—	不 明 13	不 明	土壠72に切られる
76	-○-	—	102 × 100 × 20	N-24°-E	
77	-○-	—	102 × 80 × 18	N-51°-W	土壠78を切る
78	-○-	—	(66 × 65) × 12	(N-74-E)	土壠77に切られる
79	-○-	—	140 × 95 × 18	N-85.5°-E	
83	-○-	—	92 × 73 × 23	N-82°-E	床面傾斜
82	-○-	—	140 × 120 × 18	N-83.5°-E	
85	-○-	—	(202×146) × 17	(N-76.5-W)	ピットに切られる H-少丘
86	-○-	—	103 × 97 × 31	N-13°-E	H 鉄
87	-○-	—	122 × 85 × 18	N-79°-W	ピットを切る H 陶
88	-○-	—	92 × 90 × 17	N-82°-W	
89	-○-	—	82 × 80 × 9	N-9°-E	浅い
91	-○-	—	108 × 62 × 13	N-19.5°-E	
96	-○-	—	127 × 83 × 29	N-87°-W	土壠97, 133を切る H 陶

0 2 m

土壌番号	平面形	断面形	規模(cm)		長軸方向	備考
			長径	短径×深さ		
97	-  -	- 	不明	(22)	不明	土壌133を切り、土壌96・100を切る 骨(腹中)
98	-  -	- 	118	95 × 15	N-89°-W	床面平坦
100	-  -	- 	104	87 × 11	N-86°-E	土壌97を切り、土壌111と接する
101	-  -	- 	82	70 × 17	N-16°-E	
103	-  -	- 	不明	5.5	不明	土壌68に切られる
104	-  -	- 	75	53 × 11	N-13°-E	
105	-  -	- 	71	64 × 10	N-87°-E	建31に囲まれる
106	-  -	- 	87	80 × 7	N-80°-W	土壌52を切る 深い
107	-  -	- 	不明	(21)	不明	土壌52に切られる
108	-  -	- 	不明	(27)	不明	建20に囲まれる 土壌40に切られる
109	-  -	- 	(94 × 66) × 20	(N-85°-E)		東のピットに切られる
114	-  -	- 	86	73 × 13	N-13°-E	
115	-  -	- 	64	53 × 8	N-22.5°-E	浅い
117	-  -	- 	188	156 × 23	N-16°-E	
120	-  -	- 	80	72 × 9	N-84°-E	
125	-  -	- 	不明	(21)	不明	西のピットに切られる骨(位置不明)
126	-  -	- 	143	140 × 20	N-76.5°-W	建7を切る 炭化材片1点あり
127	-  -	- 	不明	(27)	不明	土壌64・26に切られる 輪郭ぼける(第1検出面下層の遺構と思われる) 弥一苦干

0 2 m

古号	平 面 形	断 面 形	規 模(cm)		長軸方向	備 考
			長径×短径	×深さ		
128	-○-	~	65	×	64 × 27	N-14°-E 途30に囲まれる
129	-○-	~	85	×	83 × 15	N-18.5°-E 土壌157を切る
131	-○-	~	64	×	62 × 18	N-9.5°-E
133	~		不 明	6.5	不 明	土壌6, 97に切られる 外形不明 石
134	-○+	~	172	×	127 × 17	N-76.5°-E 床面平坦
137			340	×	305 × 20.5	N-80°-E 溝4を切るか? 磨混入 覆土溝8に近似 石
138	158を見よ					
139		~	175	×	150 × 29	N-84°-W 土壌182, 186を切る
140		~	237	×	162 × 28	N-83°-W 土壌141, 186を切る
141	-○-	~	不 明	(23)	不 明	土壌140に切られる
143		~	187	×	127 × 28	N-76°-W 床面平坦
144	欠番					
145	-○+	~	93	×	90 × 14	N-85°-W
146	-○-	~	94	×	84 × 22	N-75°-W
149	-○-	~	100	×	94 × 13	N-5°-W
150		~	172	×	122 × 20	N-29°-E 土壌179, 180を切る 鉄
152	-○+	~	102	×	64 × 22	N-79.5°-W

0 2 m

土質番号	平面形	断面形	規格(cm)		長軸方向	備考
			長径×短径×深さ			
153	-	-	(175×112)×48	(N-10.5°-E)	西側ピットに切られる 床面 深く傾斜 鉄石	
155	-	-	92×71×17	N-14°-E		
156	-	-	106×100×18	N-3°-E		
157	-	-	272×190×27	N-14.5°-E	土壌129に切られる 床面傾斜	
(158) 158	-	-	(138×不明×24) 196×不明×93		土壌138と土壌158の切り合い 不明 二段底を成し深い (158)	
159	-	-	74×60×13	N-6°-E		
160	-	-	113×108×21	N-38.5°-E	壁緩やか	
161	-	-	103×92×22	N-38.5°-W	壁緩やか	
162	-	-	87×73×13	N-9°-W	壁緩やか	
163	-	-	107×70×22	N-69°-W	土壌188を切る	
164	-	-	(119×106)×15	(N-76°-W)	東側のピットを切り、他のピットに切られる	
165	-	-	(195×133)×8	(N-4.5°-E)	ピットに切られる 深い	
167	-	-	不明 (13)	不明	基3に切られる	
168	-	-	不明 (13)	不明	溝8、土壌169、170とピットに切られる	
169	-	-	不明 (17)	不明	土壌170に切られ、土壌168を切る	
170	-	-	150×123×16	N-81°-W	土壌168、169を切る	

0 2m

番号	平面形	断面形	規模(cm) 長径×短径×厚さ	長軸方向	備考
171	-①-	~	(75 × 69) × 19 (N-82°-W)		東側ピットに切られる
177	-①-	~	113 × 76 × 40 N-11°-E		土壁130を切る 床面傾斜
178	-①-	~	不明 (20) 不明		溝6に切られる 床面傾斜
179	-①-	~	不明 (21) 不明		土壁150に切られる
180	-①-	~	不明 (17) 不明		土壁150に切られる
181	-①-	~	61 × 51 × 13 N-86°-W		焼土塊混入
182	-②-	~	不明 (70) 不明		土壁139に切られる 深い
184	-①-	~	117 × 103 × 29 N-42°-E		
185	-③-	~	不明 (33) 不明		土壁111に切られる
186	-④-	~	不明 (28) 不明		土壁139、140に切られる
188	-⑤-	~	不明 (28) 不明		溝9を切り、土壁163に切られる
189	-⑥-	~	72 × 45 × 22 N-86°-E		土壁83に切られる
190	-⑦-	~	190 × 115 × 18 N-70°-W		
191	-⑧-	~	146 × 105 × 21.5 N-13°-W		土壁119を切る
192	-⑨-	~	92 × 75 × 17 N-11°-E		土壁118、194を切る
193	-⑩-	~	178 × 145 × 16 N-23°-W		張り出しあり

0 2 m

土壠号	平面形	断面形	規模(cm) 長径×短径×深さ	長軸方向	備考
194			不明(42.5)	不明	土壠192に切られる
195			165 × 137 × 15.5	N-52°-W	
196			不明(25)	不明	土壠99に切られる 外形不明
197			不明	不明	土壠93に切られ、土壠198を切る
198			不明(48)	不明	土壠197を切り、土壠93に切られる
202			121 × 113 × 10	N-63°-W	土壠102に切られる 浅い 張り出しあり
203			135 × 130 × 27	N-23°-E	床面ボウル状 H-少量
204			179 × 168 × 62	N-35.5°-W	床面ボウル状 深い H-少量
205			142 × 111 × 9	N-89°-E	壁2に切られる 浅い
206	欠番				
207			101 × 92 × 14	N-18°-E	床面起伏
208			111 × 85 × 18	N-22°-E	
210			不明(15)	不明	壁11に切られる
211			140 × 61 × 9	N-6.5°-W	溝1に切られる 浅い
213			75 × 71 × 10	N-2.5°-W	浅い すりばち状
214			73 × 64 × 21	N-79°-W	すり鉢状 床面傾斜
215			不明(15)	不明	壁11に切られる
216~220	欠番				
221~223	風倒木痕				

0 2 m

※No202以下は第2検出面からのエレベーションである。

古墳 番号	平面形	断面形	規 模(cm)		長軸方向	備 考
			長径	幅径×埋蔵深さ		
226	-  -	-  -	151	89 × 34	N-10°-W	
228	-  -	-  -	240	91 × 10	N-67°-W	浅い
229	-  -	-  -	170	82 × 13	N-7°-W	弊
230	-  -	-  -	152	61 × 45	N-70.5°-E	床面傾斜
232	-  -	-  -	170	79 × 30	N-8°-E	
233	-  -	-  -	307	210 × 48	N-81°-W	床面傾斜
234	-  -	-  -	153	91 × 53	N-86°-W	不規則な落ち込み
235	-  -	-  -	136	100 × 13	N-83°-E	浅い
236	-  -	-  -	187	100 × 62	N-33.5°-E	不規則な落ち込み
239	-  -	-  -	不明	(38)	不明	20往、土壌240に切られる 外形不明
240	-  -	-  -	92	79 × (42)	N-28°-E	20往に切られる

0  2 m

## 6. 墓址・溝

### (1) 墓址

今回墓址として扱ったものは焼土・炭化物などを多量に検出した土壙4基をここに掲げた。これらは何れも南北に長いが、3は骨は全く見られずまず墓址として一応除外したい。又1と2、4は内容がやや異なる。つまり1は良く見られる火葬墓で中央に東西に長く溝を設けてある。その結果周囲は赤褐色と化し炭化材と人骨が多量に遺存している。副葬された六文銭は熱により融けて相互に密着、変形してしまって銭名も分らない。これに対し後者は炭化材が多いが燃焼による周壁の赤褐色化も余り目立たず人骨もかなり少ない。空気用の溝を持たない為熱効率が悪く完全に焼けず骨は酸化して残らなかったものと思われる。なお墓址2からは永楽銭と釘を出土する。

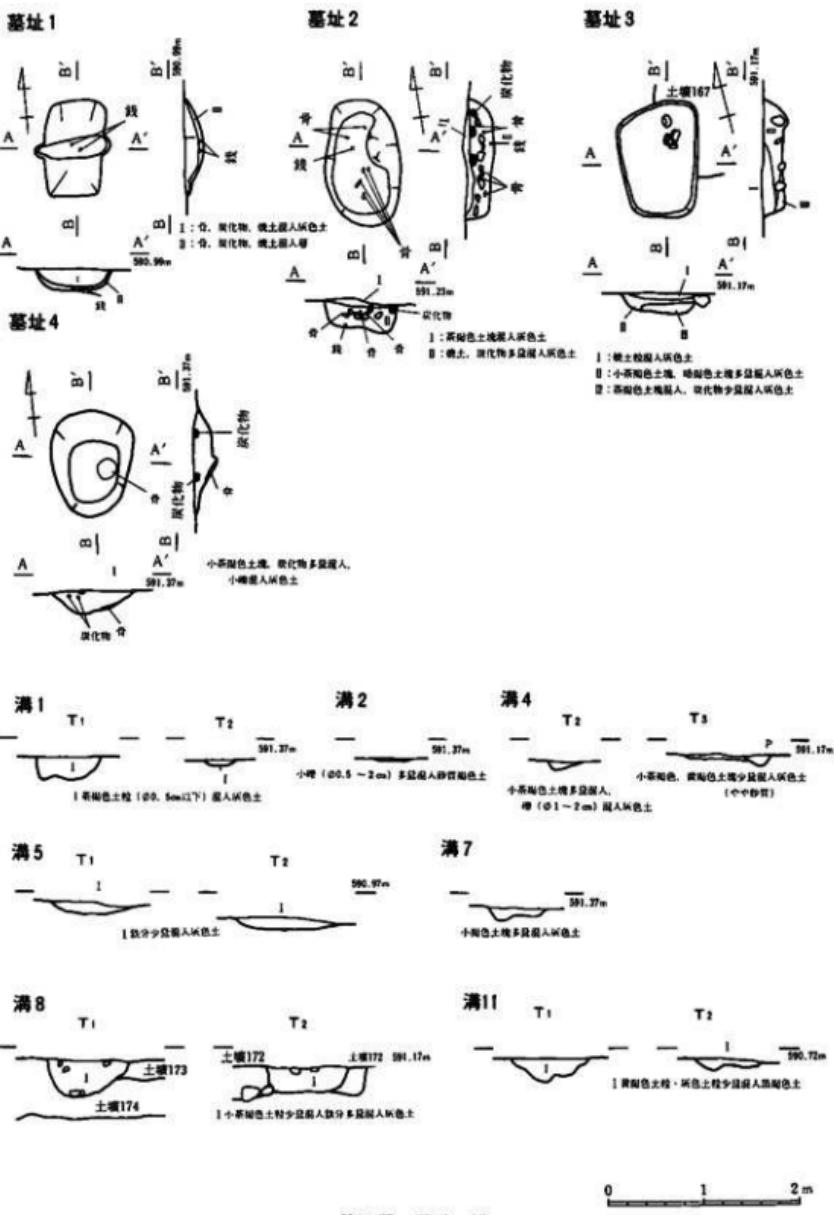
これらに対して土壙等と記載したなかに人骨あるいは銭を複数出土した造構がある。豎穴状造構12(図24)、土壙34(図41)、142(図47)、212(図49)、ピット5(図49)などがそれである。このうち最大規模の豎穴状造構12(481×400×33cm)からは銭が6枚重なって出土した。最少のP: (62×44×18cm) の他土壙142からも人齒を、土壙34、212などからは銭を5、6枚と人齒、人骨の出土を見ている。これらは土葬墓であろう。豎穴状造構を除くと規模の大小はあるが火葬墓同様南北に長い落ち込みである。酸化土壙の為このような葬法では硬い歯位いしか残らず銭などの副葬品をもたない物もある事を考えるとまだ多数の墓址の存在が予想できる。次に遺物よりその時期を考えるなら永楽通宝迄のものをもつ墓址2、土壙34、212と、寛永通宝のみ6枚を出土する豎12とは江戸開幕以前、以降に大きく分けられようか。発掘区内で現状の墓址をみると西~南西部に火葬墓を含め8基中5基が位置している。

### (2) 溝

溝は第1検出面で1~10、第2検出面で11を検出した。このうち1・4・5は溝底部に水の流れた痕跡を見せある所で直角に曲げられている。自然地形が西から東、南から緩やかに北へ開くことを考えればその方向も理解できよう。なかでも4・5は周囲の造構との間に間隔をもっており、第1検出面の大槻の造構と併存したものと考える。これに対し8はしっかりと深い掘り込みで多数の土壙と切り合い後世のものを示している。

図4を見ると現水田の畦畔と溝4・5がほぼ一致する事が分かる。又溝1は南側畦畔の北延長線上に位置し、これらの溝が現在水田としている区割の基準の一つとなってきた事をうかがわせる。

第2検出面での溝11は底部に起伏がありその中も広狭となり南側は検出できない。周囲の住居址・土壙と同じ覆土をもっており水の流れなどは全く観察できない。どのような性格のものであろうか。



第50図 墓址・溝

### 第3節 遺 物

#### 1. 土器・陶磁器

##### (1) 概要

第1検出面上で確認された遺構および検出面からは、中近世の土器・陶磁器と平安時代の土器が、また第2検出面上で確認された遺構および検出面からは、弥生時代末から古墳時代初頭にかけてと、古墳時代後期の土器が出土している。量は、調査面積・発見遺構の数の割合に比べて少ない。

今回報告する土器・陶磁器は当地方では出土例が少なく、個々の器種・器形の分類や、それらが構成する器種組成が十分把握されていない、いわば資料蓄積段階のものである。このため、ここでは各遺構毎、図示したものの説明を提示方法の中心としたい。

##### (2) 中近世の土器・陶磁器

本遺跡出土の陶磁器は100点あまりにおよんだが、器種・器形の判明するものを選出して63点を図示した。図の順序は複数の遺物を出土した土壇から、単品出土の土壇・墓址・竪穴・その他の順で羅列した。全体をみると遺構別では土壇95・99・墓3に遺物の出土が多く、器種も青磁碗・染付碗・皿・鉢・鉢・徳利等多様であり、時代も弥生時代のものもあるが主として中世から近世にかけてのものである。

**輸入陶磁器** 青磁・青白磁・白磁の碗・瓶・皿があり合計12片の出土をみた。そのうち鎌倉弁の青磁碗が8点で、色調は明青緑色と暗緑茶色の2種である。横田賛次郎・森田勉氏の分類によれば龍泉窯系のI-5・6にあたるものである。図示したもの(2, 44, 59, 61)はいずれも口径が15.2cmであり、口唇が僅かに外反する。44の暗緑茶色を呈する碗には貫入がある。3は雷文帯蓮弁文のあるもので龍泉窯系の青磁碗である。口径は14cmでやや内弯し、暗緑茶色の釉は0.5mmあまりある。同安窯系青磁碗は1点あり(40) 内面に櫛状工具によるジグザグ文とヘラ状施文具による沈線が施されている。釉色は明緑茶色で外面は縱に削ったあとロクロナデをしている。青白磁では瓶の破片が1点ある(45)。クシ状工具でつる状の平行沈線を引き、草花文を彫りおこしている。釉は青白で彫り込み部分がやや茶色味を帯びた青灰色を呈している。景德鎮窯系に似ている。図示しなかったものに白磁の皿片がある。色調はやや濁った白灰色で薄手のものであり、内面に僅かな段をもっている。

**陶器** 出土量の大半は陶器である。陶器には灰釉陶器(41)、白瓷系陶器(39, 41)の他は全て近世の陶器である。41は皿で釉は外面は高台まで、内面は胴部までで、高台に重ね焼きによるひつつき痕が見える。高台は三角高台で底裏には糸切痕が残る。丸石2号窯式に比定されよう。39は内外にロクロ目を残し、内面はごつごつしており、外面にはロクロの筋がついている。三筋臺になるものかも知れない。46は土壇130と172の遺構間結合をしたもので、口唇が肥大し端部上面に細い溝が

走る。内面には使用による磨耗が認められる。

碗 染付碗とげんこつ茶碗がある。染付碗(4, 54)はともに竹あるいは籠の文様で、内面には口縁と腰に一本づつの線をめぐらせ、後者は見込みに梅花文が描かれている。47はげんこつ茶碗の高台部分であるが、削り出し輪高台で黒褐釉が高台上部と底裏にかけてある。底裏はトキン状である。墨付には印文が押してあるが何と読むのかわからない。

皿 灯明皿、おろし皿などがある。1は口径12cmの皿で腰につよい稜をもち、内面と外面腰まで薄い黄緑色の釉がかかる。5は底部片であるが削り出し高台で、底裏は厚く高台は薄い。薄い透明釉が全体にかかる。他に図示しなかったが志野系の皿があり、内面に鉄釉による文様があり、低い高台で、釉が高台まで垂れてひっつきの痕が見える。6は三ヶの印文のある皿で、器形は腰につよい稜をもつて口縁は外に開く。見込みには低い隆帯があり鉄釉がかけられている。三つの印文は左側には長楕円形で「北天下一製器」、右上に瓢箪形に「弥器」、その下に角印で「清製」の字があり印文にはゴスがぬられている。器全体には白色釉がかけられて細かい貫入が走る。灯明皿(43)は厚手で、鉄釉が粗くぬられている。素地は灰色と薄茶色のまだらになっており、重量感がある。外面は削りあとがつよく稜がつく。胎土から見て地元の窯ではないかと思われるがはっきりしない。おろし皿(60)は粗い刷毛ぬりの灰釉で、口縁部を一ヶ所押えて片口としている。おろし目は最大0.6×0.8cmである。図示できなかったものに小さな角皿があり、内面はゴスのスリ絵で格子状の枠内に四つの点で菱文を表わし、白濁した釉がかかっている。

蓋 灰釉のものと鉄釉のもの3点がある。20はつまみのつく薄緑釉のもので貫入がある。つまみは小さく、かえりが“く”の字状につく。蓋裏にはロクロ目が残る。21は平蓋で外面に薄緑茶釉がかかり、一端にひっつき痕がある。蓋内面は削り取ってロクロナデをしたため、中心は巴形をなしている。7は堀の蓋で外面に栓皮状の文様が施され、赤茶色の無光沢の釉がかかっている。中央には静止糸切り痕のついたつまみがつき、蓋内面には茶褐色の梨地の釉がかかっている。素地は赤茶色で地元産かと思われる。同類は松本市新村秋葉原遺跡<sup>ム</sup>や松本城二ノ丸御殿跡<sup>ム</sup>などより出土している。

鉢 片口、香炉、小鉢、捏鉢、摺鉢の類がある。片口(22)は丸味のつよい口唇の内弯するもので外面底近くは露胎である。釉は薄茶灰色の濁った釉で片口部分は短い。香炉は2点あるがいずれも筒形の口縁部である。23は折り返して縁部をつくり、外面および内面上部に黒褐色の濃い釉がかけている。24は口唇が外に折れて縁部をなすもので、外面と内面上部に鉄釉がかかっている。23と比較して器壁は薄く、素地も2点とも薄黄灰色であるが後者の方が白っぽい。小鉢(51)は1点あり内外鉄釉で口縁部は内側にふくらんで、上面に平坦な縁部をつくる。内外ともロクロ引き上げによる稜がある。捏鉢は3点あるが同類器形はない。53は鉄釉が内外に厚くかかり、外面一部に黒色釉が流しかけられている。つくりは良くしつかりしている。見込みには大きな粘土塊のひっつきが3ヶ所残っている。底部はやや丸味をもった巾広の高台を削り出しており、底裏もロクロ整形している。

灰釉のものは巾広の輪高台（25）とつけ高台（63）のものがある。いずれも薄黄緑色で内面に大きなトチ痕が残る。25は貫入がある。摺鉢は2点あり26は使用によって目が磨耗している。素地は薄茶色でやや柔らかい。釉は光沢のない赤茶色で薄くかかっている。他の1点は図示しなかったが堅目の焼きで口縁と摺り目との間隔が短い。

**徳利** 鉄釉と灰釉のものが1点づつある。鉄釉のもの（8）は底部のみであるが、僅かに底中央のあがる内削ぎ高台で、一旦ついた釉を回転ヘラ削りにより搔き落としている。底部脇には稜をもつ。内面にはロクロ引き上げのあとが強く残り、中心に粘土塊がこびりついている。ラッキョウ型になるものと思われる。灰釉のもの（27）は内外ともに釉を施し、頸部から胴部にかけて部分的に鉄釉で文様を描き、首には鉄釉の上に青白色の釉をかけている。口は注ぎ口をつまみ出しており、底は面取りをして丸味をもたせ、底裏は内反りのため中央に釉が残っている。全体に細かい貫入が入っている。9は白釉の胴に鉄釉で山水文を描いたもので、底は平底で腰は丸く内面にはロクロ引き上げのあとが残っている。器形は筒形に近く胴部がふくらむもので、徳利状を呈するものではないか。

**壺** 器形の異なるもの3点がある。10は行平壺で胴に桧皮状の沈線が施されており、口縁には蓋受けがつく。把手は一握りに足りない程で、55°の角度でつく。柄の上部には“寿”的文字が浮き出している。内面と把手部分には濃茶褐色の釉がかけられており、外面には煤が付着している。7の蓋と対をなすものかも知れない。28は平底のもので内面と外面腰まで青灰色の梨地の釉がかかっている。底や腰には煤が付着している。素地は赤褐色である。29も28と同様のものの口縁部であるが、やや釉に艶がある。口縁一部に粘土紐をつけて持ち上げているので、これがつまみ、あるいは釣手のかかる部分になると思われる。

**磁器** 19点を図示したが他に小破片が6点ある。器種は染付碗・皿・徳利等があるが、茶碗類が多く19C代の伊万里系、瀬戸美濃系が主である。

**染付碗** 外反するものにつる草文・寿字文・曆文（11、12、30）がある。11は内側に墨はじきにより文様がかれている。口縁の直立する茶碗には鷺と稻束文・草花文・丸文（54～56、42・57、13・58）がある。54と55、42と47は全く同類である。曆文・鷺と稻束文は松本城二の丸跡からも出土している。他に青紫色の鮫肌の碗が1点ある（15）。小振りの碗では円文に“寿”などの字や文様を描きこんだもの（58）がある。高台脇にも劍状の連文を描いてあり、丁寧な文様づけをしている。

**皿** 3種ある。31は伊万里系の草花文で、見込みに雪花文、底裏に渦福文銘がある。32は型押しの紅皿で内面と外面口縁まで白釉がかかっている。62は菊花皿で暈付以外は薄空色の釉がかかっている。花弁巾が均一で型作りかと思われる。

**向付** 八角形をなすもので木の葉と扇が描かれており、高台に矢来状の連文がつく。

**徳利** 2点ある。34は口づくりが嵩口をしたもの、35は平口のものであるが、ともに腰に茶褐色釉の上に茶緑色釉をかけている。対をなすものかと思われる。

仏器と思われるものが1点ある(16)。青紫色の濃い釉で、透し窓が何カ所かにあるが器形は不明である。

ガラス 豆ランプのホヤと思われるものが2点ある(36・37)。ともに透明度が良く、36は上部に生産時に小さな段とへこみがある。37は僅かに気泡が入っていて前者と比して器壁が厚く、下端面は磨ってあって白濁して見える。

土器・土師質土器・瓦質土器 平瓦片45点を含めて80点余りが出土したが図示したものは7点である。弥生土器の底部が1点ある(38)。厚手で粗いつくりであり、腰の一部が剝離している。

かわらけ 2点あるが1点のみを図示した(50)。ともに薄手の手づくねの皿で焼成もよい。

壺 内耳壺の口縁が1点ある(48)。口縁下がややすばまる器形で、内面にはロクロ整形による小さな稜をもつ。49は底部であるが、内面の色調は茶白色で48と似ている。ただ49の方が胎土が細かい。17は浅鉢状のものであるが、底裏は内耳壺と同じ砂目であるので壺として扱った。ロクロ整形で口縁が丸くやや内寄する。底部は剝離した部分もある。外面は黒褐色を呈し、胎土は密で重量がある。

瓦質なものに七輪がある(18)。丸型で外匣しかないが風口は丸味をもっている。内輪の接合痕からみると、径11cmの小型の火壺になる。サナ(19)もこの七輪のものかと思われる。茶白色に焼けて壊れているが、七穴となろう。

平瓦は小片のみであるが30片程ある。厚さ1.5~1.8cmと厚く、端部の切り方が鋭い。

陶磁器の产地、時期の判定には松本城二の丸御殿跡出土のものをスケールとして行った。しかし実際には不明のものが多くかなり不確定の要素がある。特に地元窯かと思われるものについては窯跡出土のものと比べてもなかなか判定しがたいものばかりで、その点今後更に究明を続けなくてはいけないと感じている。本市の発掘調査による中近世陶磁器出土遺跡は23ヶ所に及ぶが、そのほとんどは数点出土のもので遺構外のものが多い。主なものを列記すると城館址関係では松本城二の丸御殿跡、墓址関係では新村秋葉原遺跡、神戸遺跡である。本遺跡はそれに次ぐ量を出土した遺跡である。

①輸入陶磁器 松本城二の丸では青磁碗・染付皿などがあるが、白磁は島内北方遺跡、北中遺跡から出土したものに優品がある。本遺跡でも1片の出土があったのみで全体で白磁出土遺跡は4、破片合計は15点あまりでしかない。青磁になると10遺跡で出土しているが半数以上が1片程度の出土である。その点本遺跡で10片の出土は最多である。輸入陶磁器の時期については12~16Cあたりまでと巾があり、北方遺跡、北中遺跡に白磁の多いことと合せて、本遺跡で青磁の多いことの理由は判っていない。

②国産陶磁器 松本市内の出土遺跡を通観して単純に言えば16C頃には瀬戸美濃系の陶器が入っており、(常滑窯(14C)、瀬戸灰釉平碗(15C)、天目茶碗などの出土がある)18Cには瀬戸美濃系と伊

万里系が併用されてくる。それが19C以降になると瀬戸美濃系の方が主となって、幕末近くにはそれに在地系のものも加わってくる。ここでは特に在地系の製品についてふれてみたい。

松本周辺では塙尻市に洗馬焼、信斎焼、入道焼があり、松本市内に浅間焼、風也焼が、池田町に相澤寺焼などが知られているが、本遺跡から出土したもので地元産かと思われるものがあつても、それがどの窯のものか確定することができないでいる。7の蓋は10の行平鍋とセットと思われるもので、同類のものは前述のように松本城二の丸御殿跡、秋葉原遺跡でも出土している。これについては仲野泰祐氏は瀬戸美濃系のものには認められず、在地では洗馬焼、小仁熊焼（本城村西条）等に類例がみられ、近県では若狭の別所焼、埴玉の飯能焼等に類似品が認められ、特に別所焼の蓋は酷似していると記している<sup>(4)</sup>。このように僅かつつでも在地系の製品についても解明する努力が必要と痛感している。

#### 注

1. 横田賛次郎・森田牠「大宰府出土の輸入陶磁器について——型式分類と編年を中心として——」『九州歴史資料館研究論集』4 1978
  2. 松本市教育委員会「松本市新村秋葉原追跡緊急発掘調査報告書」 1983
  3. 松本市教育委員会「松本城二の丸御殿跡、発掘調査・史料公園整備」 1985
  4. 仲野泰祐「長野県出土の近世陶磁——松本城二の丸御殿跡出土陶磁資料を中心として——」『愛知県陶磁資料館研究紀要』4 1985
- 上記以外の参考文献
- 加藤康九郎編『單色陶器大辞典』済文社 1972  
九州陶磁文化館『国内出土の肥前陶磁』同前 1984  
田口昭二『美濃焼』『考古学ライブリー17』ニュー・サイエンス社 1983  
出川直樹監修『やきもの鑑定入門』新潮社 1983  
安藤裕『しなのの陶磁器』信濃毎日新聞社 1982  
得崎彰一・他『日本やきもの集成』2、3、11、12 平凡社 1982

### (3) 平安時代の土器

第1検出面で確認された、第1号・第11号住居址から出土している。

第1号住居址からは、まとまった量の出土があり、15点を図示した（第57図）。74～76が灰釉陶器、他は土師器である。器種・器形には、土師器壺DⅢ（64～69・72）・同壺B（71）・同足高高台皿形土器（70）・同壺A（73）・灰釉陶器碗（74～76）・土師器羽釜（77・78）がみられる。壺・壺類のうち、内面を黒色にしたもののは1点のみと少ない。

第11号住居址からは土器の出土量が少なく、土師器の大形の鉢形土器（79）を1点提示できたのみである。

これらの土器の時期は、第1号住居址出土のものは、土師器壺Dの小形化、羽釜の存在などからみて平安時代後半、11世紀代に想定できる。第11号住居址からのものは類例がなく不明である。

### (4) 古墳時代後期の土器

第22号住居址と建物址41から出土している。量は非常に少ない。図示できたのは、第22号住居址の壺・甕（第64図163・162）、建物址41P<sub>24</sub>の高壺脚部（第66図179）の3点のみである。

### (5) 弥生時代末～古墳時代初頭の土器

第12～21・23号住居址、溝11、土壘224・227・233・235・237、P<sub>27</sub>・P<sub>29</sub>・P<sub>30</sub>、等の造構および検出面から出土している。量は、造構数の割に多くない。器種には、高壺・小形高壺・甕・壺・鉢があり、甕を除いて、土器の外表面あるいは内外面に赤色塗彩が施されるものが多く、甕類には櫛描波状文が刻まれる。

#### 第12号住居址出土品（第58図101～105、第66図185）

高壺2点（101・103）、小形高壺1点（102）、壺2点（104・105）、を実測図で、甕1点（185）を拓影で提示した。101は中形の高壺で脚部内面を除き赤色塗彩される。大きな壺部の上半に縁をもち、そこから口縁部が強く外反して聞く外形を呈す、弥生時代後期からの典型的な器種である。102は小形高壺の脚部で、脚部内面を除き赤色塗彩され円孔が3か所に穿たれる。104は小形の壺で頸部にT字文が巡る。105は大形壺の底部で、134のような胴部下半に縁を持たない形の底部になると推定する。185の拓影は櫛描波状文をもつ甕の頸部直下の破片である。

#### 第13号住居址出土品（第58～60図106～124）

高壺3点（106～108）、鉢8点（109～116）、壺2点（117・118）、甕6点（119～124）、の19点を図化提示した。106は脚部内面以外を赤色塗彩される大形の高壺で、壺部上半の縁や脚部の三角形の大きな透かしは弥生時代後期の特徴である。108には脚内面に刷毛を用いたような部分的な赤色塗彩がある。鉢は109～111が赤色塗彩されないもの、112～116がされるもので、109は内外面のミガキも欠いている。鉢はたいていのものが逆台形の外形を呈すが、114は内湾気味の体部にやや突出する底部がつく珍しいものである。117・118は大形壺の胴部上半と底部である。117の胴部上端には間隔をおいた平行櫛描文が三段に周り、それをJ字状櫛描文が2単位一組で切っている。

甕は、櫛描波状文で飾られるもの（121）と、ヘラナデなどで仕上げられる無文のもの（119・122・123・124）があり、後者は口縁端部の受口状部分が目立つ。櫛描波状文の甕は当地方においても弥生時代後期に通有にみられる器種であるが、後者の無文受口の甕も後期前半から類例は存在する（出川南遺跡4住）。

#### 第14号住居址出土品（第60図125～128、第66図186）

高坏（125）、鉢（126）、壺（127）、甕（128）、各1点づつを実測で、壺（186）を拓影で示した。高坏は坏部内外面赤色塗彩される、坏部上半に稜をもった型の小形のもの、鉢は逆台形の型のもので赤色塗彩はない。127の壺は外面に赤色塗彩があり、下膨れの胴部外形からみて瓢壺になる可能性がある。128は無文でヘラナデで調整される型の甕である。

#### 第15号住居址出土品（第60・61図129～134）

甕3点（129～131）、小形高坏1点（132）、壺2点（133・134）を図示した。小形高坏は脚部外面以外を赤色塗彩され、4単位で円孔が穿たれる。134は大形壺で胴部上半以上を欠くが、117に示したような文様がつくと推定する。133は口径や頸部の内径が大きく、甕とみることもできるが、胴部内面を除き、ミガキ・赤色塗彩が行われることや、口縁が大きく外反することなどから壺として扱った。甕はいずれも櫛描の文様が付けられる型のものであるが、129は胴部が他の同型のものに比して球形化し、頸部も「く」の字状にくびれて、直下にとても簾状文とは見られない雑な櫛描横線文が2列に重ねられる。130にも櫛描波状文に混じって、丁度頸部の位置に簾状文を意識したと推定される横線文が描かれている。

#### 第16号住居址出土品（第62図135～142）

高坏1点（136）、鉢2点（135・140）、甕3点（137～139）、このほか甕・壺いずれか不明なもの2点（141・142）、の計8点を図示した。135の鉢は逆台形型のもので赤色塗彩はない。136の高坏は通例赤色塗彩を行わない脚内面にまで刷毛状のもので塗った痕跡がある。137の甕は、内外面にミガキが施され壺のような感をうけたが、形態がより甕に近く使用被熱の跡も明瞭だったため甕として扱った。139は小形の甕で外面は被熱剥落が著しい。

#### 第17号住居址出土品（第62図143～148）

鉢3点（143～145）、壺1点（146）、甕2点（147・148）、の6点の図示が可能であった。3点の鉢はいずれもミガキをもたない雑な作りと、内湾気味の体部に張り出す底部という類似する形態をもつ珍しいもので、外形の類例は13住114の赤色塗彩の鉢に求められる。146の壺は頸部以下のT字文が非常に雑なものになっている。

#### 第18号住居址出土品（第63図149～154）

小形高坏1点（149）、鉢1点（150）、壺1点（151）、甕3点（152～154）を図示した。150の鉢は逆台形型のもので赤色塗彩されない。151の壺は頸部以下に5条の櫛描波状文を巡らして、それを2本一組のJ字状櫛描文が縦に切り、さらにその中間には円形貼付け文が2個単位で並ぶ文様構成を

もつ。152の壺は文様を持たない型のものである。

#### 第19号住居址出土品（第63図155～160）

高环2点（156・157）、鉢2点（155・158）、壺2点（159・160）を図示した。155の鉢は158同様、逆台形型になると推定する。156・157は脚部内面を除き赤色塗彩され、157には4単位で小円孔が穿たれる。160の壺は頸部に櫛描横線文を廻しているが、簾状文になっていない。この160は炉址に埋設された炉体土器である。

#### 第20号住居址

小片が少量出土したのみで、図示できるものはない。櫛描波状文のついた壺などがみられる。

#### 第21号住居址出土品（第64図161、第66図187）

壺1点（161）を実測図で、壺を拓影（187）で提示できたのみである。壺は櫛描波状文で飾られる型のもので、文様帶の最下段のみ波状文ではなく、短い平行櫛描文が横に連ねられる。187は頸部以下にT字文をもつ壺の破片である。

#### 第23号住居址出土品（第64図164、第66図188、189）

実測図により壺1点（164）、拓影により壺2点（188・189）を提示できたにすぎない。164の壺は口縁部内外面と胴部内面をハケメで調整され、口縁端部に面をもつ、今回調査では例のない形態のものである。拓影の壺はいずれも櫛描波状文をもつ型のもので、189の頸部には簾状文もみられる。

#### 溝11出土品（第64図165～170）

高环（165）、壺（167）、小形壺（166）、壺（170）各1点と、壺あるいは壺の底部2点（168・169）を図示できた。167は頸部以下に細かい櫛描波状文があり、あるいは壺かとも思われるが胴部がかなり張るようなので壺とみた。166の小形壺はマキアゲ成形らしく各所に痕跡が残る。

#### 土壤出土品（第65図171～178）

高环2点（171：土壤224、174：土壤227）、鉢1点（177：土壤235）、壺2点（173：土壤224、176：土壤233）、壺2点（172：土壤224、178：土壤237）、器種不明1点（175：土壤227）、の計8点を図示できた。高环はいずれも脚部のみだが、171には三角形の大きな透かしが、174には小円形のものがいずれも3単位で穿たれている。173の壺は底部から大きく外開する胴部が一旦稜を作つて上方へ向かう外形をもつ型のもので、全形を復元すると器高50cmを超える大形品になると推定する。176の壺は頸部に平行櫛描文があることがわかる。175は大形の瓢壺の口頸部にあたるかとも思われたが、調整が難なのでむしろカップ状の土器になるのかもしれない。

#### ピット出土品（第66図180～183・190）

高环3点（181・182：P<sub>17</sub>、183：P<sub>18</sub>）、鉢1点（180：P<sub>17</sub>）、が実測図で、壺1点（190：P<sub>16</sub>）、が拓影で提示できただけである。182の高环は脚部内面にも赤色塗彩を行ったあとがある。

### 検出面出土品（第66図184）

第2検出面上から出土した高坏1点を図示できただけである。

#### 器種・形態・文様の特徴

壺は大小様々の大きさがあるが、大概は頸部直下、胴部最上段に文様帶をもつ。3～5段の横位の平行櫛描文または櫛描波状文を同様施文具で縦に切る、T字文の下端が「J」字状に屈曲する。このJ字状文の間に円形貼付け文をもつものがある。外形は、117・134が示すようにかなり胴が張り、口頸部は176の様に大きく外反するものが典型と考えられる。頸部はまだ明瞭な稜はなきないが、かなり「く」の字に近くなる。173の様に胴下部に稜を有して、そこから底部へ向かっていわゆる「こける」ものと、134の様にそうでないものの二者がある。

壺は前述したように櫛描波状文で飾られるものとそうでないものの二者がある。波状文は振幅が概して小さく、口頸部から胴部上半で終っているものが多い。外形は、頸部が「く」の字にくびれてくるもの（129・147・170）もみられる。底部が突出するものもある。

高坏は、坏部が大きく外開し、上半で一旦稜をもってさらに外反する外形を呈し、脚部内面を除き赤色塗彩されるものが全てである。まれに脚部内面にまで赤色に塗ってあるものがある。

鉢は、外形が逆台形を呈すものと、出土数は少ないが、内湾気味に外開する体部にやや突出する底部が付くものの二者がある。ほとんどが内外面ともミガキがかけられ、半数以上は赤色塗彩される。

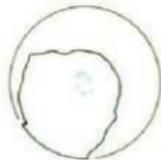
小形高坏は坏部と脚部が1個体づつ出土しているに過ぎない。しかし、弥生時代後期から当地方に存在する器種の中にも系譜の追えない外来系の土器であり、その点ではこの器種が伴う土器群の時期をある程度限定する重要なものである。132の脚部内面にみられるケズリの技法も外来的であることが指摘できる。

今回出土したこの一群の土器は、弥生時代後期に位置付けられている千曲川流域の箱清水式土器や、その影響を強く受けている当地方の同期の土器の様相を確実に持ちながらも、小形高坏等、外来系器種の混在や、壺の頸部屈曲・胴部球形化の先駆けがみられる点は、既に古墳時代的な要素を備え始めているとも言える。当地域においてはこのような時期の遺跡の調査例はほとんど無く、詳しい様相は全く不明といつても過言ではない。今後の資料の集積とその検討を待ちたい。

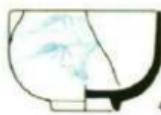
土壌 58



土壌 95

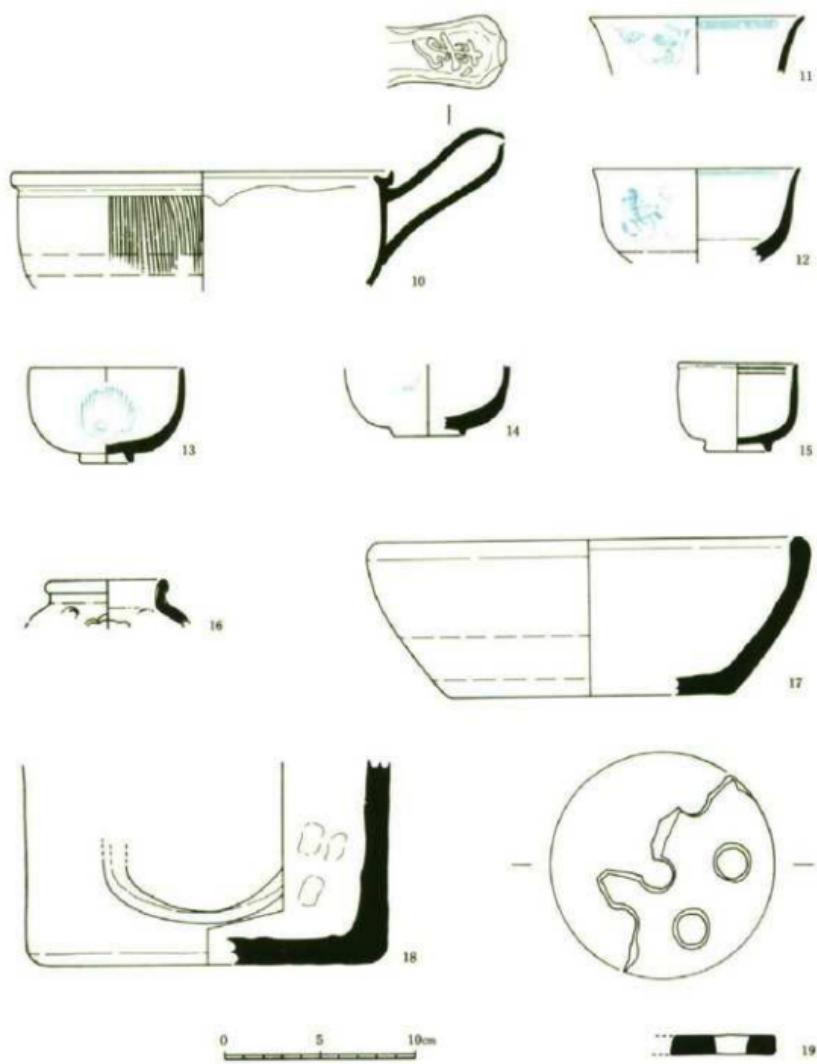


1



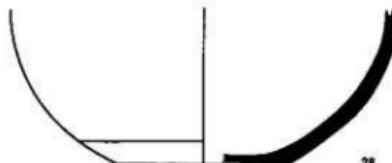
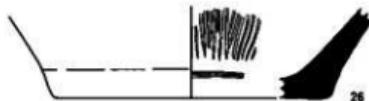
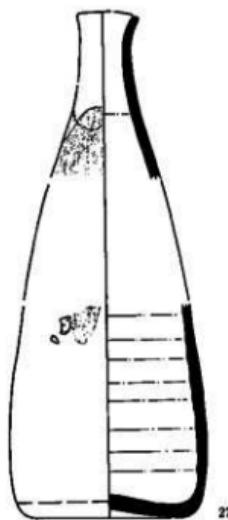
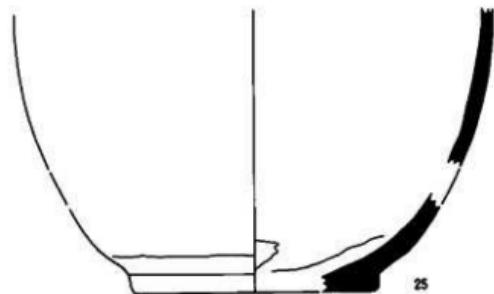
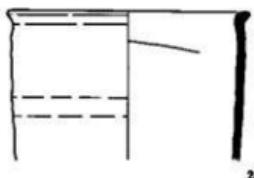
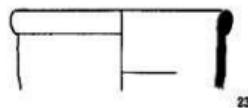
0 5 10 cm

第51図 中近世の陶磁器 (1)



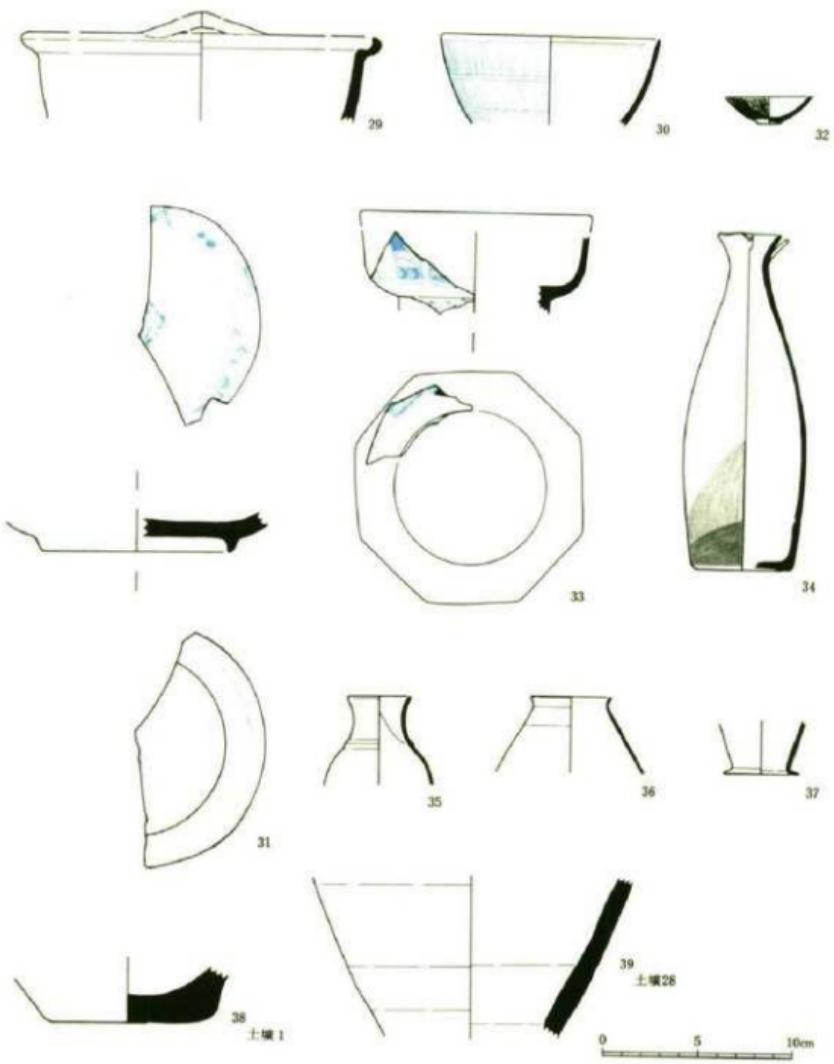
第52図 中近世の陶磁器 (2)

土器 99

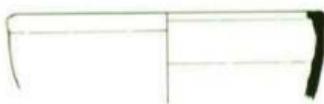
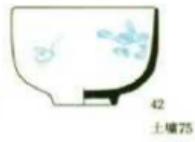


0 5 10cm

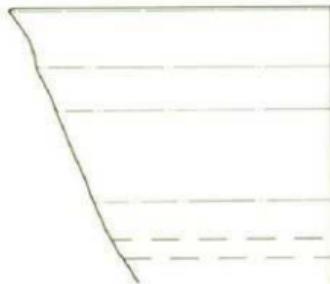
第53図 中近世の陶磁器 (3)



第54図 中近世の陶磁器 (4)



51  
土壌174



0 5 10cm

第55図 中近世の陶磁器 (5)

墓址 3



52



55



56



54



57



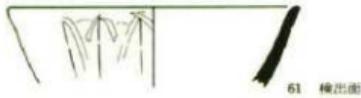
58



59 柄 1



53



61 柄出面



60 柄 12



62 柄 土



63 柄 土



第56図 中近世の陶磁器 (6)

第1号 住居址



64



65



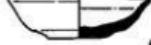
66



67



68



69



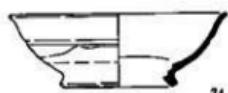
70



71



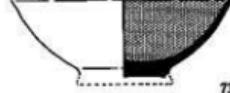
72



74



75



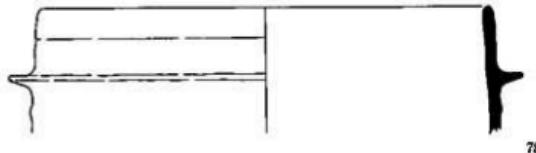
73



77



76



78

第11号 住居址

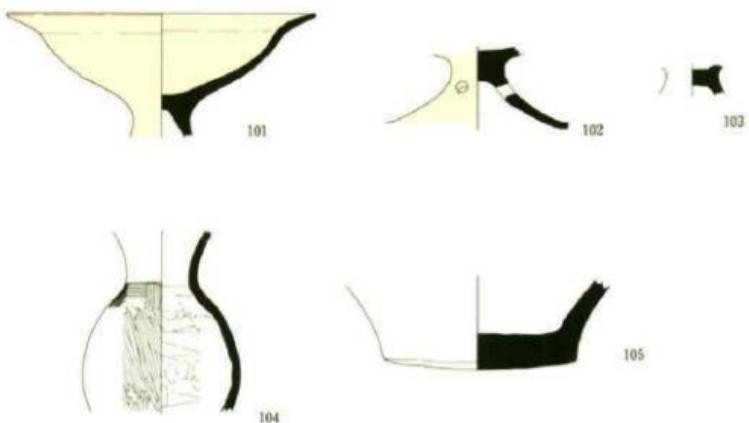


79

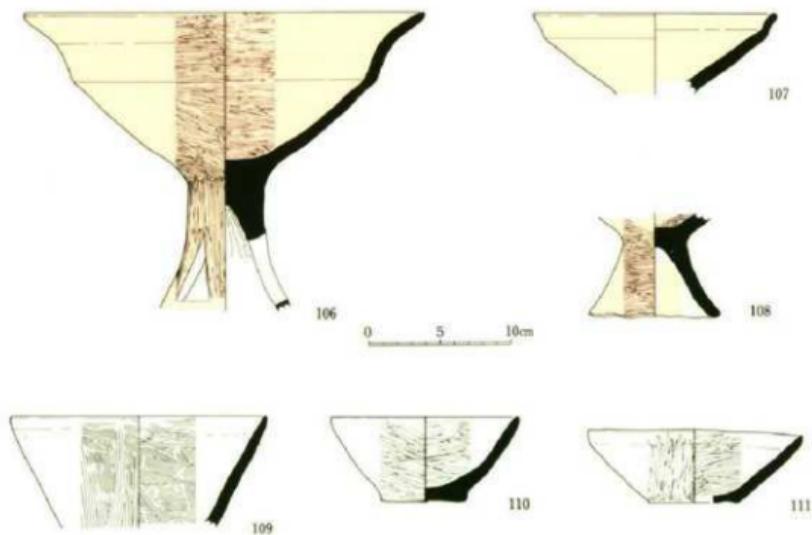
0 5 10cm

第57図 平安時代の土器

第12号 住居址



第13号 住居址



第58図 弥生時代末～古墳時代の土器 (1)



112



113



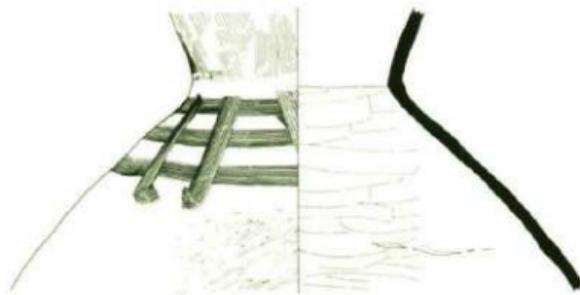
114



115



116



117



119



120



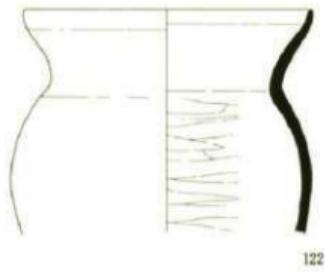
118

A scale bar ranging from 0 to 10 cm.

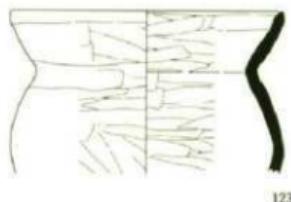


121

第59図 弓生時代末～古墳時代の土器 (2)

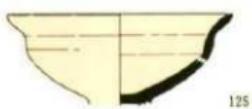


122



123

第14号 住居址



125



124



126

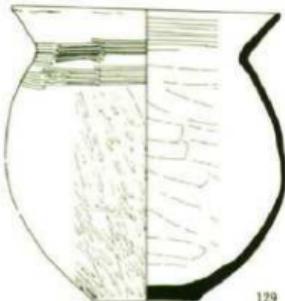


127



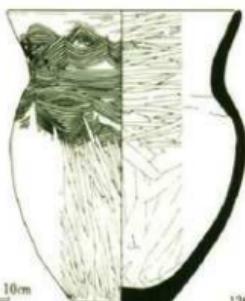
128

第15号 住居址



129

0 5 10cm

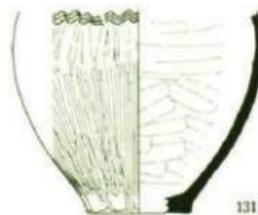


130

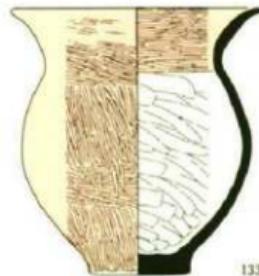
第60図 弥生時代末～古墳時代の土器 (3)



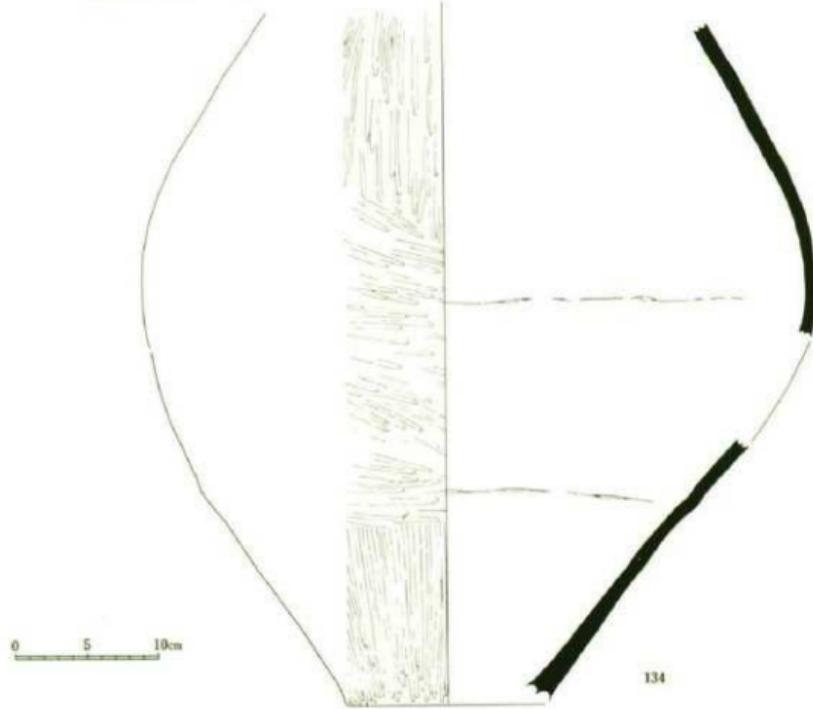
132



131



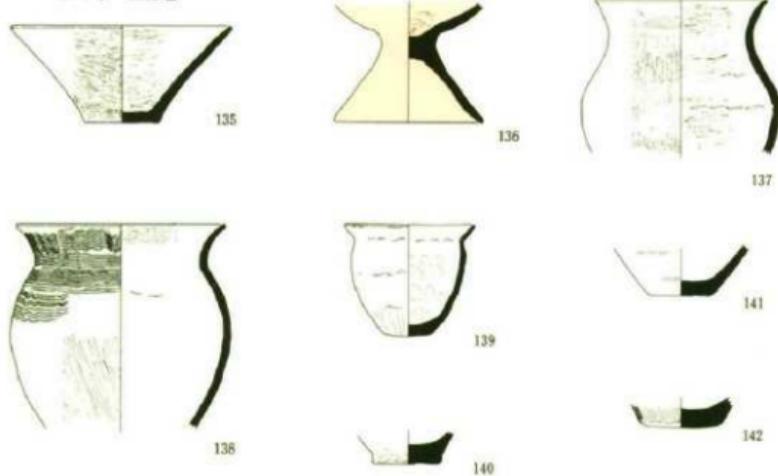
133



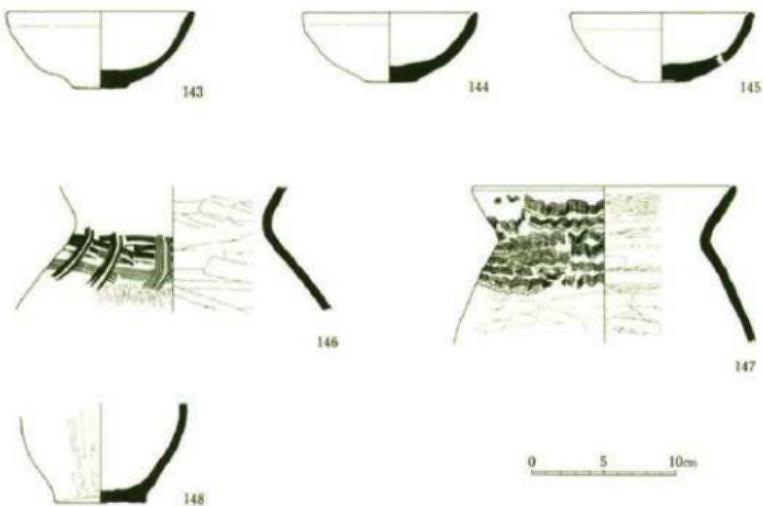
134

第61図 弓生時代末～古墳時代の土器 (4)

第16号 住居址

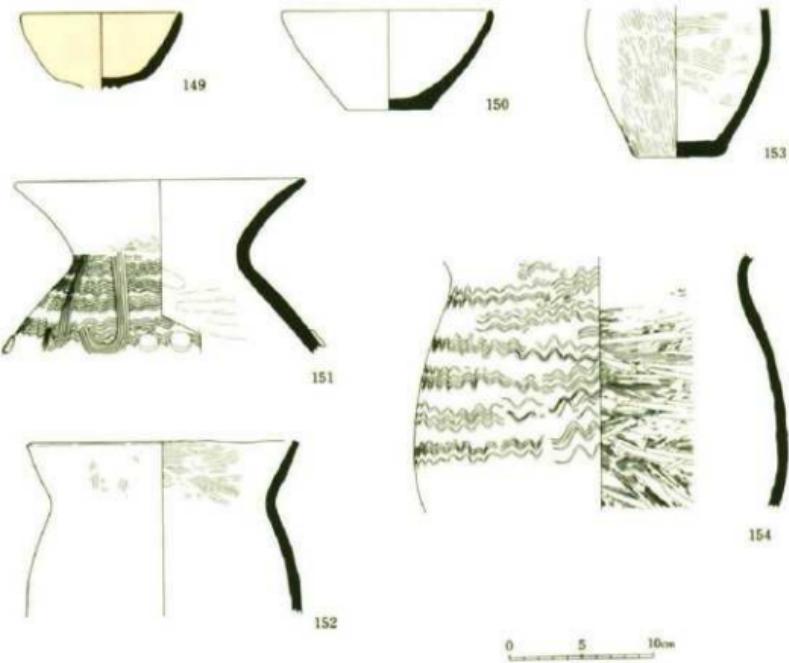


第17号 住居址

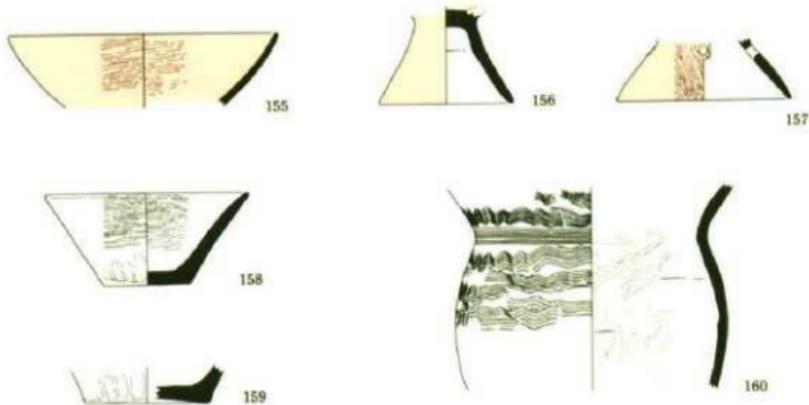


第62図 弥生時代末～古墳時代の土器 (5)

第18号 住居址

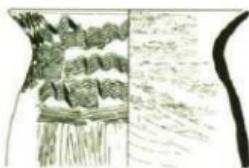


第19号 住居址



第63図 新石器時代末～古墳時代の土器 (6)

第21号 住居址



161

第22号 住居址



162

第23号 住居址



164



163

満 11



165



166



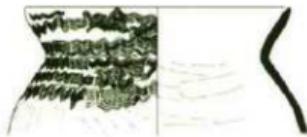
167



168



169

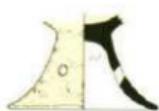


170

0 5 10cm

第64図 弥生時代末～古墳時代の土器 (7)

土器



174. 土器227



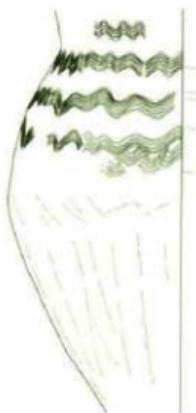
176. 土器228



171. 土器229



175. 土器230



178. 土器231



177. 土器232



172. 土器233



173. 土器234

第65図 弥生時代末～古墳時代の土器 (8)

ピット、その他



180



182



179



181



184

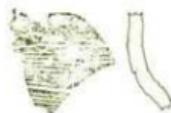


183

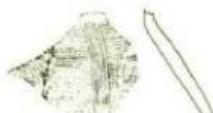
0 5 10cm



185. 12住



186. 14住



187. 21住



188. 23住



189. 23住



190. P<sub>H</sub>

第66図 弥生時代末～古墳時代の土器 (9)

表5 開磁器一覧表

No.	出土地名	種別	器形	寸法(cm)	口径	底深	高さ	備考	所蔵	产地	系統	時期	文様・施釉・色調・等地等	
1	土師窯	陶器	圓盤	(12.0)	7	口幅6cm	7	口幅6cm	廻戸美濃系	16~17C	灰釉	施白釉	产地:灰白色	
2	*	陶器	圓盤	(15.2)	22	口幅6cm	*	*	廻戸美濃系	15~16C	細文	施白釉	产地:灰白色	
3	*	陶器	圓盤	(14.0)	11	口幅6cm	*	*	廻戸美濃系	*	細文	施白釉	产地:灰白色	
4	土師窯	陶器	圓盤	(8.0)	3.6	5.2	45	片	廻戸美濃系	19C前半	施文	施白釉	产地:灰白色	
5	*	陶器	圓盤	(6.2)	13	5.5	45	片	志野野	17C後半	施文	施白釉	产地:灰白色	
6	*	陶器	圓盤	9.8	2.5	63	6%	不 <sup>明</sup>	19C	施文	施白釉	产地:灰白色		
7	*	陶器	圓盤	(16.4)	5.1	76	片	施文	19C後半	施文	施白釉	产地:灰白色		
8	*	陶器	圓盤	8.7	145	底	廻戸美濃系	19C後半	施文	施白釉	产地:灰白色			
9	*	陶器	圓盤	(13.6)	46	7.5cm	片	志野野	19C後半	施文	施白釉	产地:灰白色		
10	*	陶器	圓盤	(20.0)	129	片	志野野	片	19C後半	施文	施白釉	产地:灰白色		
11	*	陶器	圓盤	(11.3)	7	伊万里系	*	*	伊万里系	*	施文	施白釉	产地:灰白色	
12	*	陶器	圓盤	(10.6)	17	上幅6cm	*	*	伊万里系	*	施文	施白釉	产地:灰白色	
13	*	陶器	圓盤	(3.7)	22	下幅6cm	*	*	伊万里系	*	大文	施白釉	产地:灰白色	
14	*	陶器	圓盤	(3.9)	40	5%	伊万里系	19C	伊万里系	*	大文	施白釉	产地:灰白色	
15	*	陶器	圓盤	3.5	4.4	44	片	不 <sup>明</sup>	19C	伊万里系	*	大文	施白釉	产地:灰白色
16	*	陶器	圓盤	(6.3)	6	*	*	*	*	伊万里系	*	大文	施白釉	产地:灰白色
17	*	土師質土器	壺	22.2	14.8	8.1	457	片	*	*	伊万里系	*	伊万里系	产地:灰白色
18	*	土師質土器	七輪	17.6	1.0	2.1	20	片	廻戸美濃系	18~19C	施文	施白釉	产地:灰白色	
19	*	土師質土器	壺	(7.3)	1.0	11.8	1.0	110	片	*	*	伊万里系	*	
20	土師質土器	壺	壺	*	2.1	2.1	20	片	廻戸美濃系	18~19C	施文	施白釉	产地:灰白色	
21	*	土師質土器	壺	*	7.9	1.0	45	片	*	*	伊万里出	施白釉	产地:灰白色	
22	*	土師質土器	壺	(12.2)	48	56	*	*	伊万里	19C	施文	施白釉	产地:灰白色	
23	*	土師質土器	壺	(11.6)	18	6%	不 <sup>明</sup>	*	口口五瓣状	*	施文	施白釉	产地:灰白色	
24	*	土師質土器	壺	(12.6)	30	口幅6cm	*	*	伊万里	*	施文	施白釉	产地:灰白色	
25	*	土師質土器	壺	*	12.6	194	*	*	伊万里	*	施文	施白釉	产地:灰白色	
26	*	土師質土器	壺	*	14.5	92	*	*	伊万里	19C	施文	施白釉	产地:灰白色	
27	*	土師質土器	壺	(3.2)	8.0	26.5	5%	*	*	伊万里	*	施文	施白釉	产地:灰白色
28	*	土師質土器	壺	(9.1)	64	*	*	*	伊万里	*	施文	施白釉	产地:灰白色	
29	*	土師質土器	壺	(18.3)	33	*	*	*	伊万里	19C後半	大文	施白釉	产地:灰白色	
30	*	土師質土器	壺	(11.4)	48	上	片	伊万里系	18C	大文	施白釉	产地:灰白色		
31	*	土師質土器	壺	(11.0)	120	底	片	伊万里系	*	大文	施白釉	产地:灰白色		

地	出土場所	種	形	寸	法(cm)	重量(g)	性状	地・系	地・系	文様・質地・色調・実地等	
										口	底
32	土野9	圓	板	圓	5.6	1.3	1.4	5	%	織物遺跡系	縫づくり 地：白色 裁：織物白色
33	*	*	板	角付	3.7	5.0	17.4	28	%	伊万里系	八角 地の縞と文 地外縞：朱赤
34	*	*	板	利	3.4	6.0	140	34	%	織物遺跡系	面に赤と緑茶、地は白地 実地：白色
35	*	*	ガラス	ホ	+	(4.3)	6	*	*	*	33と同様
36	*	*	ガラス	ホ	+	(4.3)	6	*	*	*	透明度がよい
37	*	*	ガラス	ホ	+	(4.3)	7	*	*	*	伍文中に鉛錫が入る
38	土野1	土	板	圓	7.5	290	底 完	*	*	件 生	
39	*	28	陶	器	三絃足?	17.0	深	片	*	13-14C	瓦状状態
40	*	19	陶	器	青磁	6.5	15	片	*	12 C	織物文 地：明緋色
41	*	64	灰陶	器	青	7.5	3.2	5	*	11 C-12C	地：淡紅色
42	*	75	灰	板	角付 細	10.0	4.9	1.6	*	伊万里系	三角窓台 地：淡紅色
43	*	94	陶	器	青	15.2	12	口	*	19C後半	57と同一文
44	*	113	陶	器	青	15.2	12	口	*	19C後半	又込 地：淡青白
45	*	123	陶	器	青	13.7	12	口	*	19C後半	又込 地：淡青白
46	*	130	陶	器	青	13.7	106	底 完	*	19C後半	内面裏地
47	*	135	陶	器	青	4.5	33	底 完	*	19 C	天日地
48	*	147	土質土器	内	青	25.6	66	口	*	15 C	外腹茶褐色 内腹白色
49	*	154	陶	器	*	*	56	底	*	*	底部有孔
50	*	172	陶	器	かわらけ	(9.0)	1.1	口	*	14-15C	手づくり 地：青
51	*	174	陶	器	小	(16.5)	9	片	*	19C後半	地：茶褐色
52	*	183	陶	器	板	(8.4)	5.4	52	片	*	地：茶褐色
53	*	*	板	角付	6.5	16.5	630	底	*	*	一端縫合部：かみ
54	*	*	板	角付	7.7	3.8	5.5	91	%	伊万里系	地と縫合 文 地：淡青白
55	*	*	板	角付	7.3	3.5	5.7	48	%	*	地と縫合 文 地：淡青白
56	*	*	板	角付	9.1	5.1	5.1	26	%	*	地と縫合 文 地：淡青白
57	*	*	板	角付	(7.6)	(3.1)	4.7	19	%	*	文 又込：花文 地：淡青白
58	*	*	板	角付	6.0	2.9	4.8	32	%	*	九文（九に三並） 地：淡青白
59	號1	*	板	青	青磁	(15.2)	14	口	*	15-16C	地：淡青色
60	*	12	陶	器	かわらけ	(19.7)	38	底	*	15 C	片口地 地：淡青色
61	吉田沼	板	板	青	青磁	(15.2)	21	口	*	15-16C	織物遺跡系 地：淡青白
62	持土	*	板	青	青	(8.4)	1.9	10	河	伊万里系	白地
63	持土	*	板	青	青	(10.0)	106	底	*	19C後半	地：トナリあり 地：淡青色

表 6 弥生時代末~古墳時代土器観察表

団番号	器種	残存度	鉄色	調査	組成	調査	備考
住居址				高	胎土	外面	
				口沿	燒成	内面	
				底盤			
12	高 环	環部分	21.5	淡黄褐色	白色粒、石英粒 砂粒多混	表面焼れていて不明	
101					軽質	表面焼れていて不明	
58							
12	小形高环	脚部一部		灰	石英粒、白色微粒 赤褐色微粒	ミガキ・赤彩	
102							
58						ナゲ	
12	高 环	環部底		黄褐色	石英粒、白色微粒 小砂粒混		
103							
58						ナゲ	
12	盤	脚部、製鉢のみ		淡褐色	石英粒、小砂粒混	口唇部ヨコナゲ、腹部ミガキ→豊富丁字文(6単位)	外面下半部一部スス
104						口唇部ヨコナゲ 四オサニ→ナゲ	
58							
12	盤	底部	13.4	黄褐色	白色大粒、石、多量	表面焼れる	
105						軽質	
58						表面焼れる 一部ハケメ?	
13	高 环	口縁部分	27.7	黄褐色~赤褐色	石英微粒、小砂粒混	入念なミガキ・赤彩 透し側面刷毛状のもので赤彩	
106							
58						今や堅穂	
13	高 环?	环部分	16.5	淡褐色	石英粒、白色微粒 少量混	ヨコナゲ→入念なミガキ・赤彩	
107						ヨコナゲ→入念なミガキ・赤彩	
58							
13	高 环	脚部のみ		灰	石英粒、白色微粒 粒多混	ミガキ・赤彩	脚を回転部分から欠いて使用か?
108						やや堅穂	
58						ヘラナゲ刷毛状のもので赤彩	
13	鉢	口縁部分	17.7	灰	難砂粒、小石少量混	細かい粒のハケメ→粗い粒のハケメ→口唇ヨコナゲ	
109						やや 堅穂	
58						ヘラナゲ刷毛状のもので赤彩	
13	鉢	口縁部分 底部充	5.9 13.0 5.8	黄褐色	小砂粒、石英粒多混	口唇ヨコナゲ→横のミガキ 赤面ナゲ	外面一部凹起
110						口唇ヨコナゲ→横のミガキ	
58							
13	鉢	口縁部分 底部充	5.0 14.7 6.1	黄褐色~黒褐色	白色微粒、石英粒多混	口唇ヨコナゲ→横のミガキ→底部ナゲ	追記ほしい
111						口唇ヨコナゲ	
58							
13	鉢	口縁部分 底部充	4.7 9.8 3.6	灰	白色微粒、赤褐色 粒、小石混	口唇ヨコナゲ→横のミガキ・赤彩 赤面ケズリ・赤彩	
112						口唇ヨコナゲ→横のミガキ	
58						口唇ヨコナゲ→横のミガキ・赤彩	
13	鉢	口縁部分	5.7 15.0 5.3	黄褐色~黑色	白色粒、小石粒、 石英粒多混	横のミガキ・赤彩	
113							
58						横のミガキ・赤彩 赤面焼れる	

国番号	器種	残存度	法量	色調	胎土・焼成	調質	備考
住居址	土器			高	胎土	外面	
土器					口絵		
土器					底絵	内面	
13	鉢	口縁火	4.8	黄	石英粒、白色粒、半褐色微粒混	入念な模のミガキ・赤影	
114			12.0				
59			3.4			入念な模のミガキ・赤影	
13	鉢	底部火		黄	石英粒、小砂粒、小石漠	全面ミガキ・底面以外赤影	
115							
58			4.4			ミガキ・赤影	
13	鉢	口縁火 底部火	7.0	黄	石英粒、白色微粒 小砂粒多混	入念な模のミガキ・赤影 底部ケズリ	
116			15.8				
59			5.3			入念な模のミガキ・赤影 基面荒れる	
13	甕	口縁火 底部火		黄	石英粒、小砂粒、小石漠	頭部以上縦のハケメ 脚上端ナゲ→平行巻添文→J字状巻添文 文様帯以下斜のミガキ	
117							
59						横のヘラナゲ	
13	甕	底部火		黄	石英粒、小砂粒、小石漠	頭部以上縦のハケメ 脚上端ナゲ→平行巻添文→J字状巻添文 文様帯以下斜のミガキ	
118							
59						横のヘラナゲ	
13	甕	口縁火		黄	石英粒、白色粒、砂粒混	基面荒れて不明	
119							
59						基面荒れて不明	
13	甕	口縁火	15	黄	白色粒、石英粒、砂粒混	口縁部ヨコナゲ 脚部ヘラナゲ	外面薄く黒皮
119							
59						やや軟質 口唇部ヨコナゲ 脚部ヘラナゲ	
13	小形甕 (甕)	底部火		黄	石英粒、白色粒、砂粒混	頭オサエ ナゲ	内面半分に黒斑
120			4.1				
59						ナゲ	
13	甕	口縁火	22.0	黄	石英粒、白色粒多混	口縁部ヨコナゲ、脚部ヘラナゲ→堆積液状文、基面崩壊	内面裏熱のためか 苦しく崩壊
121			18.4				
59			7.5			脚質 口縁部ヨコナゲ、脚部ヘラナゲ 基面崩壊	
13	甕	口縁火	19.8	黄	石英粒、赤褐色粒 白色粒小石漠	基面荒れて不明 口唇部ヨコナゲ	外表面裏熱スス付着
122							
59						脚質 ヘラナゲ 口唇部ヨコナゲ	
13	甕	口縁火	18.7	黄	石英粒、小石漠	口唇ヨコナゲ ヘラナゲ	外表面裏熱剥離一部崩壊
123							
60						脚質 ヘラナゲ→口唇ヨコナゲ	
13	甕	口縁火	22.3	黄	石英粒、白色粒多混	横の太いハケメ→口縁部ヨコナゲ	外表面スス付着
124							
60						口縁部横の太いハケメ→脚部ヘラナゲ・口唇部ヨコナゲ	
14	高环	口縁火		黄	石英粒、赤褐色粒 白色粒多混	基面荒れて赤影剥離	
125			15.4				
60						ミガキ・赤影	
14	鉢	口縁火 底部火	5.2	黄	石英粒、小砂粒多混	ハケメ→口縁部ヨコナゲ→横の細なミガキ	
126			13.8				
60			5.7			壁 砂 ハケメ→口縁部ヨコナゲ→横なミガキ	

回収年	器種	残存度	法量	色調	胎土・焼成	異常	備考
往復式 土器 皿					胎土	外面	
					燒成	内面	
14	壺	脚部片		白色陶粒多混 内面：黒	白色陶粒多混 下半ハケメー上半ナダ	ミガキ・赤彩 器面変形で落削	
127							
60						下半ハケメー上半ナダ	
14	甕	口縁片	16.6	赤	石英粒、小砂、小 石粒混めて多混	ヘラナダ	
128						ヘラナダ	
60							
15	甕	底部充形	20.3	相 面	石英、砂粒、小石 きわめて多混	器面変形で詳細不明 脱墨ミガキ平行擦挫文（幾状文と いう程のものではない）	外面：被熱剥離変 内面：底部混變
129			18.7			口縁端のハケメー脚部底のヘラナダー上半底ミガキ	
60			7.4				
15	甕	充形	20.2	黄	石英、長石大粒多 混、青雲邊	ハケメー脚部ヨコナダー複数文一様擦挫文状（擦挫文は 右回り）→脚部底のミガキ	外表面熱一部剥離 底邊もあり
130			15.9				
60			6.3			ハケメー脚部ヨコナダー脚部ヘラナダー縁のミガキ	
15	甕	底部片		赤 外面：赤斑 内面：淡黃斑	石英粒、赤褐色粒 小石粒	ヘラナダー縁のミガキ平行擦挫文状	外表面熱一部剥離 底邊もあり
131						ヘラナダ	
61					7.4	縁のミガキに近いヘラナダ・ナダ	
15	小形窓環 脚部片		19.5	赤褐色～黃褐色	赤褐色粒、石英粒 砂粒混	窓環ヨコナダー人字な縁のミガキ・赤彩	一部因変
132							
61					7.4	縁 細 ケズリ→窓環ヨコナダー縁のミガキ	
15	甕	充形	18.5	相 面	石英粒、砂粒、小 石多混	全面ミガキ・赤彩	外表面下半被熱 器面剥離 内面下半因変
133							
61					7.1	口縁ミガキ・赤彩 脚部下半ヘラナダ・上半ヘラナダーナダ	
15	甕	脚部片		黄	石英粒、赤褐色粒 砂粒混	ヘラナダ・粗な縁のミガキ	二次焼成により外表面 各所に斑斑
134						ヘラナダ	
61					14		
16	甕	底部充形	6.7 15.4 5.2	周	石英粒、小砂粒混	ハケメー口縁ヨコナダー全面ミガキ	
135							
62					5.2	全面ミガキ	
16	高耳 (高台片)		10	相 面	白色粒、石英粒、 砂粒多混	器面変形で赤彩剥離	
136							
62					10	器面変形 赤彩剥離	
16	甕	口縁片	11.7	赤	石英粒、砂粒多混	縁のハケメー縫合ヨコナダー縁のミガキ	外表面下半被熱一部 剥離因変 内面下半一部因変
137							
62					11.7	ハケメー口縁縫合ヨコナダー縁のミガキ	
16	甕	口縁片	14.5	黄	石英粒、白色粒、 砂粒多混	口縁部ヨコナダー口縫合部擦挫文（右回り、新絶縁部、 上から下）脚部縫合のミガキ	外表面被熱剝離因変、 スス
138							
62					14.5	やや軟質	
16	小形甕 底部充形		7.7 9.2 3.5	底	石英粒、砂粒され て多混	口縫合ヨコナダー口縫合部のミガキ 脚部ヘラナダ・ナダ	外表面被熱剝離
139							
62					3.5	やや軟質 指オサエ ナダ	

番号	基 標	残 存 度	地 色	調	胎 土・焼 成	調 整	備 考
住居址	高 口徑 底	暴高 口徑 底	石英粒、白色粒 底	灰 陶	胎 土	外 面	
土 器					燒 成	内 面	
器							
16	鉢	底部充形	5.0	灰 陶	石英粒、白色粒 底	ナデ・指オサエ・底面ミガキ	
140						ミガキ	
52							
16	盃	底部充形	4.5	白 陶	白色小粒底 底	ハケメークゼリ	内面積压痕
141						ナデ・ヘラナデ	
52							
16	甕もしく は壺	底部充形	6.0	黄 陶	石英粒、白色粒、 赤褐色粒多底	ハケメ・底面磨滅	外面にスス
142						ナデ・板ナデ	
52							
17	鉢	口縁拘 底部充形	5.3 12.1 4.0	灰 陶	白色微粒、石英粒 底	ナデ・指オサエ→口唇ヨコナデ・面取り	外面一部と内面大半 底
143						ナデ・指オサエ→口唇ヨコナデ	
52							
17	鉢	口縁わざか 底部充形	4.9 12.2 3.6	灰 陶	白色微粒、石英粒 粒、砂粒底	ナデ・指オサエ→口唇ヨコナデ	縫を作り
144						ナデ・指オサエ→口唇ヨコナデ	
52							
17	鉢	口縁拘 底部分	12.8 3.8	灰 黄 茶 陶	白色粒、小石多底 底	雜なナデ→口縁ヨコナデ・面取り、底部ケメリ	縫を作り
145						口縁ヨコナデ→ナデ	
52							
17	盃	底部充形	石英、白色磨粒、 小石多底	白 陶	ハケメ→底のミガキ→平行擦痕文→J字状擦痕文	口縁部外面にスス	
146							
52							
17	甕	口縁拘	18.5 内面: 壁表面 内面: 壁表面	外面: 壁表面 内面: 壁表面	赤褐色大粒、白色 粒、石英粒多底	口縁ヨコナデ→底部以下部のナデ→右回りの擦痕波状文 →文様帯以下部のヘラナデ	外面に黒斑、炭化物 付着
147						口縁ヨコナデ→ハケメ→横ヘラナデ→口縁部後のミガキ	
52							
18	甕	底部充形	6.2	外面: 壁表面 内面: 壁表面 一端表面	石英粒、小石粒多 底	底部部の雜なミガキ・底面ナデ・底に上げ底	外面全体的に黒斑
148						ナデ	
52							
18	小形高杯	口縁拘	11.3	黄 灰	石英粒、小砂粒、 小石多底	ミガキ・赤彩・器面覗れる	
149						ミガキ・赤彩・器面覗れる	
52							
18	鉢	口縁拘 底部充形	6.7 14.8 5.8	灰 陶	石英微粒、無砂粒 赤褐色粒底	口唇ヨコナデ→横のミガキ・底部ナデ	
150						口縁ヨコナデ→横のミガキ	
52							
18	盃	口縁拘	20.4	黄 灰	石英、白色粒多 底	器面覗れて不明、擦痕波状文(5段)→J字状擦痕文→円形 貼付文	
151						器面のヘラナデ	
52							
18	甕	口縁拘	18.5	外面: 黄 内面: 壁表面	石英粒、小砂粒多 底	口縁部僅かに壁のハケメ・口唇面取り・器面覗れて詳細不 明	外面被覆剥落、スス 付着
152						口縁部のハケメ→口唇面取り	
52							

回数	器種	残存度	法身	色	調	地土・焼成	調	質	参考
住居址 土器 窓						地土	外	質	
						燒成	内	質	
18	甕	底部完形	5.6	外面：茶褐色 内面：褐～茶褐色	石英粒、赤褐色粒 白色粒多混	細いミガキ	表面ナゲ	表面荒れる	外面被熱温変
153									
63									
18	甕	側部外	18.7	外面：白 内面：黄(黄褐色)	石英粒、白色粒混 多混	ハケメ→上半部擦痕状文・下半部の細いミガキ			外面被熱
154									
63									
19	鉢	口縁外	18.7	赤(黄褐色)	白色微粒、石英粒 多混	ミガキ・赤彩	表面荒れる		
155									
63									
19	高 环	底 部	9.4	黄 褐色	石英粒、白色粒、 小石多混 軟質	ミガキ・赤彩	表面荒れて擦剥		
156									
63									
19	高 环	底 部外	12.4	赤 内面：黄(黄褐色)	石英粒、白色粒 多混	ミガキ・赤彩			
157									
63									
19	鉢	口縁外 底部完形	6.4 14.2 6.0	黄 褐色	石英粒、砂性多混 ナゲ	ナゲ・下半部のナゲのミガキ			外面一部温変
158									
63									
19	甕	底部外	8.6	外面：白 内面：黄(黄褐色)	石英粒、白色粒、 赤褐色粒多混 軟質	ナゲ			
159									
63									
19	壺 体	側部外	15.0	黄 褐色	石英粒、白色微粒 小石多混 やや堅	表面荒れて詳細不明・網状のミガキのヘラナゲ→網目上半部 擦痕状文→網目平行擦痕文→側部擦痕状文(右側)			外面被熱剥剝、下半 部黒化、内面下半部 荒れ
160									
63									
21	甕	口縁ばかり形	15.0	黄 褐色	石英粒、白色微粒 小砂粒多混 やや堅	ヘラナゲ→口縁ヨコナゲ→下半部のミガキ→擦痕状文 (右回り)、断続擦算、上から下へ→網目上部の細な網状文 ナゲ・ヘラナゲ→口縁ヨコナゲ→網目ミガキ(削削にあたってない)			外面広範に黒化、ス ズ付着
161									
64									
22	甕	口縁外 底部完形	14.1 13.8 11.0	黄褐色 黄褐色	微砂、白色微粒 じるが微密 堅	微砂、白色微粒 じるが微密 口縁部ヨコナゲ→ミガキ	表面やや荒れる		外面一部に黒化 古墳時代後期
162									
64									
22	環	口縁外	15.5	赤 褐色	白色微粒、石英粒 且、微密 堅	口縁ヨコナゲ→体部下半ケズリ→ミガキ			古墳時代後期
163									
64									
23	甕	口縁外	16.0	暗 褐色	白色微粒、赤褐色 石英粒多混 堅	網状のミガキ→口縫部斜のミガキ→口縫取りヨコナゲ			
164									
64									
課11	高 环	接合部のみ		赤 褐色	石英粒、白色粒多 混 堅	口縫部内面横のミガキ	網目ナゲ		
165									
64									

固番号	器種	残存度	地質	色	調	胎土・焼成	測量	備考
住居址								
							胎 土	外 面
							燒 成	内 面
調11	小形壺	口縁光 底部充		6.1	法 質 面	石英粒、白色粒混 砂粒多混	ナデ、指オサエ	
166				4.1				
64				2.2			ナデ、指オサエ	
調11	壺	口縁光			法 質 面	石英粒、白色粒、 砂粒多混	器面荒れて詳細不明 口縁部ヨコナデ 腹部横筋波状文 ナデ、指オサエ	外蓋一部薄く黒変 一部にスヌ
167				14.5				
64							ナデ、指オサエ	
調11	壺?	底部充			法 質 面	石英微粒、白色粒 粒、小砂粒多混	ナデ、指なミガキ ナデ	外蓋全般的に薄く黒 変
168							ナデ、指なミガキ	
64				5.1			ナデ	
調11	要もしく は壺	底部充			質 面	白色粒、石英粒多 混	ケズリ様のヘラナデ 壱面ケズリ ナデ ヘラナデ	内面黒変
169				4.8				
64							ナデ ヘラナデ	
調11	壺	口縁光			法 質 面	石英粒、赤褐色粒 小石多混	口縁部ヨコナデ、腹部縦のミガキ縫へラナデ→横筋波状文 (右回り、上から下)	外蓋下半部黒 内蓋一部黒変
170				18.5				
64							ナデ、指なミガキ	
土壤224	高 环	脚部のみ			脚 面	石英粒、白色微粒 粒	口縁部ヨコナデ、因縫へラナデ→口縁部縦のミガキ 内面平滑	
171								
65							ナデ	
土壤224	壺	底部充			脚 面	石英粒、赤褐色粒 砂粒多混	縫のミガキ縫へラナデ 壱面ケズリ 内面へラナデ	外蓋全般的に黒変
172								
65				6.8			ナデ	
土壤224	壺	底部充			脚 面	石英粒、白色粒多 混	ハケメ、下手・底面荒れて不明	
173							ナデ	
65				15.5			ハケメ ハケメ→ナデ	
土壤227	高 环	脚部のみ			脚 面	石英粒、白色微粒 多混	地部ヨクナデ→脚部縦のミガキ・赤影 环部ミガキ・赤影 縫部ヨコナデ 一部小窓状に赤影あり	脚部一部に黒変
174								
65				10.5			ナデ	
土壤227	?	口縁光			脚 面	石英粒、白色粒、 小石少量混	口縫部ヨクナデ→ヘラナデ。指なミガキ 直かにハケメ→ナデ	内外蓋黒変
175				9.0				
65							ナデ	
土壤233	壺?	口縁光			脚 面	白色粒きわめて多 量混	口縫ヨコナデ→口縫部ヘラナデ→縫のハケメ→平行筋波状文 部分的に底元尖端底?	
176				21.0				
65							底面荒れて不明	
土壤235	脚?	底部充			脚 面	石英粒、白色粒多 混	ヘラミガキ、底面ナデ 赤影と焼き赤影 ヘラミガキ・赤影	
177								
65				4.9			ナデ	
土壤237	壺?	脚部光			脚 面	石英粒、赤褐色微 粒、白色粒混	縫方向のケズリ縫へラナデ→縫筋波状文 (右回り、下から 上)	外蓋上面にスヌ
178								
65							上半へラナデ、下半縫のケズリ縫のヘラナデ	

出土地	器種	残存度	法量	色調	胎土・焼成	測定	備考
住居跡			器高		胎 土	外 面	
土 壁			口径				
壁			底径		燒 成	内 面	
P41							
179	高 环	脚部外		黄 色	白色粒、小石多見 青母少品	縫のミガキ	P41
66				脚部内品色		脚部ヘラミガキ・黒色処理 脚部ヘラナダ	
P42							
180	鉢	口縁外	17.4	淡 黄 色	石英粒、白色粒、 小石混入	口唇部ヨコナダ→縫のミガキ	
66						口唇部ヨコナダ→縫のミガキ	
P43							
181	高 环	口縁外	19.2	赤 色	白色微粒混 雜して精選	口唇ヨコナダ→ミガキ・赤彩	口唇部一様スズ
66				縫	堅 硬	口縁ヨコナダ・内側に縫ミガキ・赤彩	
P44							
182	高 环	脚部上半		赤 色	白色微粒少量混 精選	縫の入念なミガキ	
66				縫	堅 硬	縫部ヨコナダ?→ナダ しばり痕?	
P45							
183	高 环	脚部外		黄 色	石英粒、砂粒混入	ミガキ・赤彩 墓部粗面	
66			17.7	淡 黄 色	軟 質	ナダ	
後							
184	高 环	脚部上半		淡 黄 色	石英粒、砂粒多見	縫のミガキ	
66						ヘラナダ	

表7 平安時代土器観察表

No.	出土 地點	種 別	形	寸 法(cm)		残存度 口 径 底径 器高 (底部)	色 調	成 形・調 整・形 態 の 特 性	備 考	実測 No.
				口径	底径					
64	1住	土 師 器	环D口	10.6	4.9	2	完	淡 黄 色	淡 黄 色	
65	1住	土 師 器	环D口	10.5	5.4	1.8	劣	淡 黄 色	淡 黄 色	
66	1住	土 師 器	环D口	9.6	3.8	1.9	劣	淡 黄 色	淡 黄 色	
67	1住	土 師 器	环D口	10.7	5.6	1.8	劣	淡 黄 色	淡 黄 色	
68	1住	土 師 器	环D口	9.0	4.6	2.4	劣	茶 色	高台~底面	
69	1住	土 師 器	环D口	10.0	4.4	2.8	劣	茶 色	茶 色	
70	1住	土 師 器	蓝	10.8	5.9	2.7	劣	淡 黄 色	淡 黄 色	
71	1住	土 師 器	横 B	9.8	5.6	3.2	劣	茶 色~黑	茶 色	
72	1住	土 師 器	环D口	10.1	5.8	2.9	劣	淡 黄 色	淡 黄 色	
73	1住	土 師 器	横 A	15.5			劣	淡 黄 色		
74	1住	灰釉陶器	筒	15.2	7.5	5.1	劣	淡 黄 色	透 明	
75	1住	灰釉陶器	筒	15.0			灰 白	淡 绿		
76	1住	灰釉陶器	筒		5.6	(5.6)	灰 白	透 明		
77	1住	土 師 器	筒 形	18.9			筒 形	基部~粘接	ヨコナダ、内面ハケメ	
78	1住	土 師 器	筒 形	31.2			筒 形	茶 色	ナダ、ヨコナダ	
79	11住	土 師 器	钵 形		11.2	(11.2)	略带茶色	茶 色	ロクロナダ、底面凹部あ切り	

## 2. 金属器・銭 (第67~71図)

### (1) 金属器

鉄製品は本遺跡全域より検出されたが、上層遺構面のものがほとんどである。したがって所属する時期は一部に古墳時代初頭のものがあるほかは中世が中心である。器種は圧倒的に釘類が多く34%、棒状あるいは楔状のもの20%、刀子の類が11%で、これらで全体の $\frac{2}{3}$ を占めている。ほかに銅製品として4点がある。

釘は丸釘・角釘・やや太いもの等に分けられるが、形の整ったものはごく少ない。丸釘のうち45は代表的なもので太く短く、頭は片折状で丸い。この45~52までは土壇135一括出土のものである。角釘では1・16が代表的である。1は先端が細く角ばっており、中間の断面は丸みをもっている。頭部は丸いままである。16は断面が中空でやや丸みをもっている。先端は細く尖る。このほか7・8・30・32・48等が角ばった断面をしている。13は断面下部に径2mmあまりの芯鉄が残っている。やや太いものとしては24・29・31等がある。これらは何れも断面が丸い。この他曲がった釘(25・27)がある。25は先端欠損、27は頭部は平らで先端は細く尖りほぼ直角に曲がっている。火にかかった形跡がある。

釘より太いものを棒状あるいは楔状のものとしてとりあげた。特に22・44は15cmと長く、太さも最大2cmと太い。18の断面は中空であり、中には鉄芯が薄い輪状になっている。63は第16号住居址出土のもので、この住居址は古墳時代初期と見ているので、この鉄器も同時期のものと考えている。形態から見ると中世のものと変わりがない。用途は不明である。この他はほとんどが5cm以内の短い断片である。楔状のものが1点ある。61は断面形がやや扁平で先端は尖っている。21は下端が断面中空の円形をしており、上部は勾配のついた三角状をしたものである。上端に刃があれば鑿としての機能も考えられるものである。他に鎌状のものが2点ある。特に10は直角に曲げてあり、曲がった先端は細くなっている。断面形は四角らしい。

刀子と思われるものは9点ある。4はほぼ完形で21cmと大きい。鋸化がつよく刀部と茎部との境がはっきりしない。5片に分かれていたため断面の観察が容易だったが、芯鉄は何回も滲炭鍛造した層をなしており、背側の芯は軟度が違うためか他のようにボッキリとは折れず、さきくれた状態で折れている。切先は丸く見えるが、これも鍛が強く完全ではない。茎は急に細く、先端も尖っていたものであろう。他の刀子は幅1.5cm内外の小形のものである。5は前後を欠いているがほぼ全体のわかるものである。刃に厚みがあつて断面形が横円形を示している。39の断面には0.4×1.3cmの先細の長方形で芯鉄が見える。59は鍛でよくわからないが、端部近くに鉄の塊が鈎状についている。

鎌が1点ある。(12) 地が薄く幅広で茎が厚い。刃先の摩耗も少なくほぼ一直線になっている。折り返しのないところから鎌と云うより、土井義夫氏の云う包丁形鉄製品とよく似ている。①

器種不明鉄器のうち5点をとりあげる。62は第12号住居址出土のものである。この住居址は古

墳時代初期とみられており、この鉄器も同時期と思われる。形状はあたかも二本の鉄棒を縛りつけた状況を示し、中央に縦に長くヒビが入っている。ただ縛りつけたかと思われる部分は鏽の塊になっており不明である。形態・重量からして何らかの利器として利用されたものとおもわれるが、用途も不明である。11は三角形をしており長辺は直線である。山形の火打金具とも見えるが決め手はない。40はやや薄手で湾曲するもの、54は鍋状のものの口縁部の一部とも見えるが、小破片のためよくわからない。環状をしたものもある。(26) 鎖様に環が二個つながった状態に見えるが、鏽が強くてよくわからない。9は座金状のもので径 2.1cm の円形の薄板に 9mm の穴が開いており、更に 2mm の小穴が 1 個開いている。近代のものではないか。

銅製品は 4 点ある。14はキセルで火皿は比較的大きく、脂返しも湾曲しているが、羅字の入っている部分で僅かに腐が張る。吹口は破損が大きく、その長さは判らないが、雁首と対をなすものと考えればかなり長いものとなろう。羅字は 3.5cm 残っており 2.3cm が雁首内に残っている。53は銅線を用いて環状をなすもので、一端は環の上で二回直角に曲がって段をなしている。用途については不明である。他に図示しなかったが、太さ 0.8mm 長さ 3 ~ 5cm あまりの銅線が 4 本ある。

仏像の出土もみた。(15) 身の丈 3.5cm、幅 1.2cm、厚み 0.7cm、重さ 4.7g の小さな鋳造による観音像で、頭部より右肩にかけて欠失している。左手は胸に、右手は下げているようである。不鮮明ながら髪や裾の線が見え、頭には宝冠を着けている。この種の小形仏像の出土例は松本市神戸遺跡<sup>(1)</sup>や松本市神林水代にある。<sup>(2)</sup> ともに墓、寺などと関わりがあり、念持仏として用いられていたものではないかと思われる<sup>(3)</sup>。

## 達

- (1) 土井義夫「鉄製農工具研究ノート」(『どろめん』10、1976)において包丁形鉄製品(鍔跡)として扱っているものと返しのない点。茎が太くなる点など形状がよく似ている。
- (2) 法量は高さ 5cm、座高 4cm、身の横幅が約 1.4cm、奥行 1cm の延命地蔵の立像で鋳造により作られている。大久保知巳他『松本市善賀神戸遺跡緊急発掘報告書』(1981)によれば大久保氏は墓地脇の庵に祀られていたものではないかとしている。
- (3) 郡土誌「かんばやし」刊行委員会「かんばやし」(1986)によれば松本市新村専修寺の創建の地(松本市神林水代字舟塚)の北側から 3.5m の観音像出土の記録がある。この仏像は個人宅で祀られている。(1987.6 実見) 後に神林水代と善賀大久保工場園地より出土している。

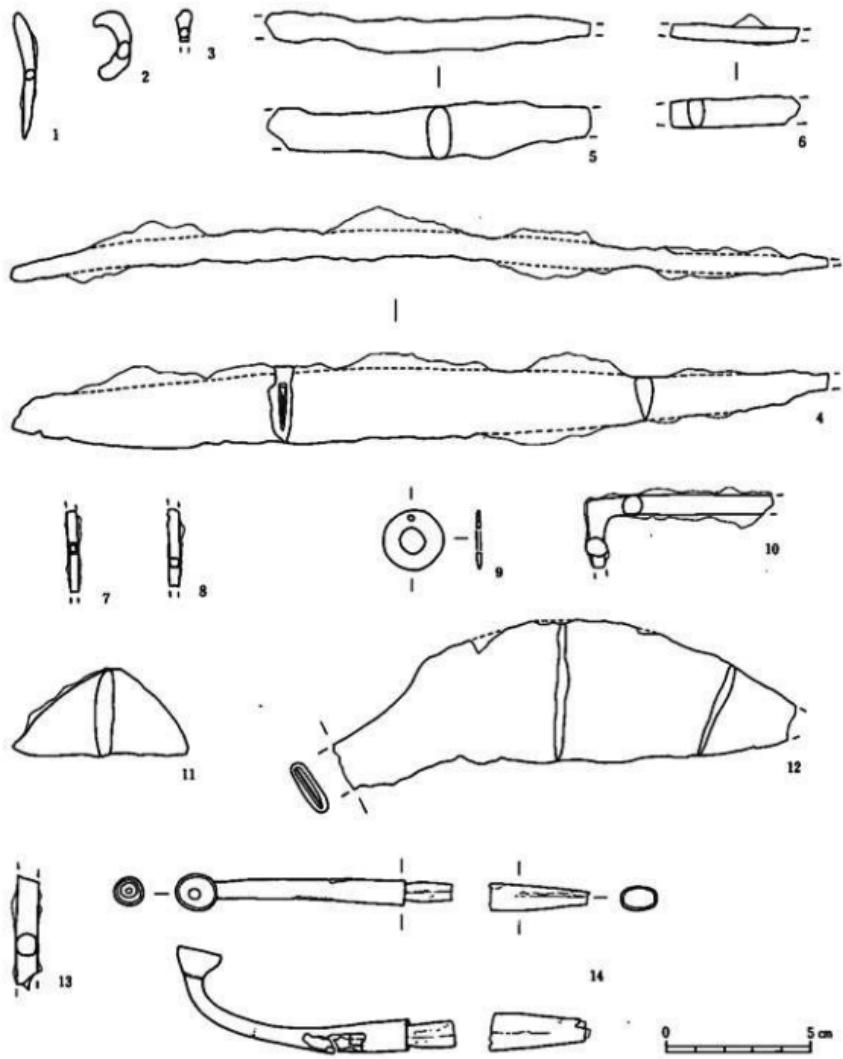
## (4) 上条千秋氏教示

上記文献以外の参考文献

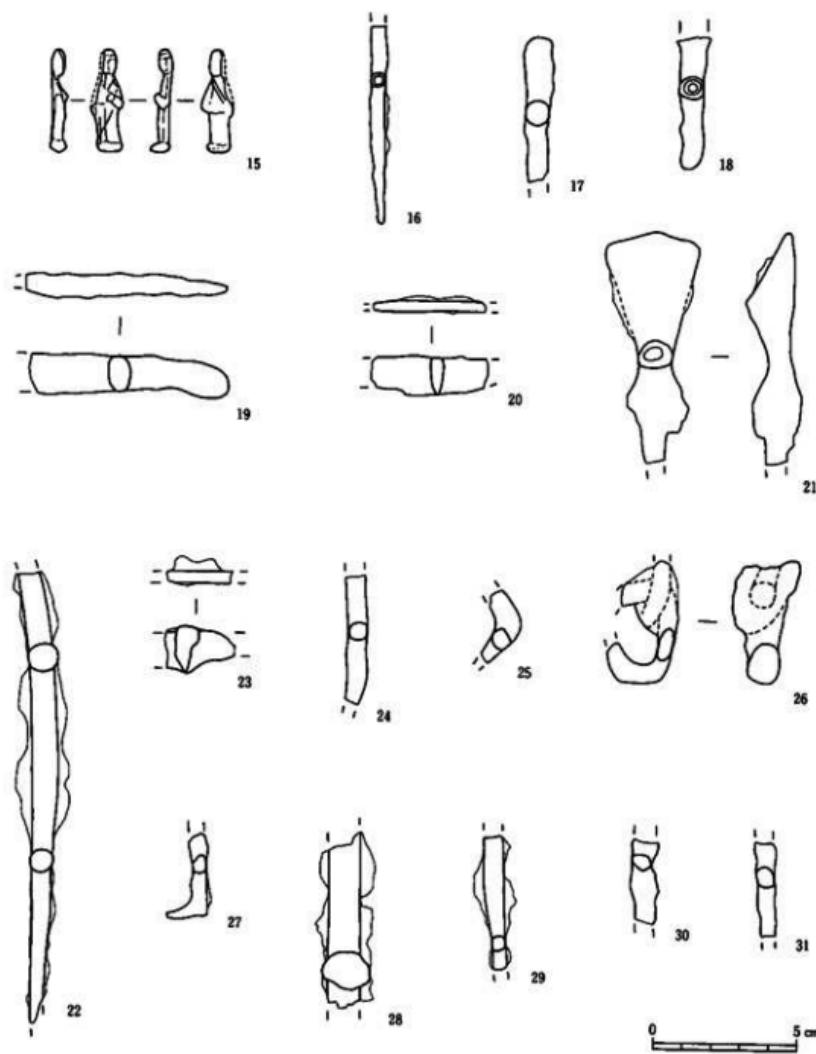
土井義夫「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」『物質文化』18 1971

都立第一高校内遺跡調査団「江戸——都立第一高校地点発掘調査報告書——」1985

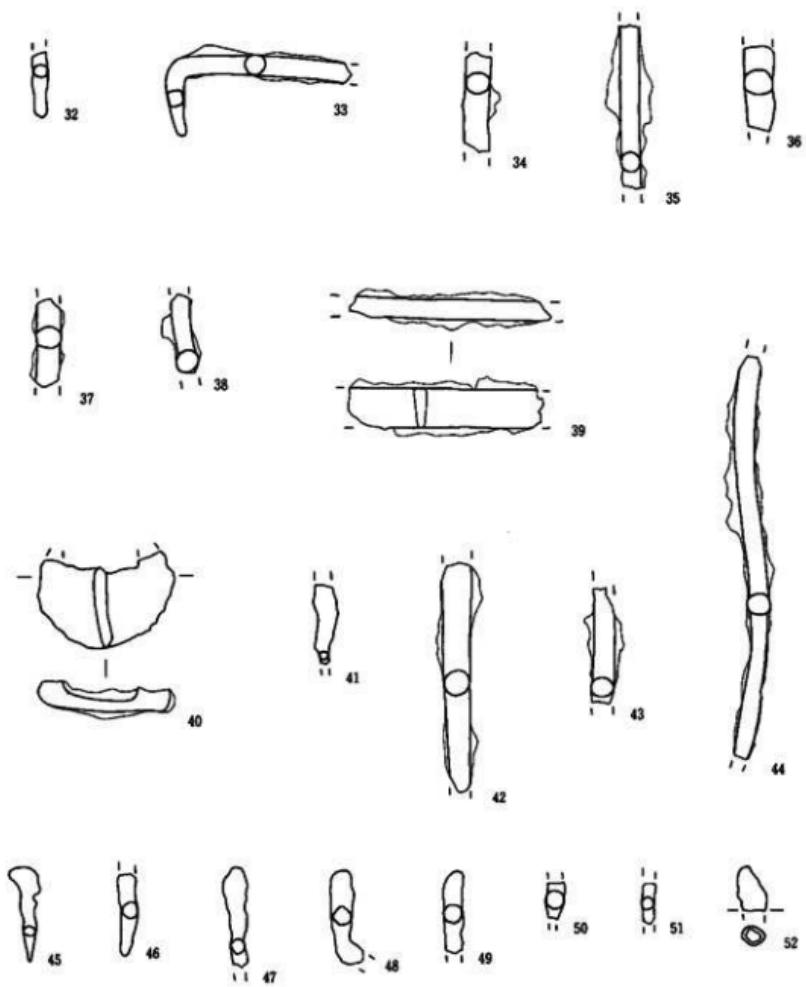
高畠幸男「火の道具」柏書房 1985



第67図 出土金属器 (1)

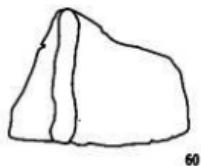
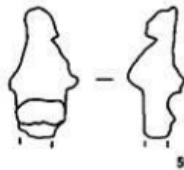
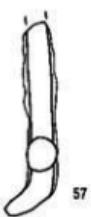
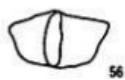
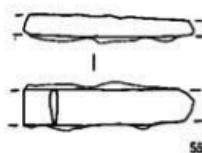


第68図 出土金属器 (2)



0 5 cm

第69図 出土金属器 (3)



0 5 cm

第70図 出土金属器 (4)

表8 金属器(含鉄)一覽表

No.	出土点	目 標	長さ	巾	厚さ	重 量 (g)	材質状況	圖 形	記 号	出土地点	器 形	寸 法(cm)	重 量 (g)	材質状況	圖 形		
1	P.1	鉗	(4.4)	0.5	0.5	1.4	上 鋸 欠	刀	子	39	土 壤 95	刀	1.9	1.2	22.7 鋼 欠		
2	*	*	(2.3)	0.7	0.5	1.4	下 鋸 欠	不 明	(4.6)	40	土 壤 99	刀	2.7	0.8	13.8 一 鋼 欠		
3	*	不 明	(0.4)	0.4	0.3	上 下 欠	鉗	(2.8)	41	土 壤 99	鉗	0.7	0.8	1.7	上 欠		
4	P.14	刀 子	(28.4)	2.8	0.8	14.1	大 鋸	刀	子	42	土 壤 103	鉗	1.1	1.2	16.4 *		
5	P.18	*	(11.3)	1.5	1.1	29.3	前 鋸 欠	鉗	子	43	*	(4.1)	1.2	0.9	5.3 *		
6	P.20	*	(4.5)	1.2	0.5	5.9	*	*	*	44	土 壤 235	*	(13.8)	1.1	1.2	16.2 *	
7	棒 端 2	鉗	(2.8)	0.6	0.5	0.7	上 下 欠	鉗	子	45	*	87	3.4	1.0	0.7	1.1	
8	*	*	(2.7)	0.5	0.4	*	*	*	*	46	*	(2.9)	0.6	1.4	上 鋸 欠		
9	棒 端 3	壓 全	2.1	2.1	0.1	2.2	空	No.15	鉗	47	*	(3.5)	0.5	0.5	1.9 下 欠		
10	中央部 布 状 鉄 器	(6.5)	0.9	0.7	11.4	片 方 欠	土壤 99	鉗	子	48	*	(3.3)	0.7	0.7	2.7 *		
11	K.地 点 不 明	6.1	3.1	1.1	21.8	空	土壤 99	鉗	子	49	*	(2.8)	0.7	0.6	2.3 *		
12	北京 地	(16.1)	4.8	0.5	16.5	前 鋸 欠	土壤 99	鉗	子	50	*	(1.3)	0.7	0.6	0.7 ほとんど欠		
13	*	鉄 状 鉄 器	(4.1)	0.8	0.9	6.7	上 下 大	*	*	51	*	(1.5)	0.3	0.3	失 境 の ん		
14	南 葛 烏 合 七 チ キ	(13.2)	3.8	1.3	8.2	*	圓 扇 *	*	*	52	*	(1.6)	0.8	0.6	1.4 銅 錫 の ん		
15	鐵 1	化 鋼	3.5	1.2	0.7	4.7	6 鋸 欠	土壤 99	鉗	53	土壤 27	鉗	5.1	2.5	1.8	5.3 鋼 錫	
16	*	鉗	(6.8)	0.6	0.5	2.5	上 鋸 欠	鉗	子	54	土壤 150	不 明	(3.6)	0.6	10.0	鉄 錫 鋼 錫	
17	*	鉄 状 鉄 器	(4.9)	1.0	0.8	1.4	頭 鋸 の ん	鉗	子	55	土壤 151	不 明	(5.9)	1.6	0.8	11.8 鋼 錫 大 欠	
18	*	鉄 状 鉄 器	4.5	1.2	1.1	5.2	空	No.5	鉗	56	土壤 153	不 明	3.5	1.8	0.6	6.9 鋼 錫	
19	*	刀 子	(6.8)	1.5	0.8	12.1	易 鋸 の ん	No.4	鉗	57	土壤 154	鉗	(6.6)	1.2	1.0	上 鋸 欠	
20	*	*	(4.1)	1.4	0.5	0.7	鋸 後 大	No.6	鉗	58	*	(2.9)	1.0	1.1	3.9 *		
21	*	不 明	(8.0)	3.3	1.7	34.5	下 鋸 欠	No.5	鉗	59	土壤 187	刀 子	7	(4.6)	2.3	1.9	14.3 *
22	核 11	鉄 状 鉄 器	(15.6)	3.8	1.5	35.5	上 鋸 欠	No.1	鉗	60	土壤 231	不 明	5.2	4.6	30.0	鉄のもののがつくか	
23	土 壤 2 73	刀 子	(2.4)	1.6	1.6	3.3	鋸 後 大	No.1	鉗	61	*	(7.9)	1.3	0.7	9.0 実		
24	土 壤 3	鉗	(4.4)	0.7	0.6	3.5	上 下 大	下 鋸	鉗	62	12 住	不 明	18.4	3.4	3.6	48.7 実	
25	土 壤 4	*	(2.5)	0.9	0.9	2.6	*	*	*	63	16 住	鉗	(12.7)	1.6	1.2	23.7 上 鋸 欠	
26	土 壤 20	鉄 状 鉄 器	(4.2)	2.0	2.2	16.3	一 鋸 大	鉗	子	64	P.4 鉗	鉗	3.2	*	*	*	
27	土 壤 34	鉗	(2.8)	0.5	0.7	3.1	上 鋸 大	鉗	子	65	P.5 鉗	鉗	6.9	*	*	*	
28	土 壤 47	鉄 状 鉄 器	(6.1)	1.8	1.4	20.8	上 下 大	*	*	66	P.11 鉗	鉗	22.5	*	*	*	
29	土 壤 49	鉗	(4.2)	0.8	0.6	5.4	*	*	*	67	P.19 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	
30	*	*	(2.8)	0.8	0.6	2.0	*	*	*	68	P.24 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	
31	土 壤 58	*	(3.4)	0.7	0.7	2.4	*	*	*	69	P.30 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	
32	土 壤 60	*	(2.2)	0.5	0.5	1.0	上 鋸 大	鉗	子	70	P.31 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	
33	*	鉄 状 鉄 器	(6.4)	1.1	0.7	10.5	片 方 大	鉗	子	71	P.32 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	
34	土 壤 66	鉄 状 鉄 器	(3.4)	1.1	1.2	5.3	上 下 大	鉗	子	72	P.33 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	
35	*	*	(5.6)	1.5	1.8	12.8	*	*	*	73	P.34 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	
36	土 壤 94	*	(2.9)	1.0	0.8	5.3	*	*	*	74	P.35 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	
37	*	*	(2.4)	1.0	1.1	3.9	*	*	*	75	P.36 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	
38	*	鉗	(2.7)	0.9	0.7	3.1	*	*	*	76	P.37 鉗	鉗	22.5	2 片	*	*	

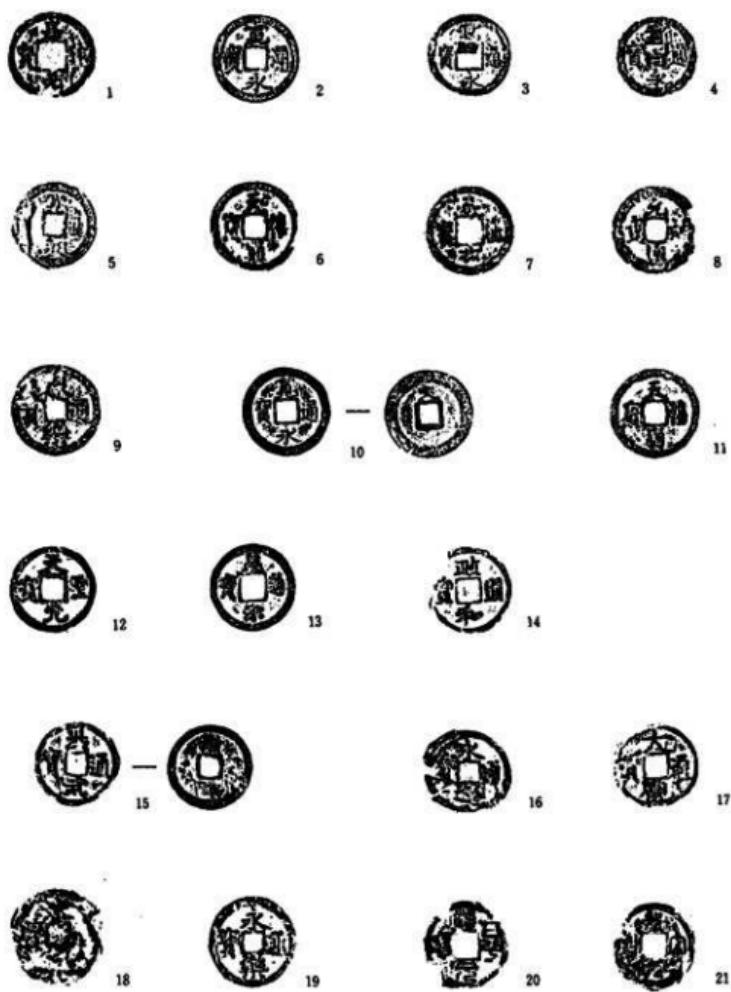
(2) 錢

古錢は計28枚の出土があった。遺構別では土壙212と墓1から6枚、竪穴12と土壙34で5枚、他は1枚ずつである。錢種は宋銭11、明銭4、寛永通宝が5、不明が8枚である。とくに墓1の6枚は被熱をうけ変形、腐食しているので、火葬の際六道銭として遺体にもたせたものとおもわれる。土壙34、212、竪穴12もこれと同様に錢を入れたものではないか。書体は元祐通宝が行書、熙寧元宝と聖宋元宝が篆書である他は真書である。

時期は初鋳年代から見ると天禧通宝の1,017年から寛永通宝の1,636年までであり、江戸時代には宋銭も使用されていたとのことであるから、17世紀半ば以降に使用されたものと思われる。

表9 錢一覽表

図No	出土地	名 称	初鋳年	径 (mm)	重量 (g)	備 考
1	竪 1	嘉祐元宝	1056	25	2.08	下部少し欠損
2	竪 12	寛永通宝	1636	24	2.76	No.2～5 他1枚(不明3.35g)重なって出土
3	◆	◆	◆		2.47	
4	◆	◆	◆		3.27	
5	◆	◆	◆		3.09	
6	横 34	天禧通宝	1017	24	1.50	No.8 他1枚(不明1.00g)重なって出土
7	◆	嘉祐通宝	1057	24		No.9と重なって出土(5.76g)
8	◆	元祐通宝	1093	25	0.92	
9	◆	永樂通宝	1408	25		
10	横 94	寛永通宝	1636	25	2.63	銘名明瞭 裏に文字「文」
11	横 212	天禧通宝	1017	25	3.35	No.11～16 ほとんど同一地点より出土
12	◆	天聖元宝	1023	24	2.79	
13	◆	皇宋通宝	1038	24	3.07	
14	◆	政和通宝	1111	24	1.95	一部欠損
15	◆	洪武通宝	1368	23	2.62	銘名明瞭 裏に文字「済」
16	◆	永樂通宝	1408		2.15	破片
17	P 15	大觀通宝	1107	24	2.84	周縁破損
18	墓 1	?			7.79 7.56	3枚ずつ重なって出土 被熱、腐蝕の為極端に変形している
19	墓 2	永樂通宝	1408	24	2.59	銘名明瞭
20	検出面	熙寧元宝	1068		1.75	破片
21	◆	聖宋元宝	1101	23	2.20	一部欠損



0 5 cm

第71圖 出土錢

### 3. 石器・石製品

本遺跡からは砥石、硯、凹をもつ石、石臼、台石などが出土した。

砥石は10点中7点が凝灰岩を用いており、住居址からの1を除くとすべてが片側を破損、或いは両加工した痕跡を見せてている。22号住居址出土の1はヒン岩製で線状を呈した使用の痕跡は他の砥石と同様であるが砥ぎの方向が定まっておらず、又使用の結果2以下のように特に砥面が凹んでもない。ほかには15も同住居址より出土したが置き砥用か、かなり硬い平石の中央部は擦りにより平滑となり表面に細かな線状の痕跡が残っている。10は側部に打撃を加え小さな抉りを入れたようである。恐らく手持ちの為の紐懸け用としたものだろう。

硯は2点である。11は海側の縁を欠いた為裏面に使用者が鋭いのみのような工具で海を割り出している。又砥石に使用した様な深い線状痕跡が残る。この11が緩やかに縁から陸に落ちるのに対し、12は急激に落ちている。大形で周囲は面取りしてある。裏面に縁は無く陸の減り方から見て使用頻度は11以上に高い。

13、14は中世の遺物によく見られる凹をもつ石である。常に安山岩製である。一体何の用途に使用したものであろうか。

石臼16は上部回転臼である。大きく破損するが直徑は27.5cm程になろう。周囲には開口方形の中、小の小穴が2個見える。

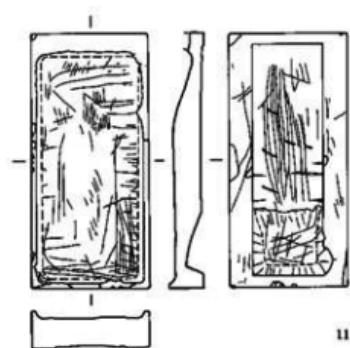
17は台石と思われる。ゴロッとした自然石であるが、上面を中心に一部側面迄起伏を残しながら滑らかな状態となっている。削られてはおらず、又痕跡も残ってはいないが、軟らかな対象物を長期にわたり擦ったような叩いたような結果と考える。

表10 石器・石製品一覧表

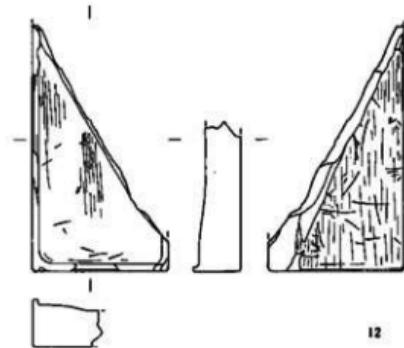
No.	品名	出土地	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	砥石	22住	17.2	7.4	4.8	626	砂岩	使用面5
2	*	舞	8.4	3.8	3.1	188.9	凝灰岩	* 4 上端に整形痕
3	*	*	8.8	3	2	56.69	*	* 3 *
4	*	土壁	27	10.6	4.9	3.2	(239)	多面利用
5	*	*	6.7	7.4	5	216	*	使用痕なし 自然礫か
6	*	土壁	95	(8.5)	4.5	3.4	(132)	砂岩
7	*	*	(8.2)	4.8	2.6	(186.6)	凝灰岩	* 4 上端に整形痕
8	*	土壁	99	(12.4)	3	(191.7)	砂岩	* 2 *
9	*	*	(6.1)	3	1.5	(40.9)	凝灰岩	* 2 *
10	*	土壁	153	(6.3)	2.8	2.1	(56)	*
11	硯	墓址	3	3.2	6.1	1.8	(252.8)	粘板岩
12	*	土壁	99	(12.6)	7.1	2.4	(258)	*
13	凹石	土壁	57	10.3	8.6	6.5	663	安山岩
14	*	土壁	209	7.3	7.3	5.8	344	*
15	砥石?	22住	33	31	7.6	8,750	砂岩	表面は擦りにより平滑化
16	石臼	土壁	95	(13.7)	(14.8)	9.4	1,950	安山岩
17	台石	土壁	137	13.5	15.7	8.7	2,300	*



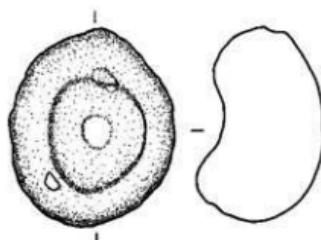
第72図 出土石器 (1)



11

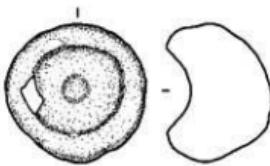


12

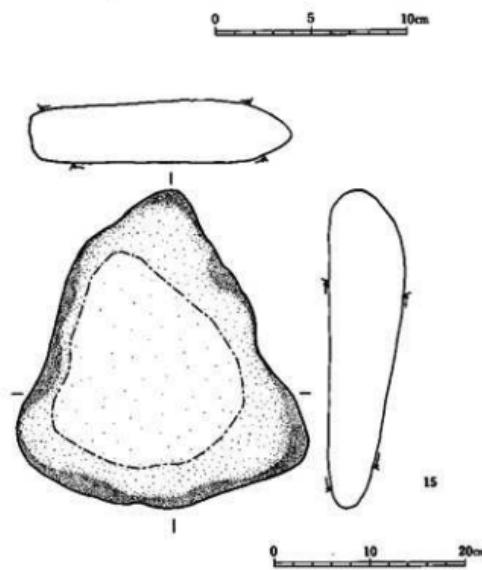


13

14



15



16

17

第73図 出土石器 (2)

## 第4章 調査のまとめ

まず今回特記すべき遺構として弥生時代末期～古墳時代初頭の住居址11軒、土壙などをあげなくてはならない。これらからの遺物としては高環、小形高環、甕、壺、小形壺、鉢などの土器類を得ているがいずれも量的にはさほど多くはない。これらは弥生時代後期の様相を持ちながら古墳時代的要素も備え始めており、類例は県内でも少ないようである。遺構について見るならば住居址は5軒が小形の浅い4個の柱穴をもち、炉は西、又は東側の柱穴の間や中央寄りに位置し、その形態は地焼、石置、土器埋設、石匂などさまざまである。炉内及び炉周辺には焼土、炭化物なども概して少なくこの点興味深いものである。又住居址間での新旧関係はなく、遺物を見てもこれらはほとんど同時に存在していた事をうかがわせる。そしてやや時間を置き、古墳時代後期の住居址1軒と建物址がつくられる。この時期に近いものとしては島立では以前の調査で既に数ヶ所を確認している。次に見られるのは平安時代後期の住居址である。この2軒は石芯カマドが北寄りにつくられている。住居址以外では多数の土壙のなかにも遺物から該期のものを探し出すことができるが、やはりその数は少ない。

以下のものについては遺構別に見てゆく。第1検出面にて竪穴状遺構、土壙としたものがある。出土遺物には白磁、青磁、青白磁といった輸入磁器が見えており、これらには14～16世紀に一つの隆盛を、又近世陶磁器については19世紀後半という時代に量的な中心を見る事ができる。なお竪穴状遺構からの觀音像は非常に小形の铸造仏で松本平でも数少ない出土仏となった。建物址は35棟あり調査地内でも占地状況にその傾向を見る事ができる。北側には他の遺構は少なくこれらが整然と並びこのうちで規模の大きなものは大型の土壙（竪穴）を付属させる。ともに中世に属するものであろうが遺物は少なく用途は不明である。墓と判明した土壙は土葬墓で、他に火葬墓が検出され、副葬された六文銭、土器類をみると中世末期～近世初頭の時期を与える事ができ両者の葬法は共に行なわれていたものと考える。なおこの墓の規模についてはピット大のものから、住居址の大の広さまであり、その規模と墓域は限定された様子がないように見える。これらの他には数本の溝がある。現在の水路と畦畔から考へて、水流の痕跡を残す溝3本にその原型を求めているが、そうすると現在地の水田の歴史は19世紀後半以降となる。

さて今回の調査では弥生末期～古墳時代初頭の遺構は更に東方乃至西側へ伸びるように分布する。これらはここからどのように展開し又、堀川添いで検出した弥生後期の遺構は本調査地へどのように関わるか今後の問題である。

注1 県産文センター年報2、1985

# 図 版





1住  
遺物出土状況



同カマド

第1図版 住居址 (1)



1住 遺物出土



同



同



1住  
(西から)

第2図版 住居址 (2)



調査地近景  
(北から)



11住  
(北から)



同カマド

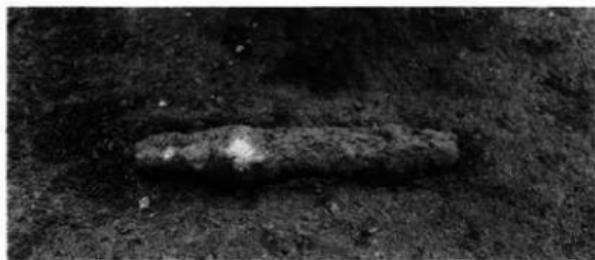
第3図版 住居址 (3)



12住  
(南西から)



同  
遺物出土



同  
遺物出土

第4図版 住居址 (4)



13住  
遺物出土状況  
(東から)

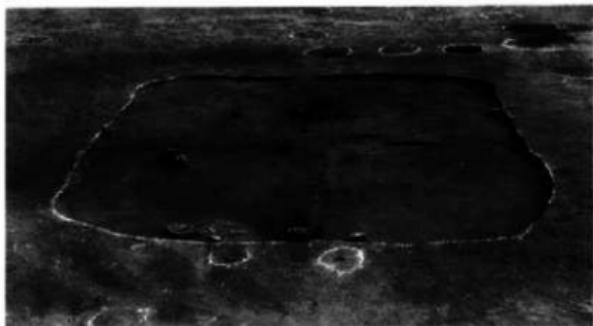


同  
遺物出土



13住  
(北から)

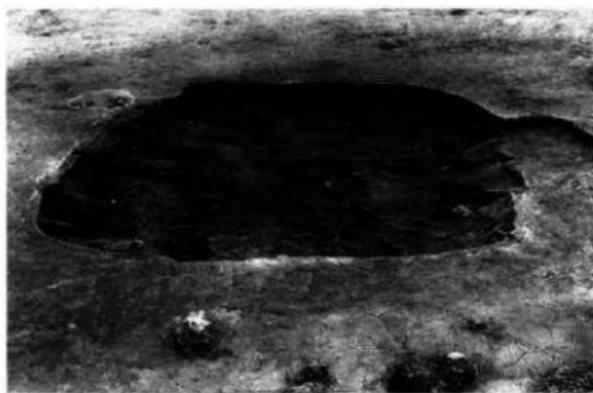
第5図版 住居址 (5)



14住  
遺物出土状況  
(西から)



14住  
(東から)

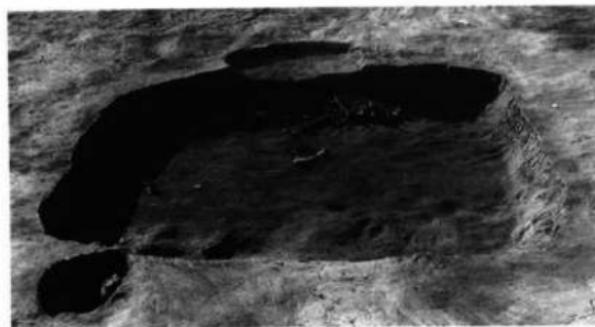


15住  
炭化木材出土  
(北から)

第6図版 住居址 (6)



15住  
炭化木材



同  
遺物出土状況

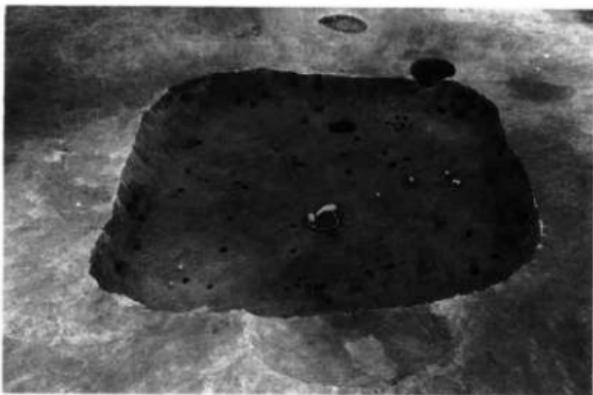


同 西壁厚  
遺物

第7図版 住居址 (7)



15住  
遺物出土



15住  
(西から)

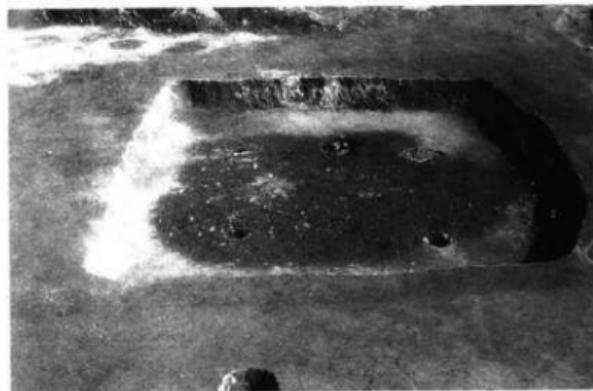


同 炉址

第8図版 住居址 (8)



16住  
遺物出土状況  
(東から)



16住  
(西から)

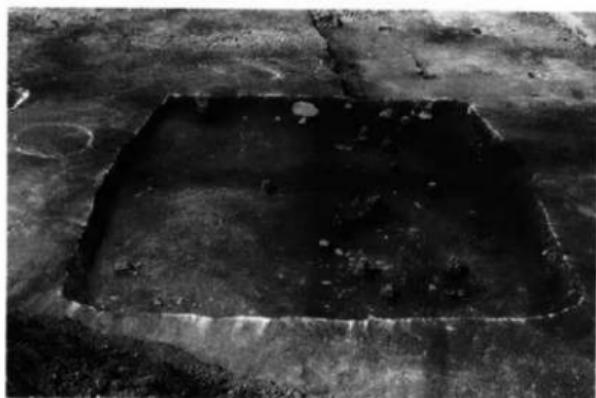


同 遺物出土



同

第9図版 住居址 (9)



17住  
遺物出土状況  
(東から)



17住  
(東から)



同 遺物出土



同 壷址

第10図版 住居址 (10)



18住  
遺物出土状況  
(北から)

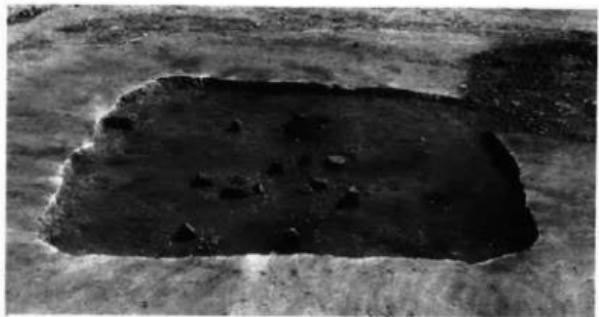


同  
遺物出土

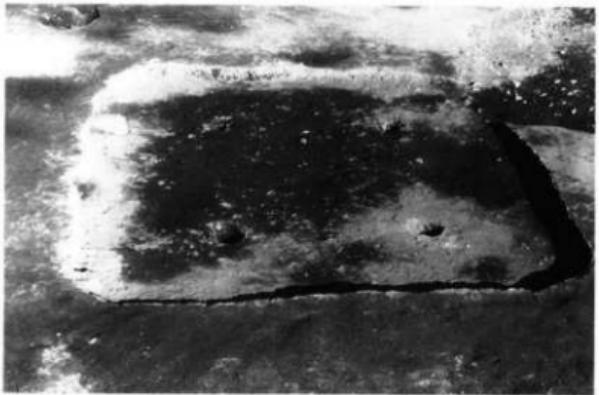


18住  
(西から)

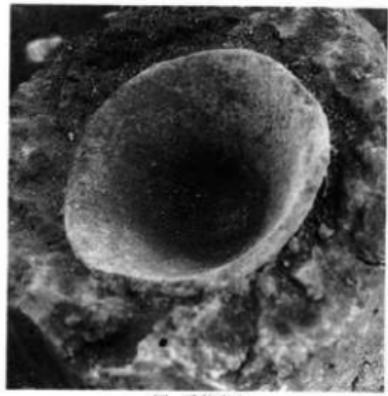
第11図版 住居址 (1)



19住  
遺物出土状況  
(西から)



19住  
(北から)

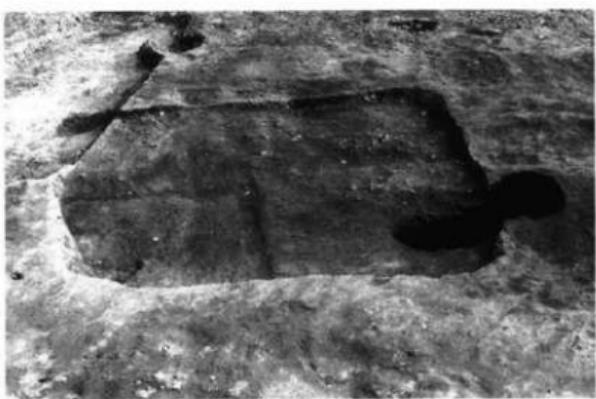


同 遺物出土



同 炉址

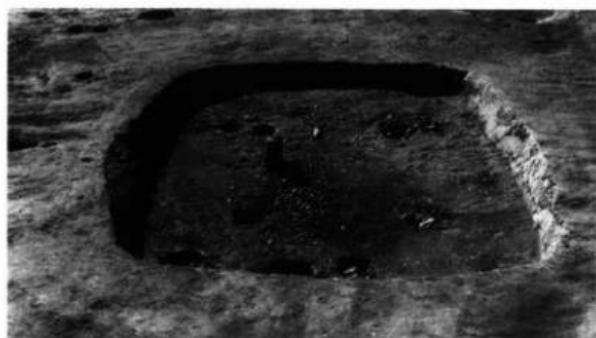
第12図版 住居址 (12)



20住 (北から)



21住 遺物出土状況 (南から)



21住  
(東から)

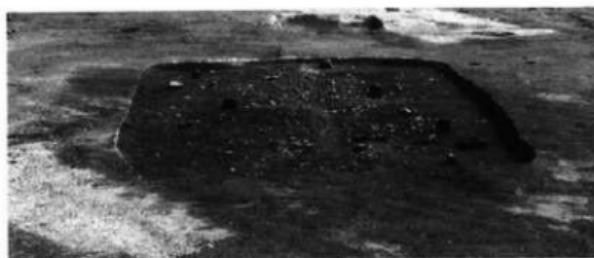


同 遺物出土

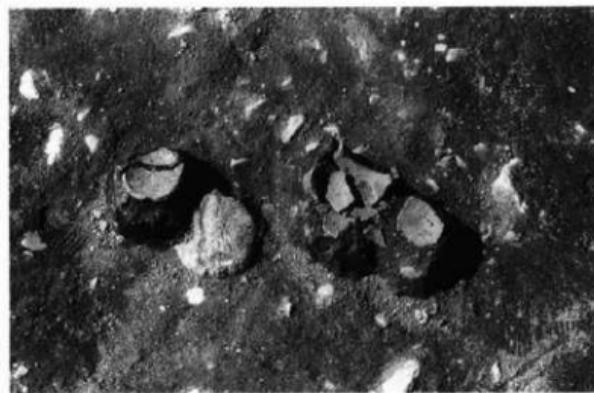


同 炉址

第14図版 住居址 (14)



22住  
遺物出土状況  
(西から)



同 遺物出土

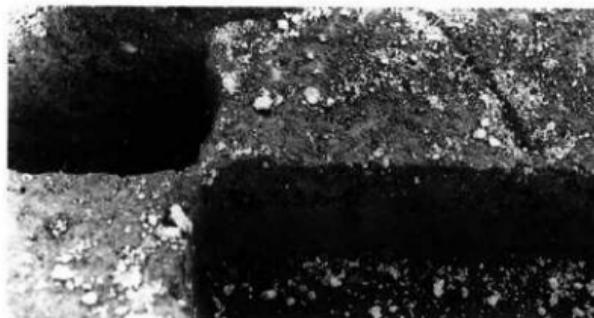


22住  
(東から)

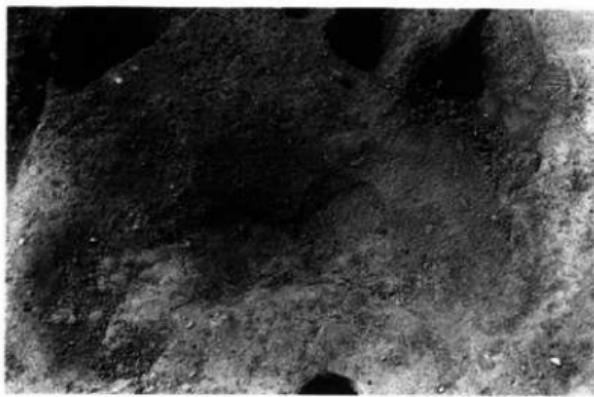
第15図版 住居址 (15)



23住  
(西から)



同 炉址断面

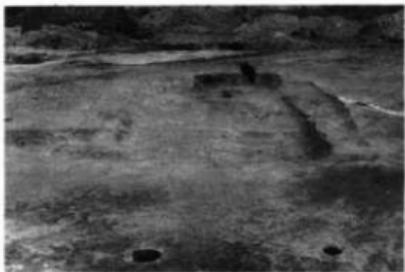


同 炉址

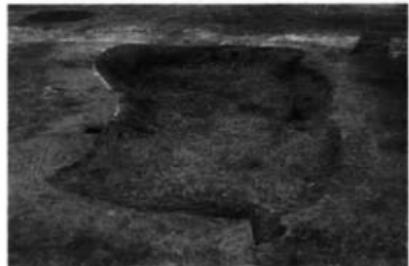
第16図版 住居址 (16)



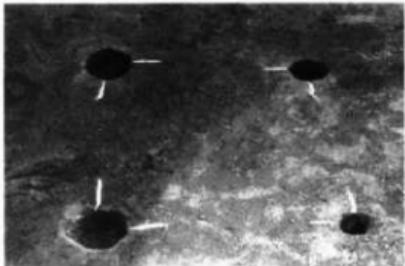
豊穴状遺構 1 遺物出土状況 (南から)



豊穴状遺構 1 (南から)



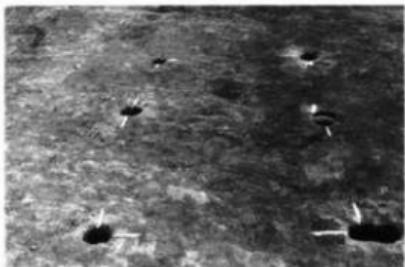
豊穴状遺構 2 (南から)



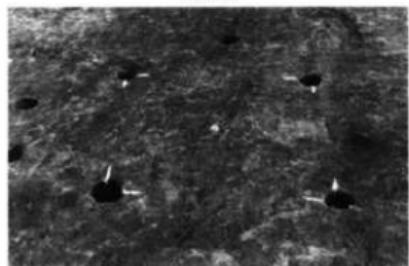
建物址 1



建物址 2



建物址 3



建物址 4

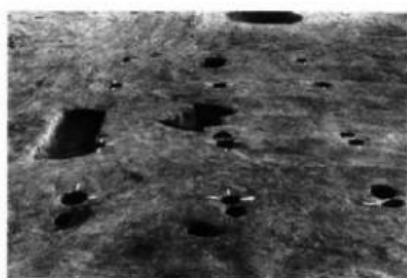


建物址 5

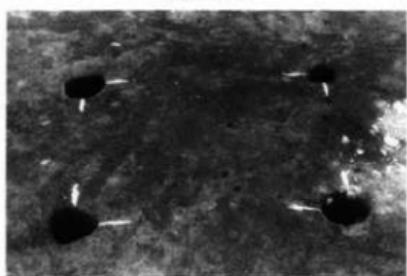
第17図版 豊穴状遺構・建物址 (1)



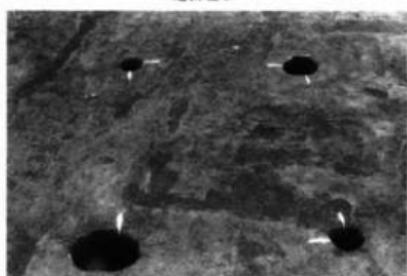
建物址 6・7



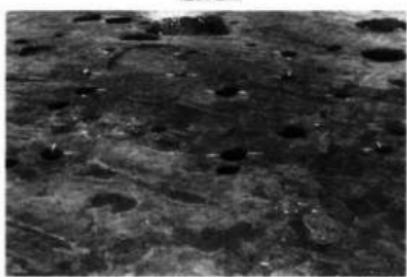
建物址 9



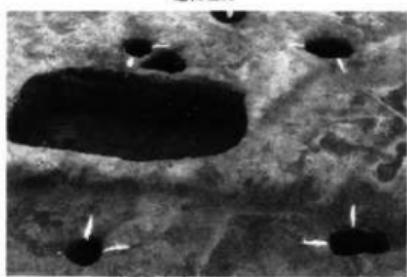
建物址 10



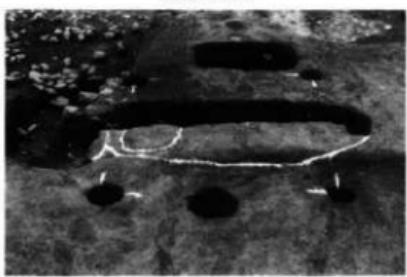
建物址 11



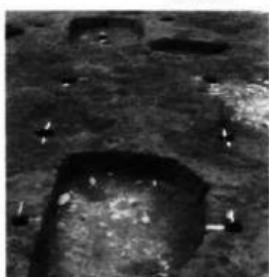
建物址 12・13



建物址 14

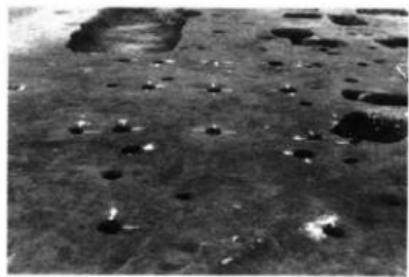


建物址 15

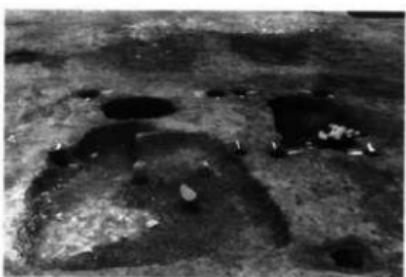


建物址 16

第18図版 建物址 (2)



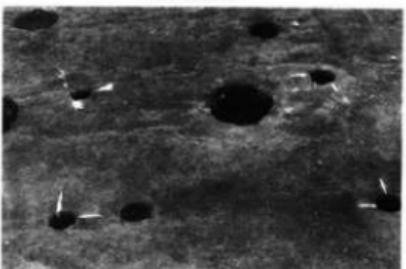
建物址 8・17・18



建物址 19・20



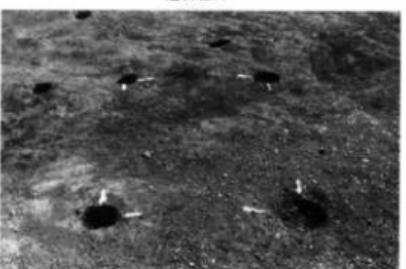
建物址 22・23



建物址 24



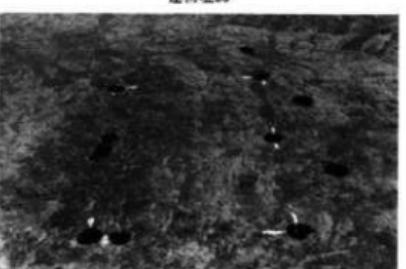
建物址 25



建物址 26

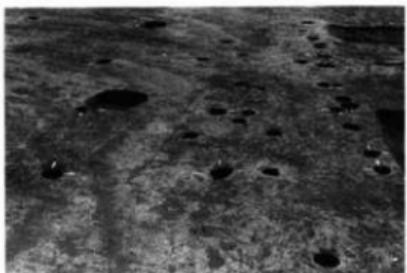


建物址 27

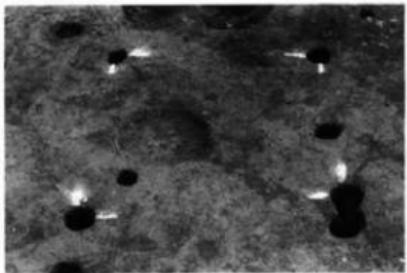


建物址 28

第19図版 建物址 (3)



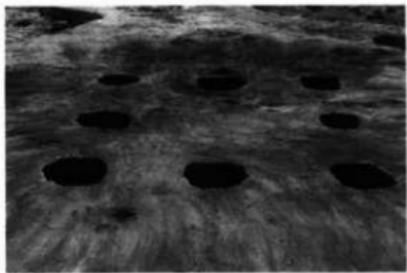
建物址29



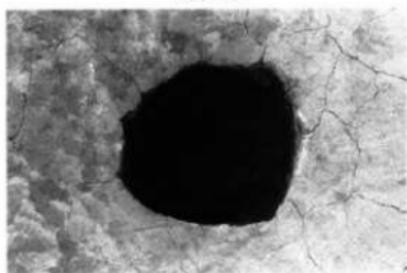
建物址31



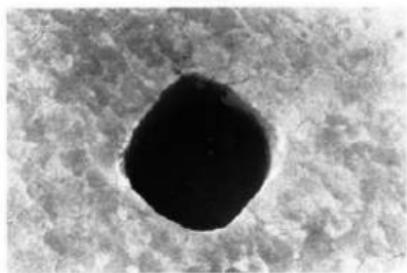
建物址41



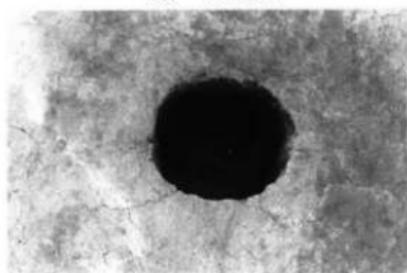
建物址42



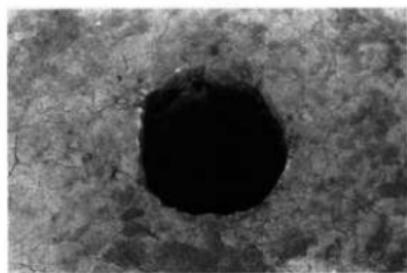
P 36 (建物址42)



P 37 (同)



P 38 (同)



P 42 (同)

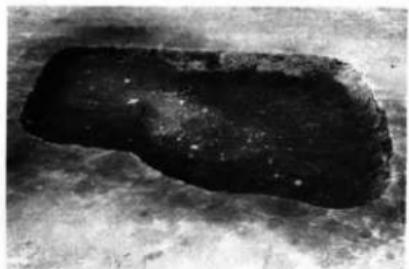
第20図版 建物址 (4)



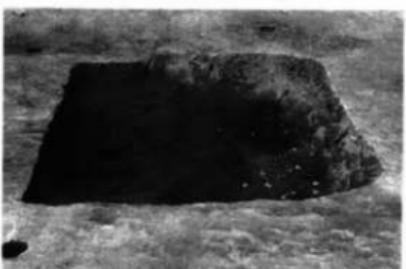
豊穴状遺構11 (北から)



豊穴状遺構12 (北から)



土壙1



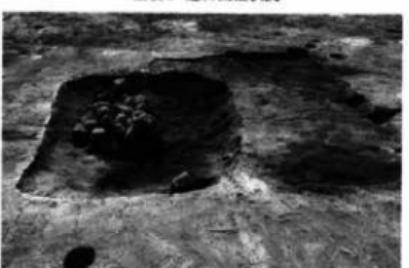
土壙2



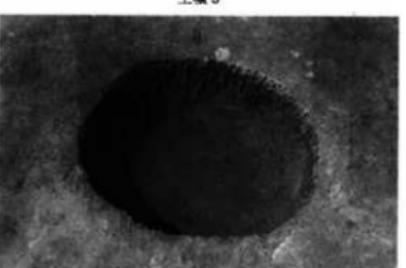
土壙3 遺物出土状況



土壙3

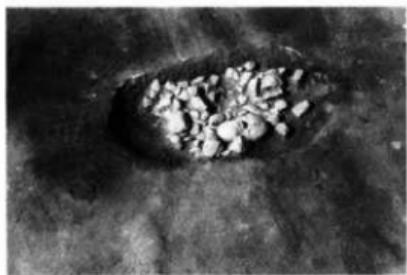


土壙4・5



土壙13

第21図版 土壙 (1)



土壤14



土壤20



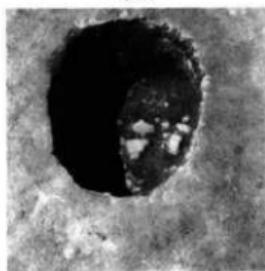
土壤21



土壤27



土壤28・29



土壤30

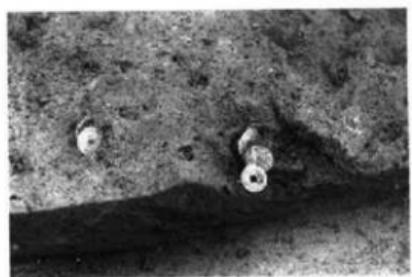


土壤32

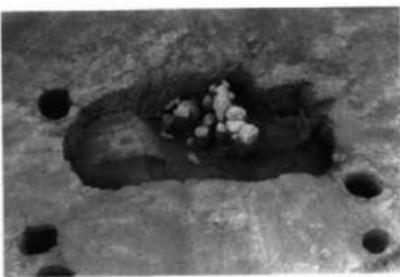


土壤33

第22図版 土壤 (2)



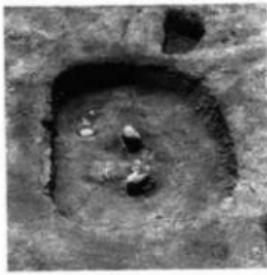
土壤34



土壤38



土壤43



土壤45



土壤46



土壤50



土壤53

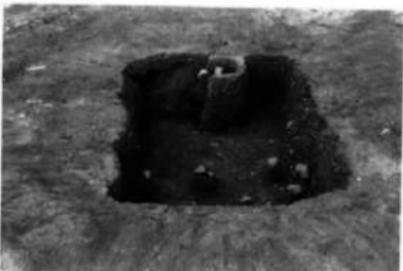


土壤57

第23図版 土壌 (3)



土壤58・59



土壤60



土壤61

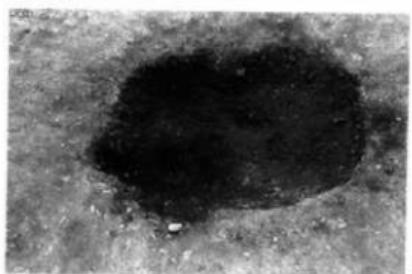


土壤64

土壤69  
土壤71



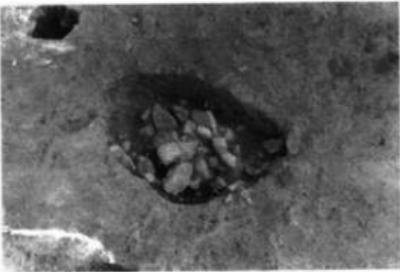
土壤70・116



第24図版 土壌 (4)



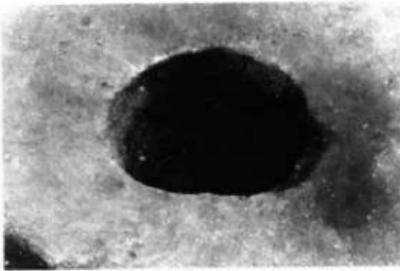
土壤74



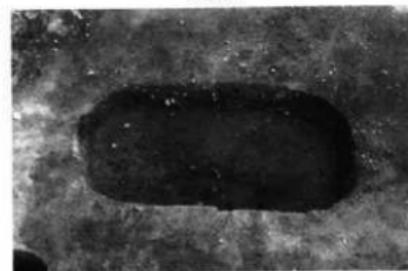
土壤75



土壤80



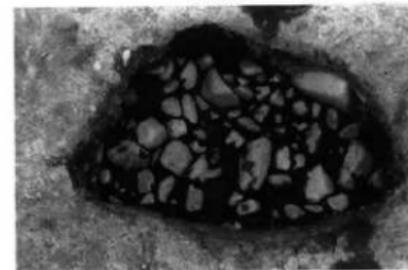
土壤93



土壤94



土壤94 遗物出土



土壤95 遗物出土状况

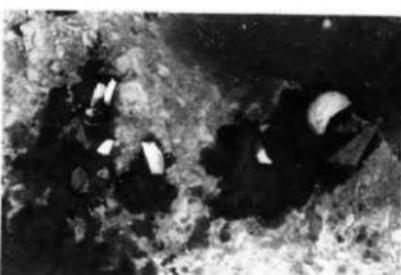


土壤95 遗物出土

第25図版 土壤 (5)



土壤99



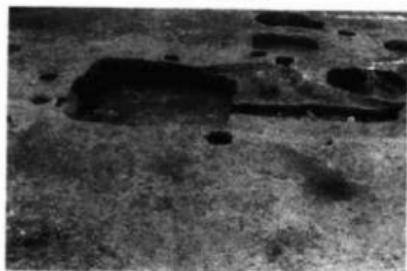
土壤99 遗物出土



同 遗物出土



同 遗物出土



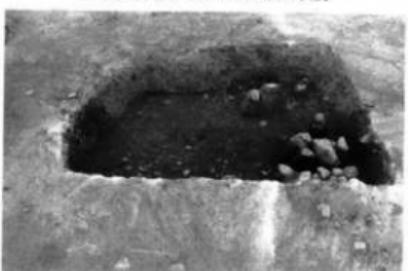
土壤111・185



土壤112・113・116 遗物出土状况



土壤112・113・116

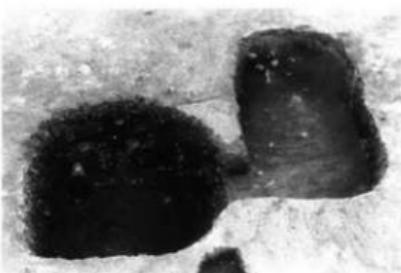


土壤119

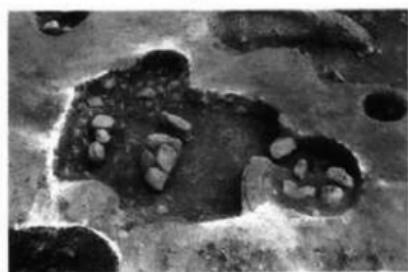
第26図版 土壤 (6)



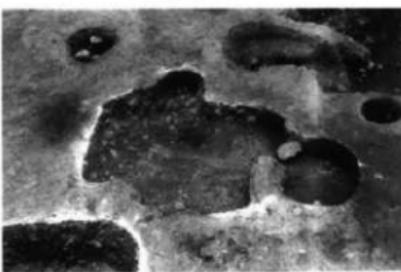
土壤121



土壤123・124



土壤125 遗物出土状況



土壤125



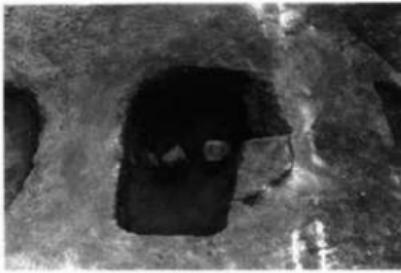
土壤130



土壤132



土壤135 遗物出土



土壤136・188

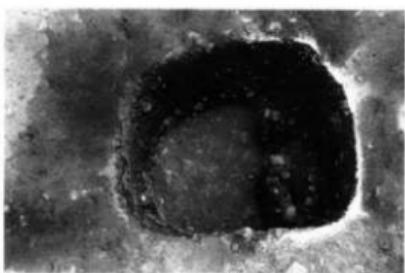
第27図版 土壤 (7)



土壤99・135・136・175・176・183



土壤139・140・141・142・182・186



土壤147



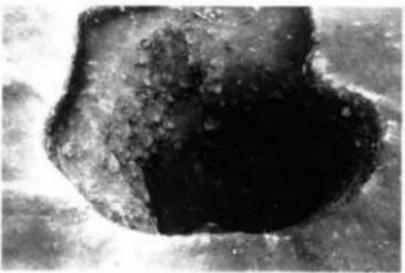
土壤148



土壤154 遗物出土状况



土壤154

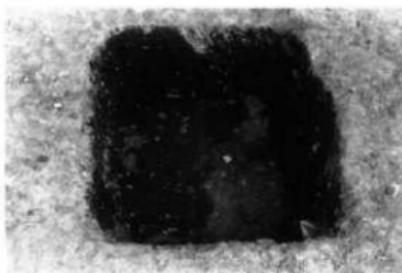


土壤158



土壤172 遗物出土状况

第28図版 土壌 (8)



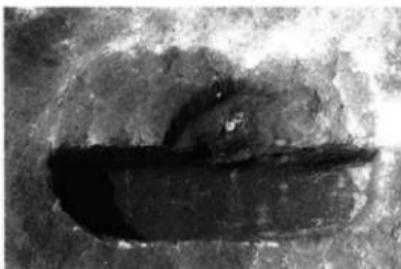
土壤187



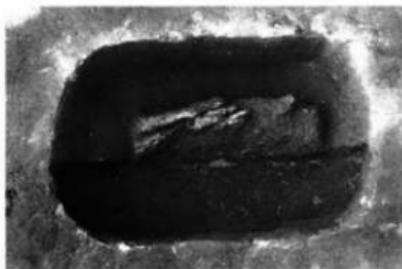
土壤201



土壤209



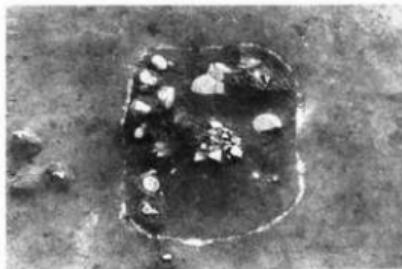
土壤212 (线)



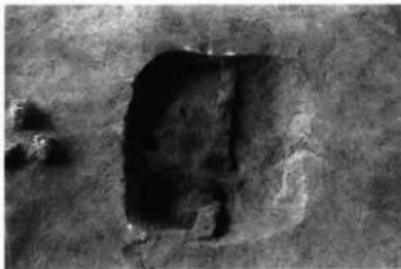
土壤212



土壤212 人骨出土

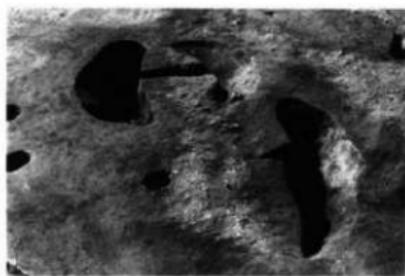


土壤224 遗物出土状况



土壤224

第29図版 土壤 (9)



土壤221～223



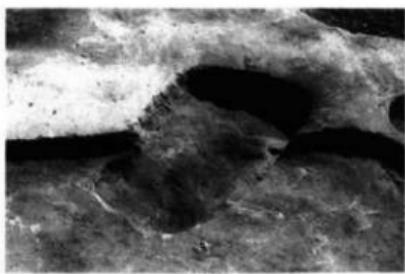
溝11 土壤227



土壤227



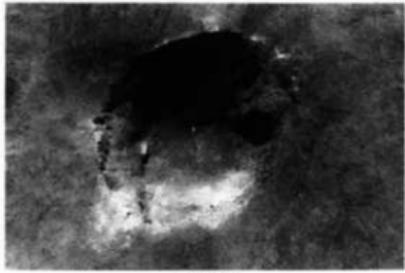
土壤227 遺物出土



土壤231



土壤237 遺物出土状況

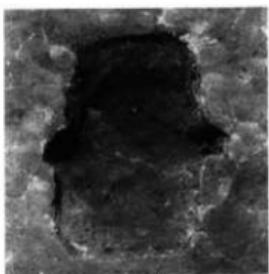


土壤237

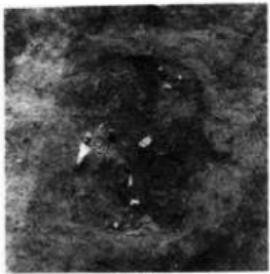


土壤238

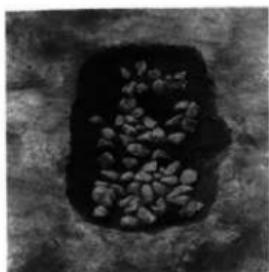
第30図版 土壤 (10)



墓址 1



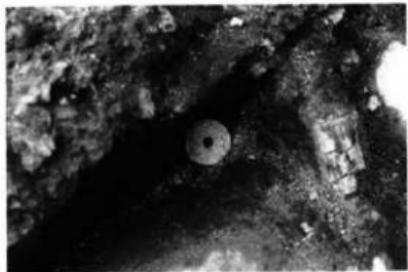
墓址 2



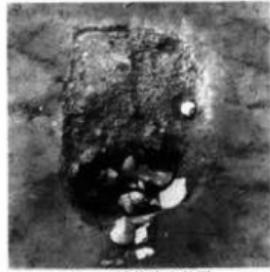
墓址 2  遺物出土狀況



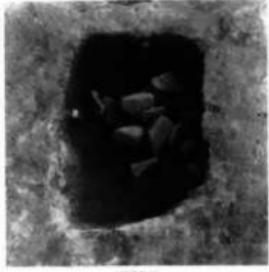
墓址 2  人骨出土



墓址 2  遺物出土



墓址 3  遺物出土狀況

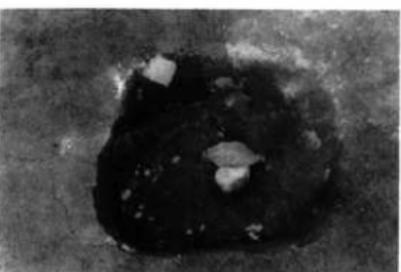
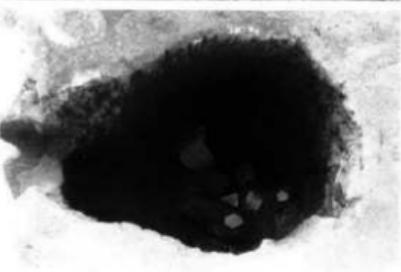
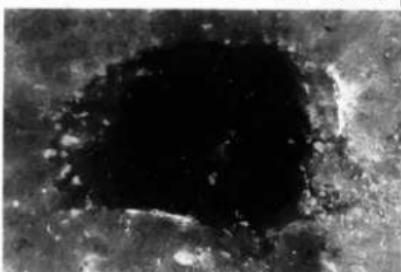
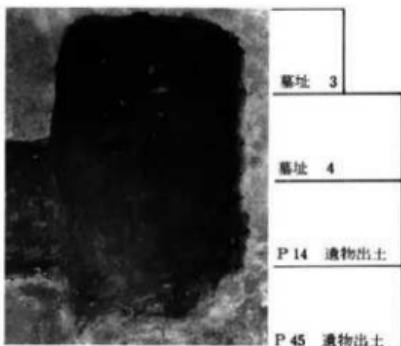


墓址 3



墓址 3  遺物出土

第31図版 墓址 (1)



第32図版 墓址 (2) ピット



104



106



110



112



130



129

第33図版



132



133



134



135



138



139

## 第34図版



137



143



150



158



160 第35図版



161



162



166

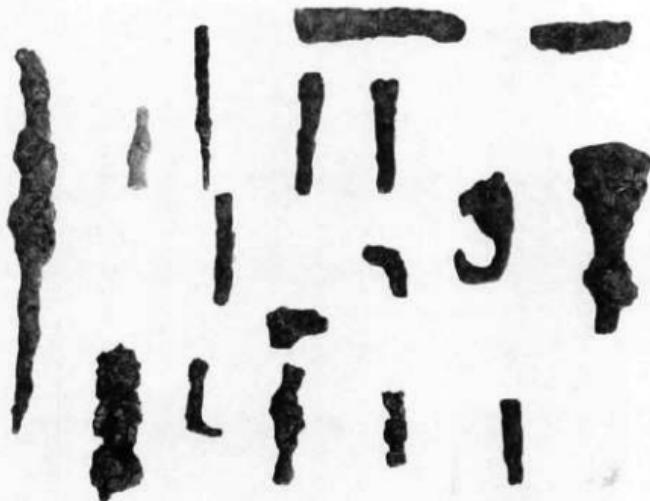


仏像（正面）



仏像（侧面）

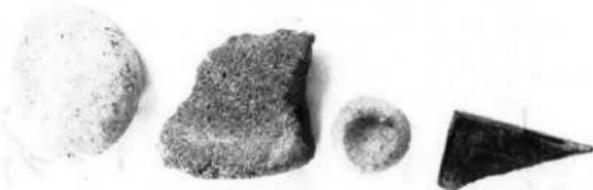
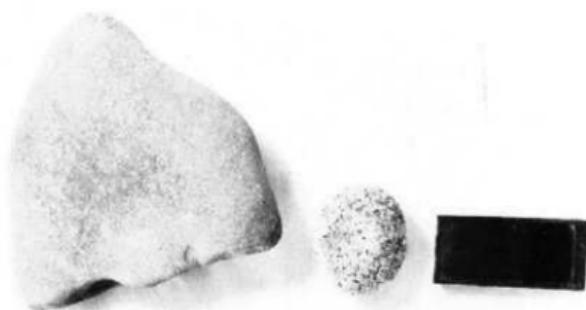
第36図版



第37図版



第38図版



第39図版

---

---

松本市文化財調査報告No57

## —松本市島立三の宮遺跡—

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月30日 発行

発行 松本市教育委員会

印刷 中信凸版印刷株式会社

---